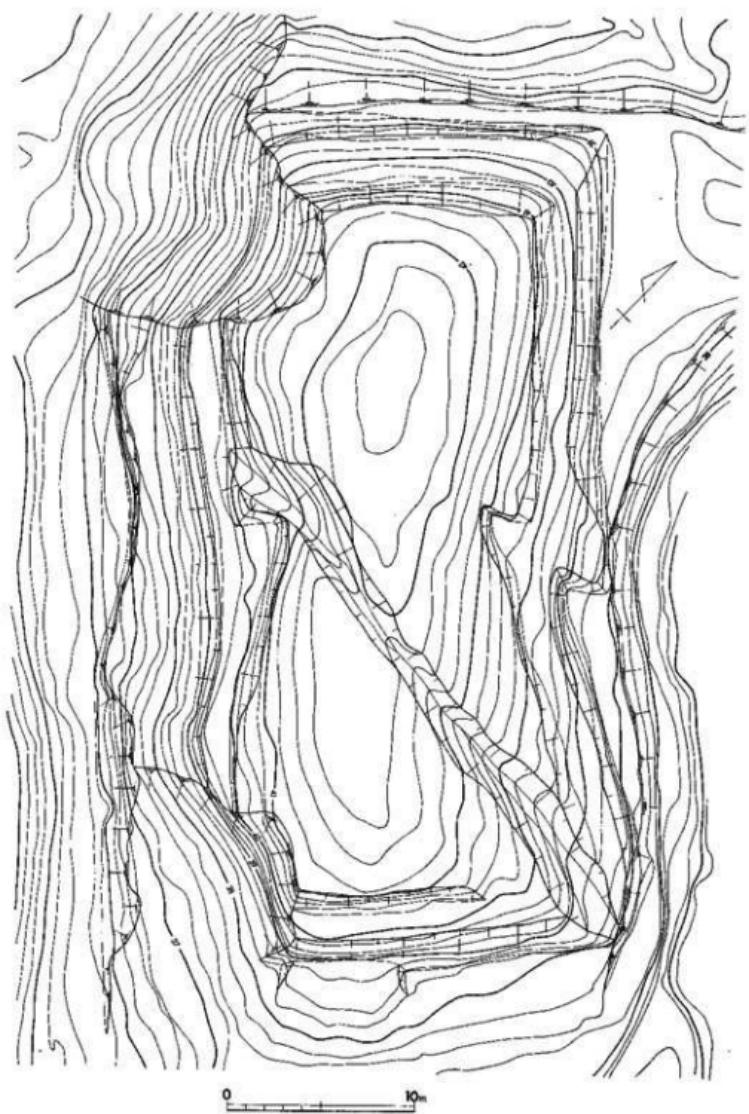
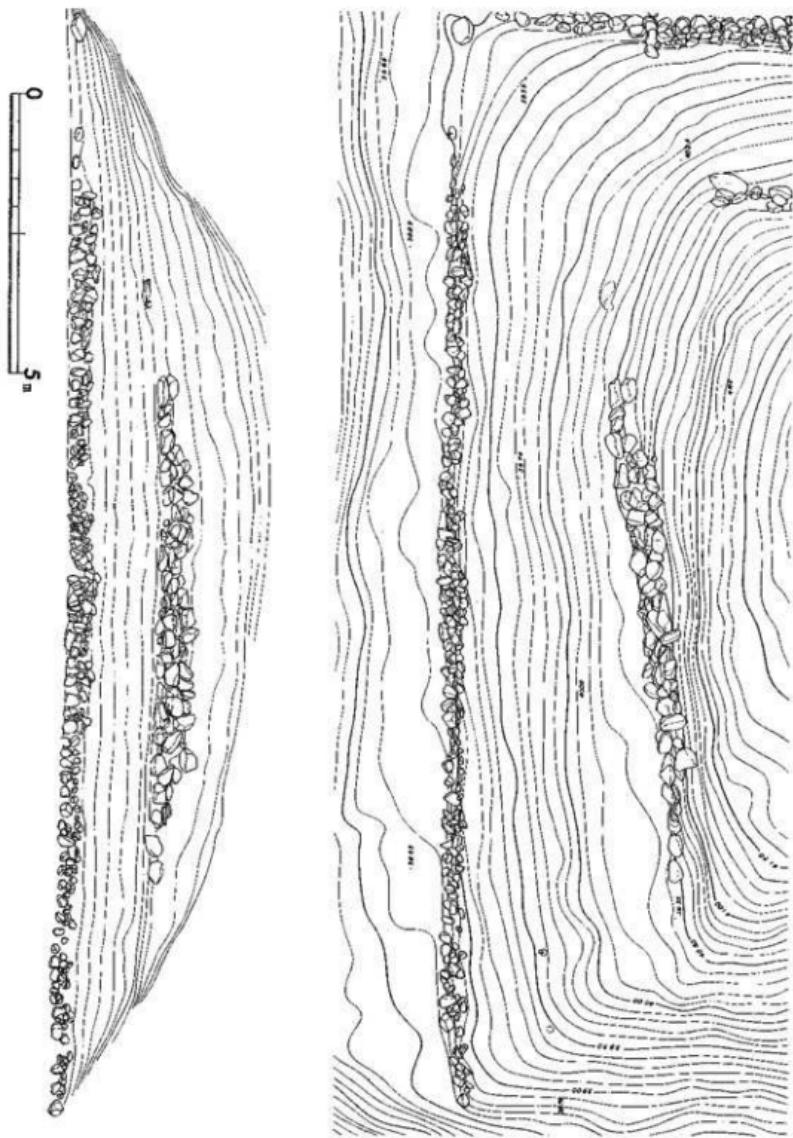


第102図 古曾志大谷1号墳堆丘横断土層実測図



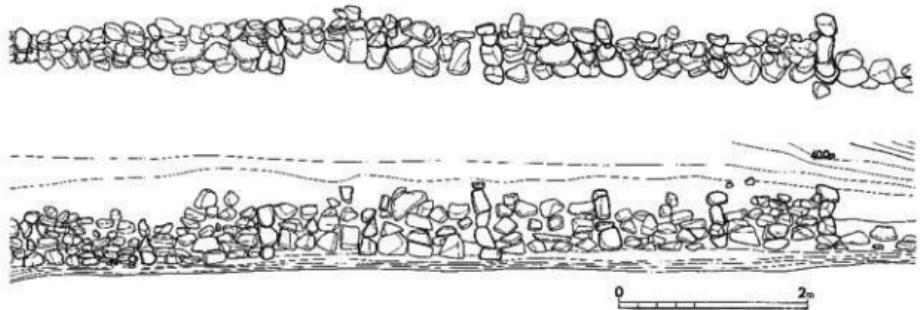
第103図 古曾志大谷1号墳盛土完掘後地形測量図



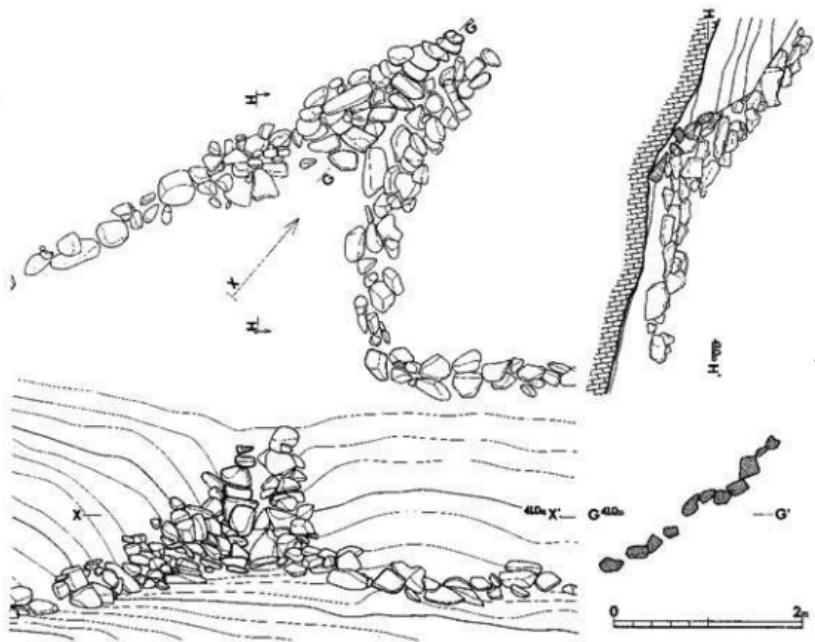
第104図 古善志大谷1号墳後方部北西側臺石測量図(上:平面、下:立面)



第105図 古曾志大谷1号墳北東側墓石測量図(図中番号は埴輪実測図番号と同じ。上:平面 下:立面)



第106図 古曾志大谷1号墳後方部北東面1段目墓石配列状況実測図(上:平面、下:立面)



第107図 古曾志大谷1号墳北東側くびれ部墓石検出状況実測図

**長軸土層の観察（第101図）** 長軸の土層はほぼ墳丘中軸に沿ったKライン（第100図）とやや北東に下がった前方部と後方部の境付近（第101図I-J断面）で実測を行った。地山は緩やかに前方部に向かって下がっており、頂部にはほぼ全面に旧表土が覆う。よって馬の背状に緩やかな地山の頂上を加工することなく、その上に盛土を施したことがわかる。なお、この黒色旧表土からは、土壤分析の結果、炭化物や灰化炭化物が検出されており、古墳築造前に立木が焼かれた可能性がある。

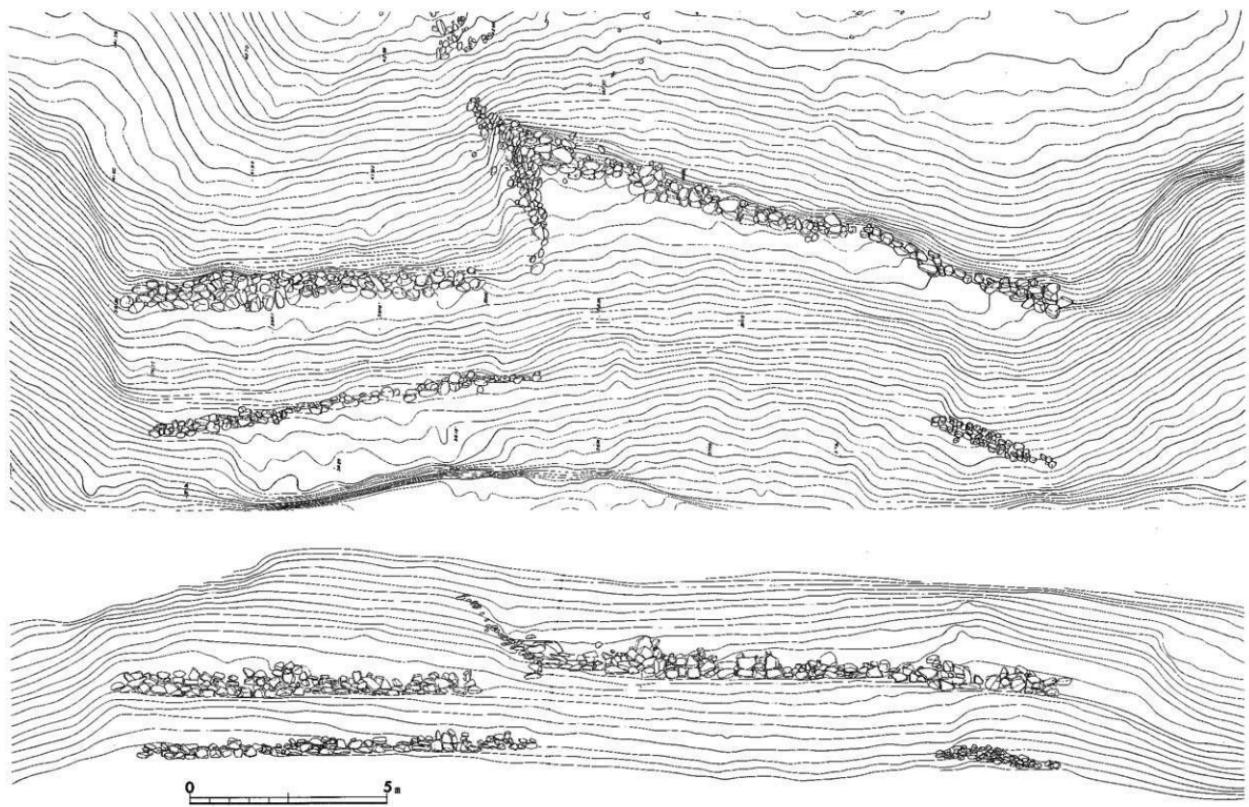
盛り土の状況を観察すると、まず後方部の立ち上がりを示す葺石から前方部に向かって下がる明瞭な境界線が見られる。このラインは中軸Kラインのみならず、約3.1m北東に下がった部分でも認められている。これは盛土による墳丘形成にあたって明らかに後方部と前方部を分けて作ったことを示し、しかもます最初に後方部が形作られたことを示している。

後方部の盛土は基本的に水平に積み重ねられており、使われた土は下層は2, 3, 4層、上層は6層が中心となっている。

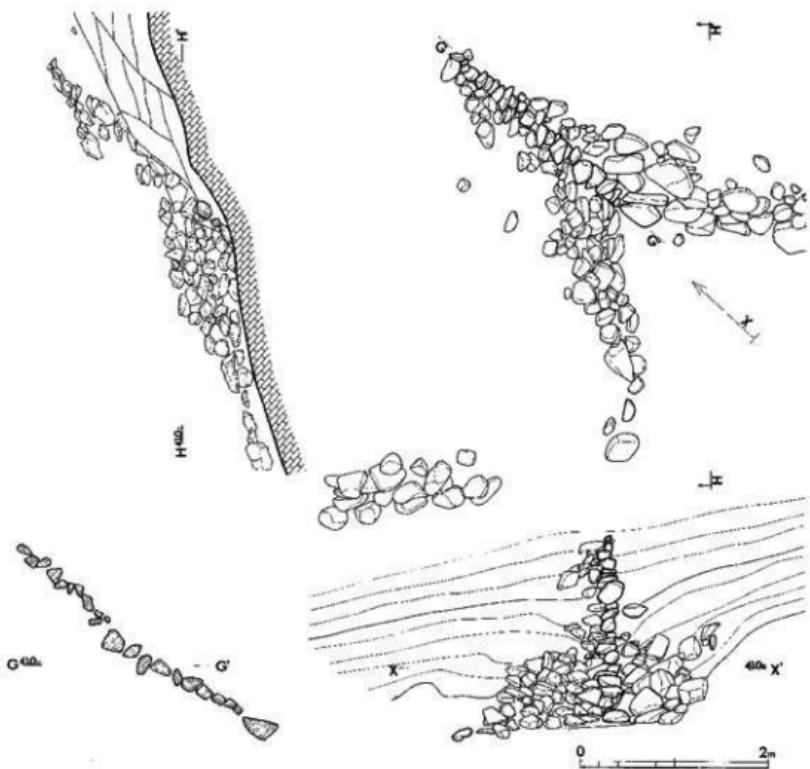
一方、前方部の盛土は後方部のように単純ではない。盛土はまず大きく上下2層に分かれる。下層は後方部側から前方部側に下がる薄い層が重なっており、これは前方部を盛るにあたってまず後方部に近いほうから順に前方部先端側に向かって盛っていったことを示す。薄い層の重なりのそれぞれの単位は、土盛の何らかの一工程を反映しているものと考えられるが、これらを構成する層の種類を見てみると、最初の工程に当たる後方部に近い部分には地山上層に当たる3, 4層が使われ、前方部先端方向に行くにしたがって地山下層の2層が中心となっている。このことは、地山を削り出す工程と土を盛る工程が連動していることを暗示しているのかもしれない。一方、この下層の土層群の上には、反対に前方部先端方向から後方部に向かって下がる土層が重なっている。これは後方部から前方部先端方向への盛土工程が終わると、逆に前方部先端から後方部に向かって盛っていったことを示している。この層群は基本的に2層で構成される。

**後方部短軸土層の観察（第101図上段）** 短軸方向では、地山は中軸付近を頂点に両側へ緩やかに傾斜しており、墳丘中段平坦面を形成するに当たっては、基底部分で一部地山を削り出している。よって盛土は中段より上に施されている。土盛りの工程は、まず両側の低い部分を盛り、基面を整えた後、全体的に土を盛っている。南西側は地滑りによりかなり流出しており、特に11ラインから先端寄りはすでに表土直下で地山が検出されている。

**前方部短軸土層の観察（第102図）** 前方部では地山の頂点は中軸からやや南西に寄っており、中段平坦面もくびれ付近では地山を一部削り出しているが、先端方向に向かうと盛土で形成されるようになる。盛土はまず後方部同様、地山が低くなる両側に盛って基面を整える工程を行っているが、その後はまず南西側に盛土を行ったのち北東側に盛っている。この南西側への盛土が長軸の下層盛土に対応していると考えられる。



第108圖 古普志大谷1號墳南側墓石測量圖(上:平面, 下:立面)

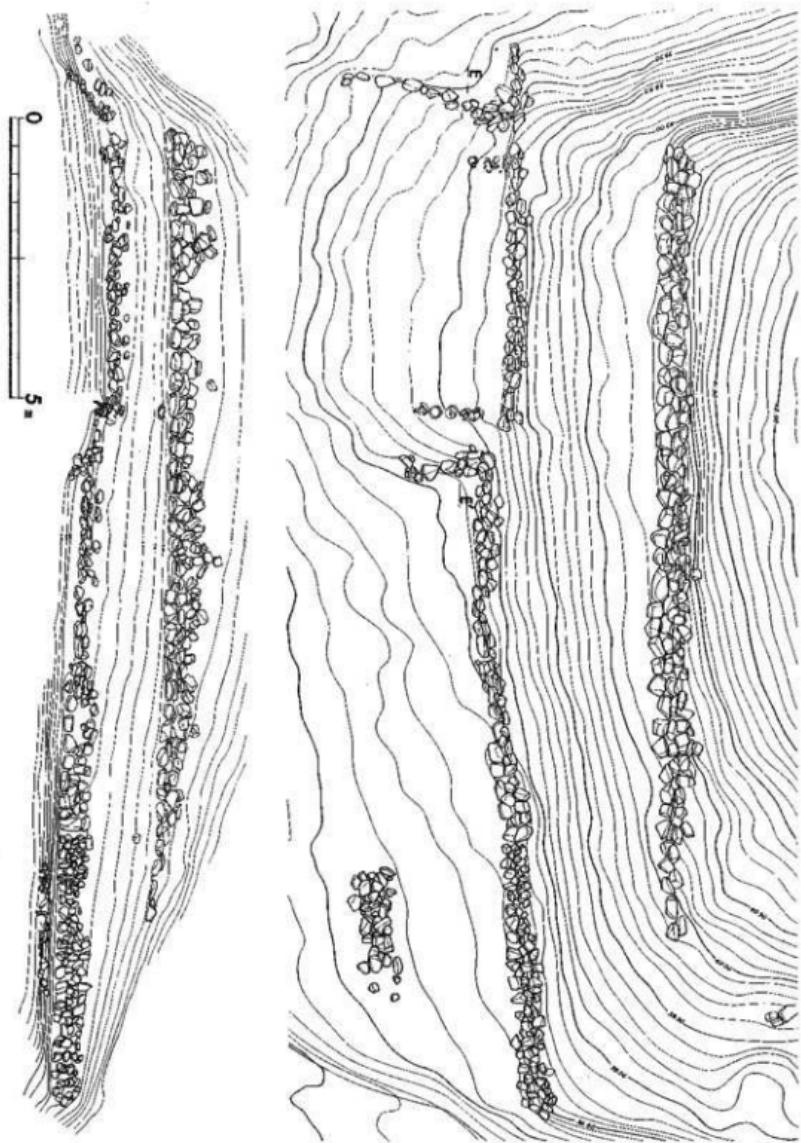


第109図 古曾志大谷1号墳南西側(穴道湖側)くびれ部葺石検出状況実測図

### ③ 蓄 石

蓄石は、上段、下段（基壇）の基部に帯状に残存していた。墳頂外や段上平坦面には多量の蓄石材が転落して散乱しており、築造当初は墳丘の全面に蓄石が施されていたものと考えられる。蓄石は概して急な墳丘斜面に貼り付けるように施されており、それが大量の蓄石の転落流出の大きな原因と考えられる。ただ比較的早い時期の墳丘流出による堆積が、基部の蓄石を保護する結果となつたのであろう。

石はおよそ20~50cm程度の角の取れた河原の転石と考えられるものを中心に使用しており、概して下段は小形の石、上段は大形の石を使用している。これは下段斜面は地山で流出しにくく、上段



第110図 古曾志大谷1号墳前方部先端葺石測量図(上:平面、下:立面)

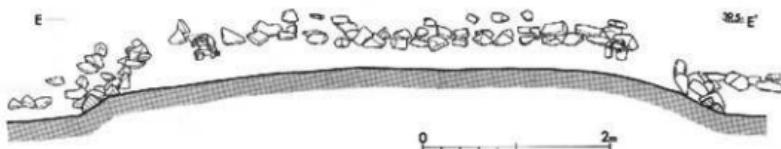
は大部分が盛土で流出しやすい状況であったことと無関係ではなかろう。石材としてはケラトファイア質流紋岩、安山岩、粗粒砂岩、礫岩、凝灰岩等が利用されているが、特に安山岩、流紋岩の比率が高い。安山岩は概して大形で、上段に使われていることが多く、流紋岩はやや小形で下段の頻度が高い。これらの石材はいずれも北側にそびえる朝日山周辺で産出されるものである。なお少量ではあるが、宍道湖対岸の玉湯町周辺に産出するメノウや、中海に浮かぶ大根島産出の「鳥石」と呼ばれる玄武岩も使われており注目される。以下各所の葺石の状況について詳説したい。

**北西辺（後方部先端辺 第104図）** 下段には長さ約17mにわたり、およそ40cmの高さで2~3段の葺石が残存していた。他辺に比べ概して小形の石を用いており、中央から西寄り部分では基部に1列20cm内外の石を並べた後、10cm内外の小形の石をその上に横並びさせるという特徴的な配列を行っている。西コーナーは地滑りにより流出しているが、この流出部分から1.5m北東にかえった部分で墳裾がわずかながら屈曲しており、裾が必ずしも一直線ではなかったらしい。これは後方部南西辺がこの北西辺に向かって開いていることと関連するものかも知れない。

上段は30~40cmと下段に比べ明らかに大形の石を使用している。一見すると上段の裾と下段裾が平行していないが、これは上段北東側が土圧によるせり出しと転落石とが混ざり合った結果であり、上方の等高線の流れから見ても、もとは下段と平行していたと見て良いであろう。

なおこの辺は、下段の裾と上段の裾との距離が約4mと他の辺に比べて長い。これは段上平坦面の幅が現状でも1.5mと広く、また埴輪列がすべて流出していることを考えると、さらにその幅が広くなることに起因すると考えられる。

**北東辺（第105図）** 全体的に葺石の残りがもっとも良好な辺である。後方部下段は、基底の石がほぼ全体に残存している唯一の辺である。北西辺に接する北側コーナー部分には50cm程の大形の石を置き、そこから約3.6m南東部分から比較的良好に葺石が残存している。この部分の北西半にはきわめて特徴的な石の配列が見られる（第106図）。すなわち、一定間隔に目地を通すように石を縦に並べ、その間に横向きに石を埋めていくという手法で葺石が施されているのである。施工の上の何らかの指標であろうか。またこの一定の間隔1.2mという数字はこの古墳を築造する上でのな



第111図 古曾志大谷1号墳前方部造り出し基部葺石および朝顔形埴輪立面図

んらかの尺度を表している可能性がある。さらに奥味深いのはこの辺の中央部分に同様の手法で葺石を施工しながらも、明らかに石の大きさや密度の異なる部分があることである。施工工程上の違いか作業を行う人間の違い等が反映されている可能性もある。

後方部のくびれ部に近い部分は、境外の平坦面が次第に狭くなって、最終的に墳裾と谷に落ちていく斜面肩部とが接する形となり、その部分の葺石はやや斜面下方にずり落ちている。

前方部下段は、後方部に見られるような規則的な石の配列は見られないが、葺石施工の「くせ」の違いを看取することができる。石の大きさは20cm内外が中心で後方部と基本的に変わらないが、先端部に向かって若干石が小さくなっている。

上段は下段に比べて石の残りは悪く、後方部、前方部を通して1~2段分の石が残存している。石の大きさは他の辺と同様下段よりも大形である。段上平坦面の幅は1.2~1.5mである。

くびれの最奥部コーナーには下から順に一列に置かれた階段状の石が見られ、その石列を基点に両側に石を貼ったものと考えられる(第107図)。

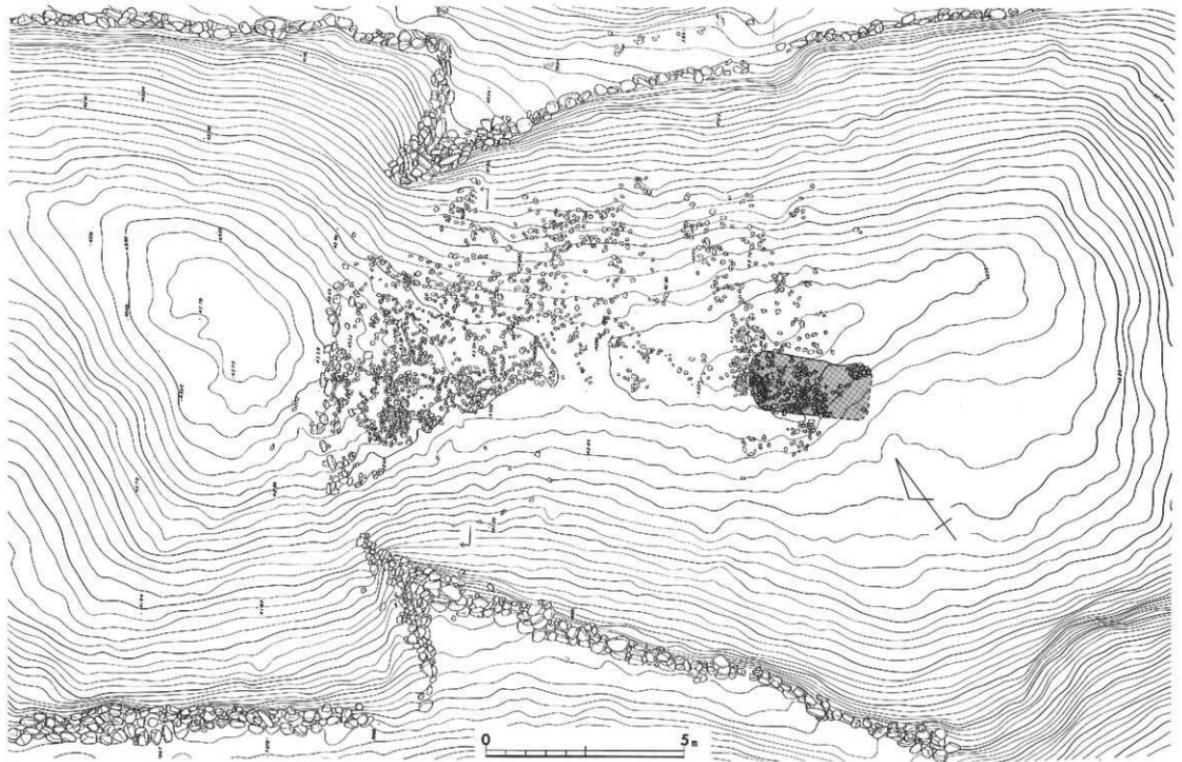
**南西辺**(第108図) 後方部前方部ともに先端が大きく削られ、残存状況の悪い辺である。特に下段は、くびれ部付近から前方部の大半にわたって流出している。後方部下段葺石は、下段にしては比較的大きな石を使用しているが、対照的に前方部の残存部分の石はきわめて小形である。

上段は反対側の北東辺に比べると、比較的高い位置まで石が残存している。後方部は他の上段部に比して、やや小形の石を使っている。一方前方部は、この古墳ではもっとも大形の石を使用している部分で、長さが7~80cmに達するものもある。しかももっとも大きな面を表面としている。

段上平坦面の幅は、現状で1.2~1.5mで北東辺とはほぼ同じだが、前方部の段と後方部の段のレベルを比較すると後方部がかなり低く、くびれ部から後方部にかけてかなり傾斜していたものと考えられる。

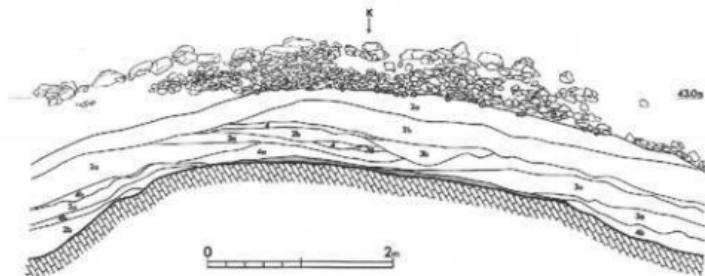
くびれ部は、北東側のくびれと同様、まず最奥部のコーナーに石を置き、次いでその両側に石を葺く方法を取っている。ただ北東辺よりコーナーの石の残存部分が多く、この石列を延長すると、前方部墳頂の後方部境に置かれた葺石とつながる(第112図)。このコーナーから前方部よりは大形の石が使われているが、後方部側は下段並みの小形の石が使われている。

**南東辺**(前方部先端辺 第110図) 中軸より南西寄りの墳丘基部に造り出しが付設され、下段の葺石は造り出しの基部から側縁に向かって延びている。下段葺石は、造り出し基部から6.5m北東部分で石の大きさ、密度が大きく変化している。北東辺の下段で見られたものと同様施工上のなんらかの区分が反映しているのであろう。また下段墳裾は上段の裾と平行せず、後方部側に窄まるかたちで延びている。これは、北東辺の前方部墳裾がかなり大きく開いていくのに反し、前方部のスペースが次第になくなっていくため、北東辺側の前方部の長さを短くしようとしたためではない



第112図 古曾志大谷1号墳墳頂石測量図

\*網目は主体部



第113図 古曾志大谷1号墳墳頂前方部と後方部境目の葺石根石立面図  
(16ラインから後方部を見る)

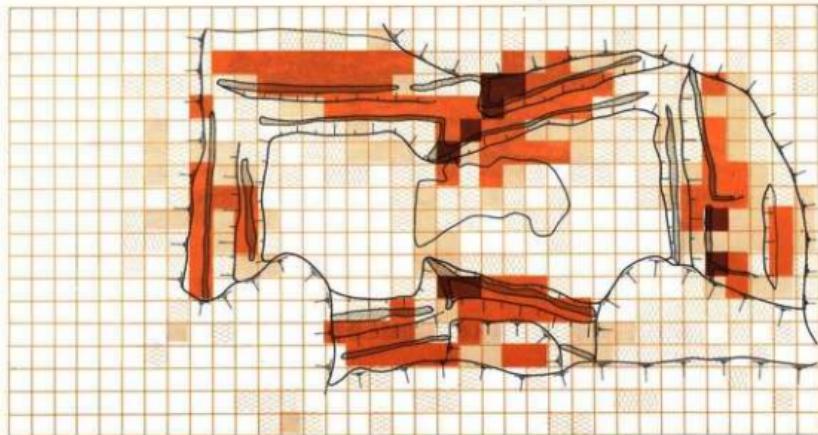
かと考えられる。

前方部墳頂敷石（第112図） 前方部墳頂の後方部境部分から中央部にかけて、幸大の角の取れた石が敷かれているのが検出された。石はかなり流出しているが、元は墳頂全面を覆っていたものと推定される。後方部との境には基底の石が一列残存しており、後方部はさらに一段高かったことを示している。ただ、先に述べたくびれ部コーナーとの関係から考えると、後方部に前方部墳頂から続く平坦面がもう一段めぐる可能性は低いといえる。墳頂は調査時には斜面との肩は不明瞭で、馬の背状に湾曲していた。これは流出による部分もあるが、後方部との境の葺石基底が現墳頂と同じように湾曲していることからすると、もともと若干の丸みを持った面であった可能性もある。なお、墳頂中央やや南寄りで主体部が1基検出された（第112図調目部分）。

#### ④ 墳輪

出土状況（第100図、114図） 墳丘の頂上を除くほぼ全域から多量の円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）が出土している。その大部分は墳丘の流出にともない原位置を離れたものであるが、比較的墳丘の残りのよい北東辺を中心にはほとんど動いていない個体が残存していた。（第100図、第105図）北半辺の段上平坦面では、地山加工面であることも幸いして、かなりの個体が元の位置（あるいはきわめて元の位置に近い位置）で検出できた。埴輪は段の基底から約1～1.5mの平坦面の縁辺に近い部分に間隔50～70cmで並べられていた。埴輪は大部分が基底部のみ残存し、流出土圧により墳丘外の方向に向かって傾いて出土している。よって埴輪基底部分の土が若干移動しており、明確に掘り方等の検出はできなかった。

北東辺後方部の墳裾外の一部にも残存する埴輪列が検出された。後方部の北東側には墳丘築成の際に削平された平坦面が続いている。埴輪はその平坦面の墳裾から2.2～3mの部分に並べられてい

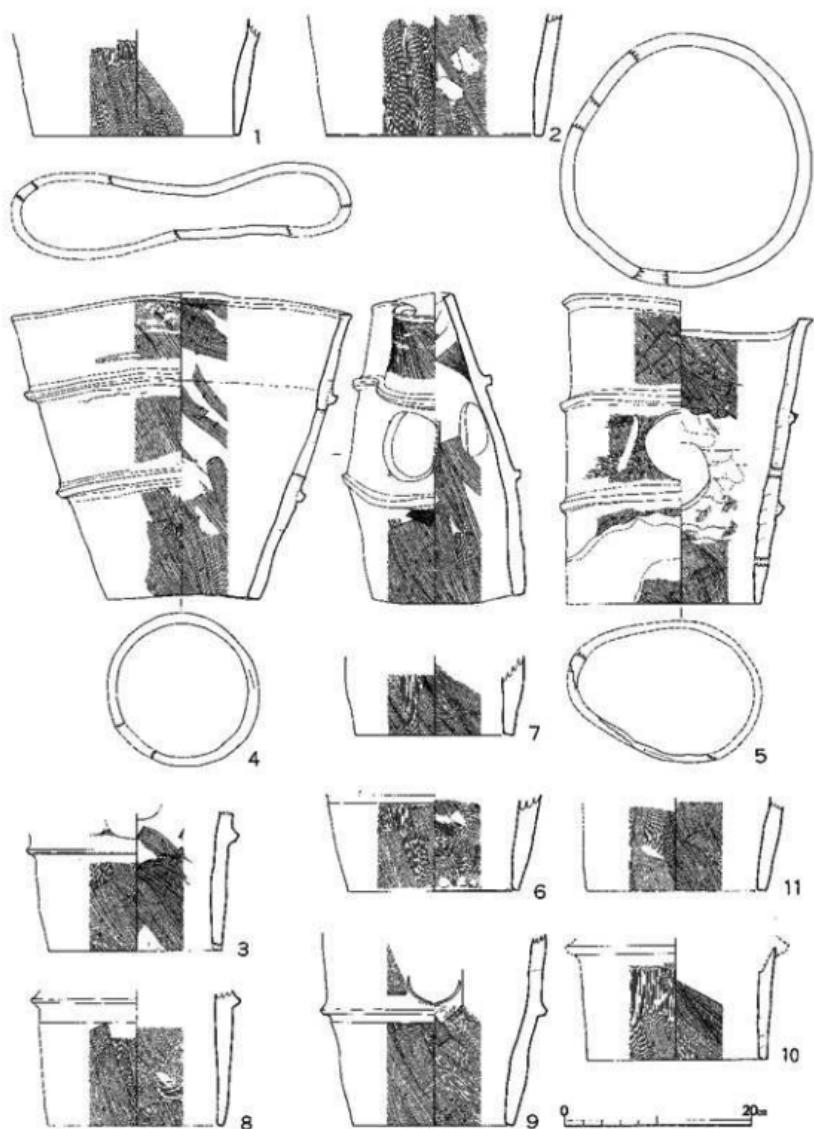


第114図 古曾志大谷1号墳グリッド別埴輪出土重量図

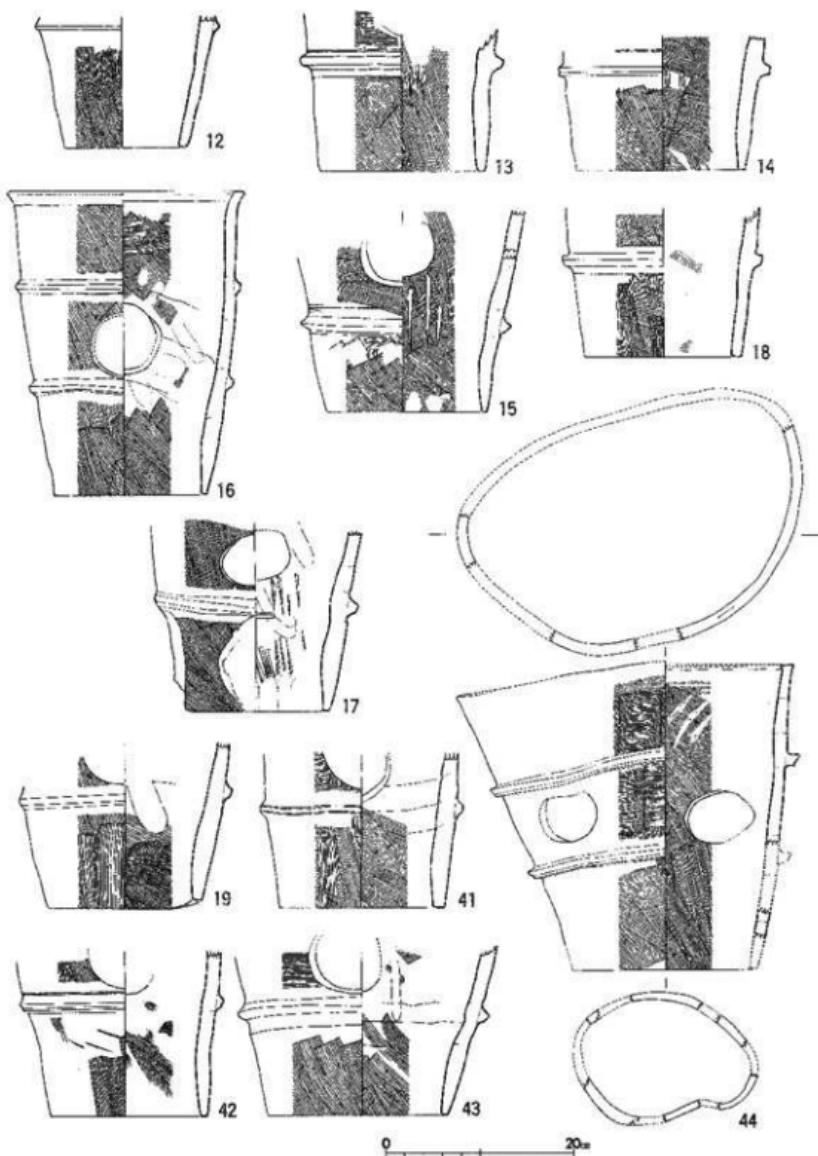
た。埴輪は約15mにわたって1~1.5m間隔で据えられ、前方部側は自然地形の谷によりそのスペースを奪われており、さらに前方部方向に続く余地はない。また後方部先端側は後世の改変を受け断絶しており、この埴輪列が後方部北西辺（後方部先端辺）裾外にまで屈曲して続いているかは不明である。ただ埴輪外の比較的残りの良い南東辺（前方部先端辺）には埴輪列がまったく見られないことから、この埴輪外埴輪列は一部にしか施工されなかったようである。埴輪はその基底部よりやや大きな掘り方を各個別に検出面から約5cm掘って据えている。

南東辺では、段上平坦面に1個と、造り出しの両側縁で原位置の埴輪が検出された。平坦面の1個は、北東辺のそれと同様上段基底から約1.2m離れた段の肩付近に置かれていた。造り出しでは両側縁の肩付近に互いに近接して北東側に5個、南西側に3個の埴輪が検出された。その内最も基部よりの個体は双方とも朝顔形埴輪である。

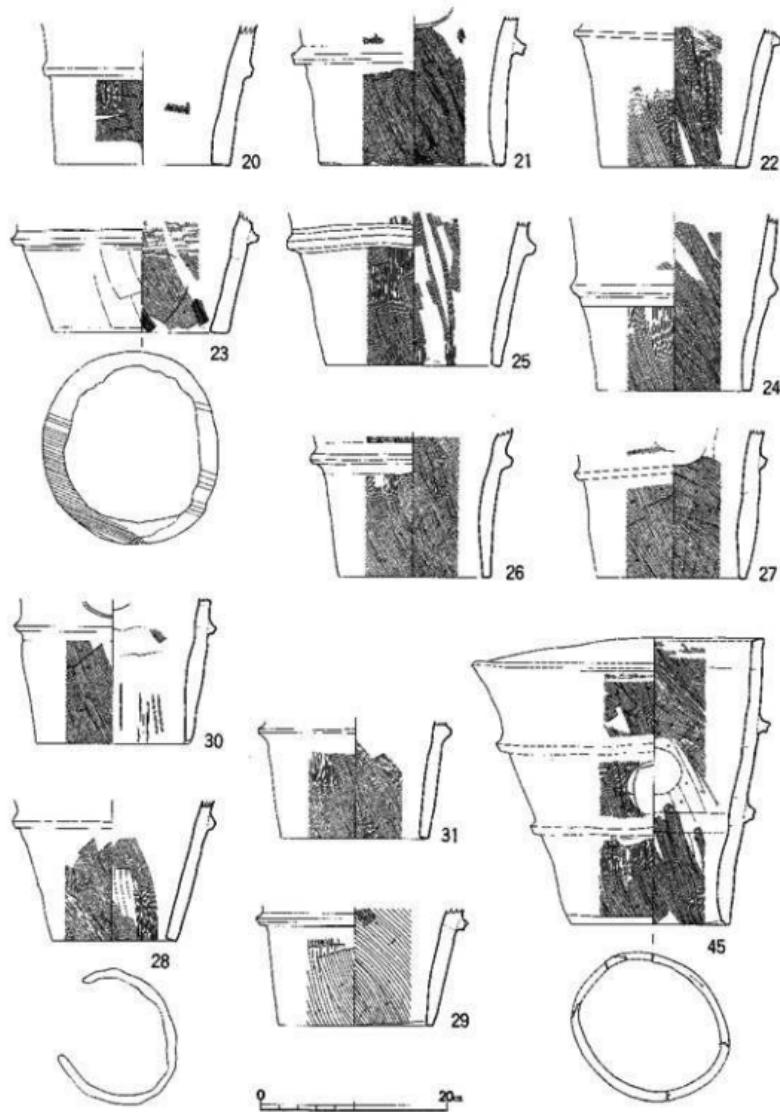
一方、原位置を保たない流出した埴輪の出土位置と出土量を濃淡で2m四方のグリッド毎に示したのが第114図である。段平坦面及び埴輪付近に集中して出土しているのがよくわかるが、注目すべきは段より上方でもかなりの埴輪が出土していることである。これは明らかに埴頂部にも埴輪が置かれていたことを意味する。しかも段平坦部の埴輪はほぼ肩部に沿って並べられており、それらの大部分が下方に流出していることから考えると、段出土の流出埴輪の多くが埴頂から落ちてきたものであろう。埴頂部においては、比較的残りの良い前方部の中央付近でまったく出土していない



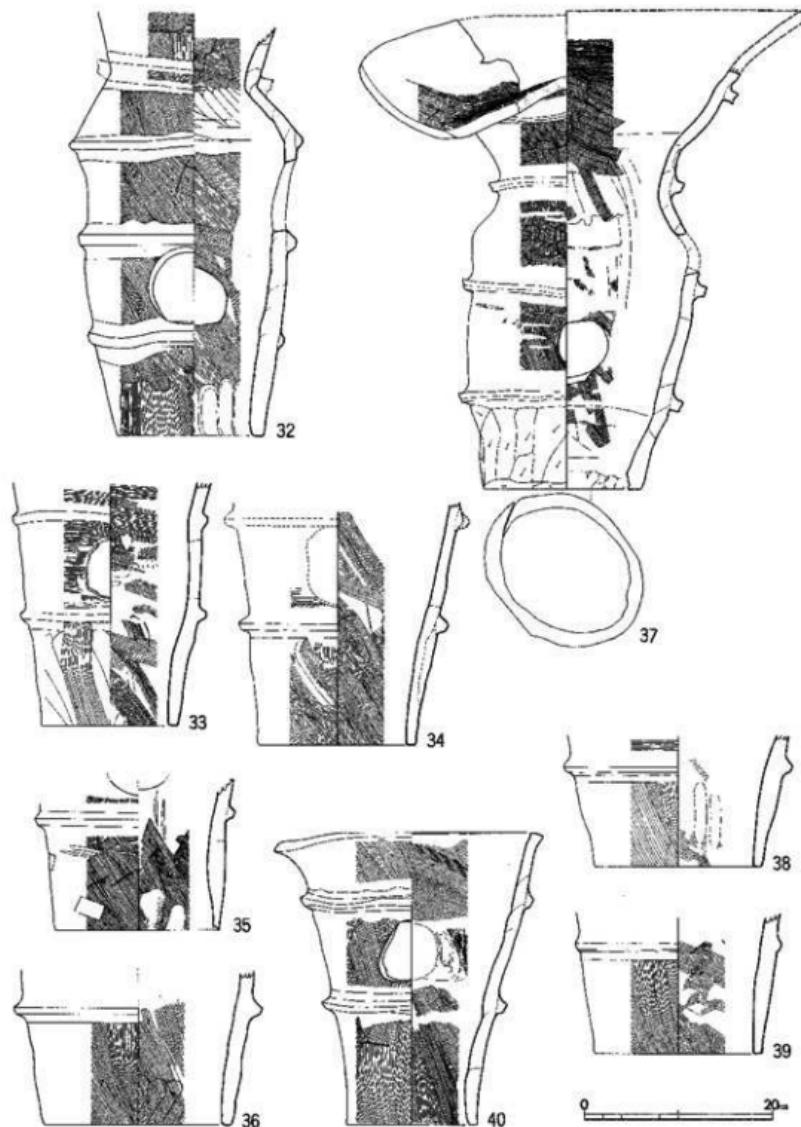
第115図 古曾志大谷1号墳後方部裾外出土埴輪実測図(原位置、番号は第105図と同じ)



第116図 古普志大谷1号墳後方部北東側下段平坦部出土埴輪実測図  
(12~19原位置、第105図の番号と同じ。その他はもと平坦部または墳頂)



第117図 古曾志大谷1号墳前方部下段平坦部出土埴輪実測図  
(原位置、番号は第105に同じ。ただし45のみもと平坦部あるいは墳頂)



第118図 古曾志大谷1号墳前方部造り出し出土埴輪実測図(40以外は原位置、番号は第132図番号と同じ)

ことから、段同様、肩付近に樹立していた可能性が強い。

**埴輪の概要** まずは各円筒埴輪にはば共通する特徴を列挙する。各部の名称は、混乱を避けるため『出雲岡田山古墳』(昭和62年 島根県教育委員会)で用いられたそれを準用する。

- (a) 底部から口縁部にかけてわずかに開く形態が一般的で、2段のタガを貼り付ける。
- (b) タガは断面台形状もしくは頂部をわずかにくぼませて上端もしくは下端をわずかに突出させる形態をとる。
- (c) 胸部には調整を施した後、対向する二方向にスカシ穴を開ける。
- (d) 色調は赤褐色、黄褐色、須恵質の灰色のものなどバラエティに富むが、黒班がみられるものはない。
- (e) 一次調整はタテもしくはナナメ方向のハケメである。

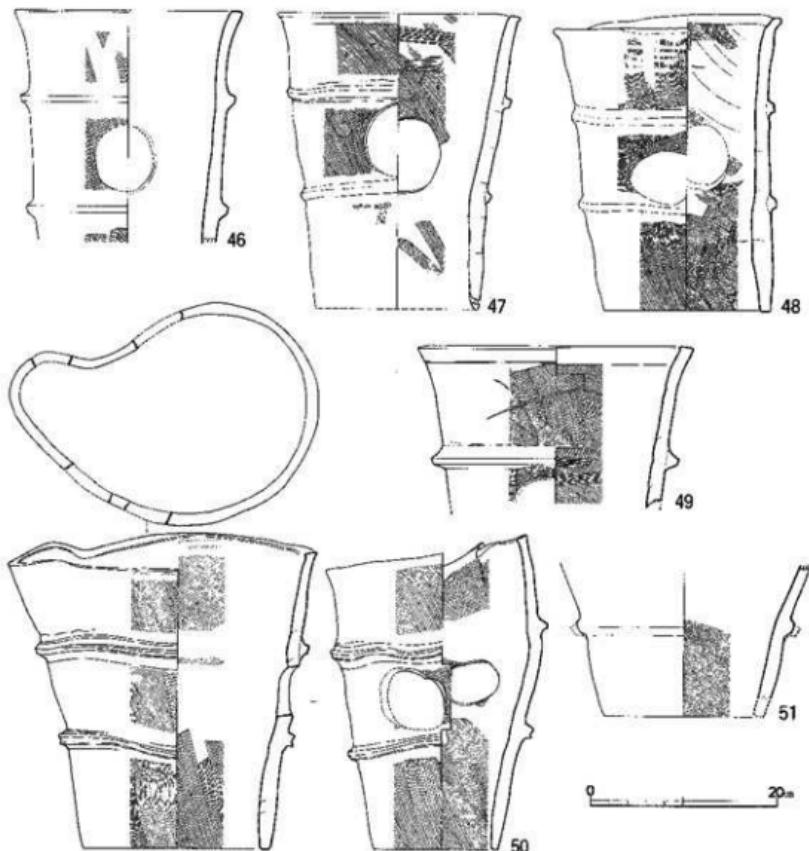
- (f) 基底部には「底部調整」を施す。手法はタテもしくはナナメ方向のハケメ（ハケメ以前に板状の工具によるおさえや指による押圧が行われたことがうかがえる個体がある。）を施し、薄くなったり先端部を小刀状の鋭い工具で切り離す。

以上が大谷1号墳出土の円筒埴輪の特徴であるが、わずかではあるが例外は存在する。また(e)に関連して、口縁部、胸部は一次調整のみのものが多いが、ヨコ方向の二次調整を施すものもかなりみられる。以下各所出土の埴輪について個別に簡単な説明をしたい。

**後方部北東辺堀外設置埴輪(第115図)** 後方部堀外ではば原位置を保って出土した埴輪である。(出土状況第105図) いずれも基本的に前に述べた一般的特徴に合致するものであり、ほぼ全形を知りうるのは4, 5の2点のみである。4は基底部の形がほぼ正円を呈するにもかかわらず、口縁部は偏平である。口縁の形態は、対向する両側から押しつぶしたように中央部分がくびれており、また焼き歪み等で見られるひびや割れはまったく見られないことから、これは明らかに意図的に形を変えたものと考えられる。5は若干の歪みがある個体で、胸部には横方向の二次調整と「ノ」状のヘラ記号が見られる。底部外面の一部は剝離したように抉られている。

**後方部北東辺下段平坦部出土埴輪(第116図)** 12~19は段の平坦面にはば原位置で残っていた個体である。(出土状況第105図) 13, 15は胸部外面に横方向の二次調整を施し、16は口縁部内面に同様の二次調整が見られる。15の底部外面の一部には、ハケメによる底部調整の前に板状の工具で押つけたような痕跡が観察される。17の底部外面には、三方向に円く表面をえぐった跡が見られ、内面にはハケメ(底部調整用)は見られない。

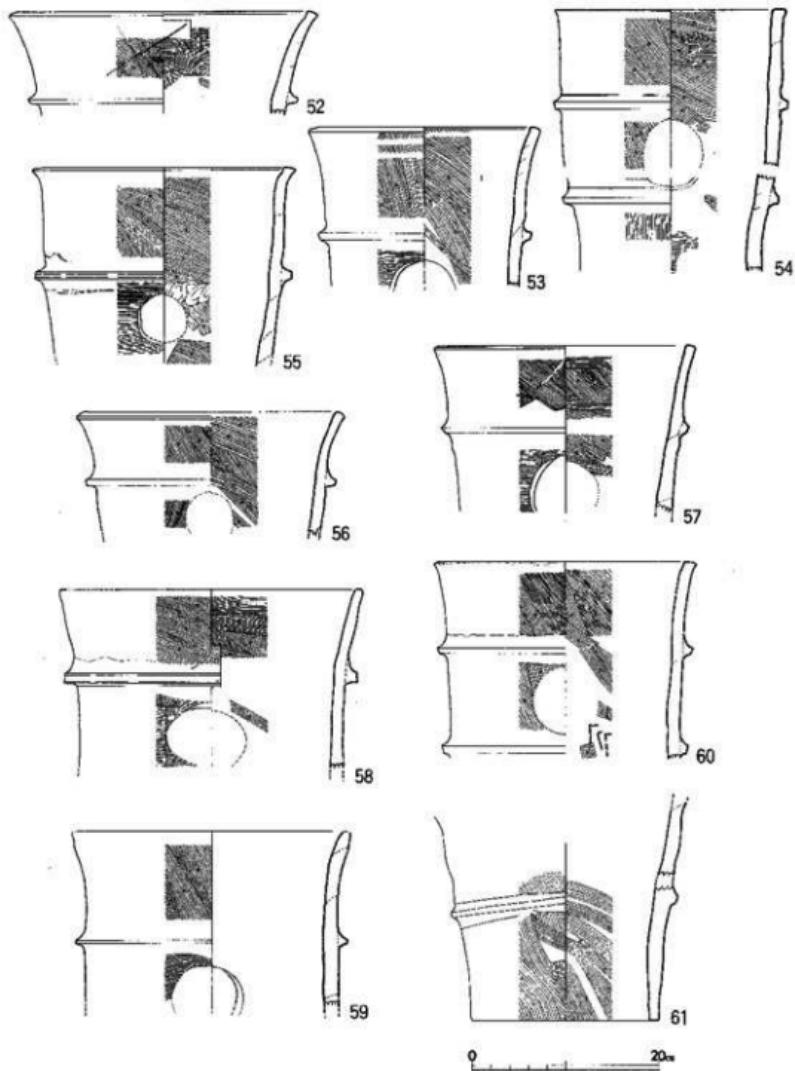
41~44は原位置を保っていない個体である。44は、12に隣接して倒れた状況で出土しており、段平坦面に樹立していたものであろう。焼きがよく一部須恵質化しているが、形態は全体的にやや歪んでいる。調整は非常に丁寧で、口縁部、胸部外面には二次調整としてB種ヨコハケが施され、し



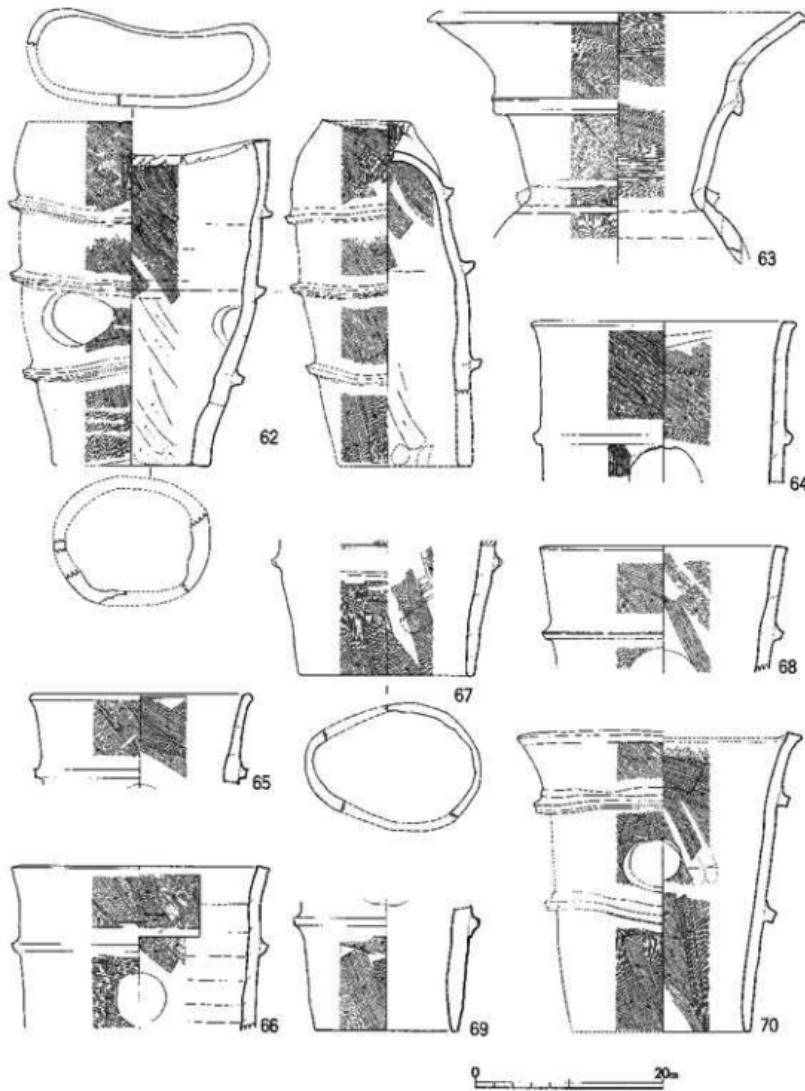
第119図 古曾志大谷1号墳後方部北東側掘出土埴輪実測図(もと平坦部または墳頂)

かもそれは細かく丁寧である。また内面は上半の一次調整、下半の底部調整により全面がハケメで覆われている。41～43は残存埴輪列の内側から出土しており、原位置は墳頂であった可能性が高いと考えられる。41、43は胴部外面に2次調整のヨコハケが見られ、41はB種ヨコハケである。

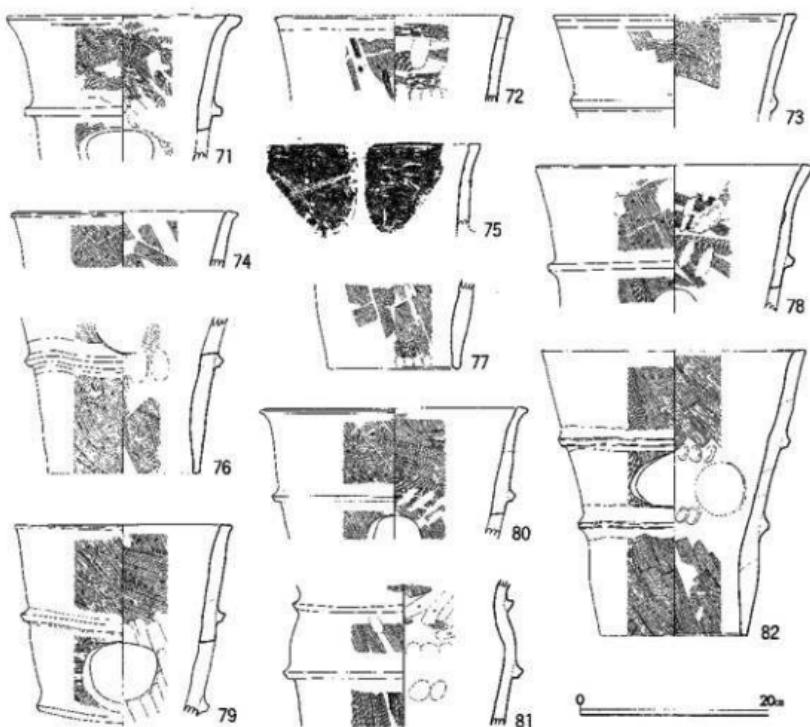
前方部北東辺下段平坦部出土埴輪（第117図） 20～31は段の平坦面にはば原位置を保って出土したもので、底部のみ残存している。20と23は底部調整が認められず、23の底には板目の圧痕が残っており、板の上に置いて形作られたことがうかがえる。29の底部内外面のハケメは幅が粗く、一次



第120図 古曾志大谷1号墳後方部北西側下段平坦部～埴輪および東隅埴輪頂部出土埴輪実測図  
(52～54：もと北西側埴輪、55～59：もと同埴輪または平坦部、60・61：東隅埴輪)



第121図 古普志大谷1号墳東側くびれ部下段平坦部～埴掘出土埴輪実測図  
(62～66: もとくびれ部墳頂, 67～70: もと平坦部または墳頂)



第122図 古曾志大谷1号墳後方部南西側下段平坦部～墳裾およびくびれ部平坦部出土埴輪実測図  
(71～77: もと後方部墳頂または平坦部, 78～80: もと後方部, 81・82: もとくびれ部墳頂)

調整と底部調整ではハケメの原体が異なっていたことがわかる。

45は原位置を保っておらず、段平坦面にあったものか墳頂にあったものが転落したものかは判断できない。若干の変形が見られ、特に口縁部が広がりぎみである。

前方部造り出し出土埴輪（第118図） 32～36は造り出し北東辺にならんで樹立していた個体で、基部に近いものから順に番号をつけている。32は墳丘に接続する基部にたてられた朝顔形埴輪である。通常の2段タガの円筒の上に「朝顔部」を接合した形で、口縁部は失われている。タガは、円筒部最上段の肩付近と、最も窄まるくびれ付近にも貼り付けており、第1段タガと第2段タガの間及び第2段タガと肩付近タガの間に、対向方向を90度ずらして円形スカシを設けている。外面の一

部に赤色顔料が観察される。33の底部調整は外面を板状の工具で押圧した後、一部にハケメを施している。

37～39は造り出し南西辺に樹立していたもので、基部に近いものから順に番号を付けている。37は基部にたてられた朝顔形埴輪で、ほぼ全形が復元できる。32と比べると、円筒部最上段の肩付近のタガがなく、第2段タガとくびれ部タガの間が短いため、やや高さが低くなっている。口縁部はラッパ状に開くが、焼き歪みのためか大きくゆがんで波打っている。口縁端部とくびれ部の間にさらに1段タガがあげられ、口縁部は内外面とも横方向のハケメを施している。底部外面は、ヘラ状の工具で上から下に削っており、底は分厚いままである。40は造り出しの裾付近から出土した個体で、他の一般の円筒埴輪に比べて小形の底部から口縁に向かって大きく開き、基底部が長く口縁部が短いという形態的な特徴がみられる。

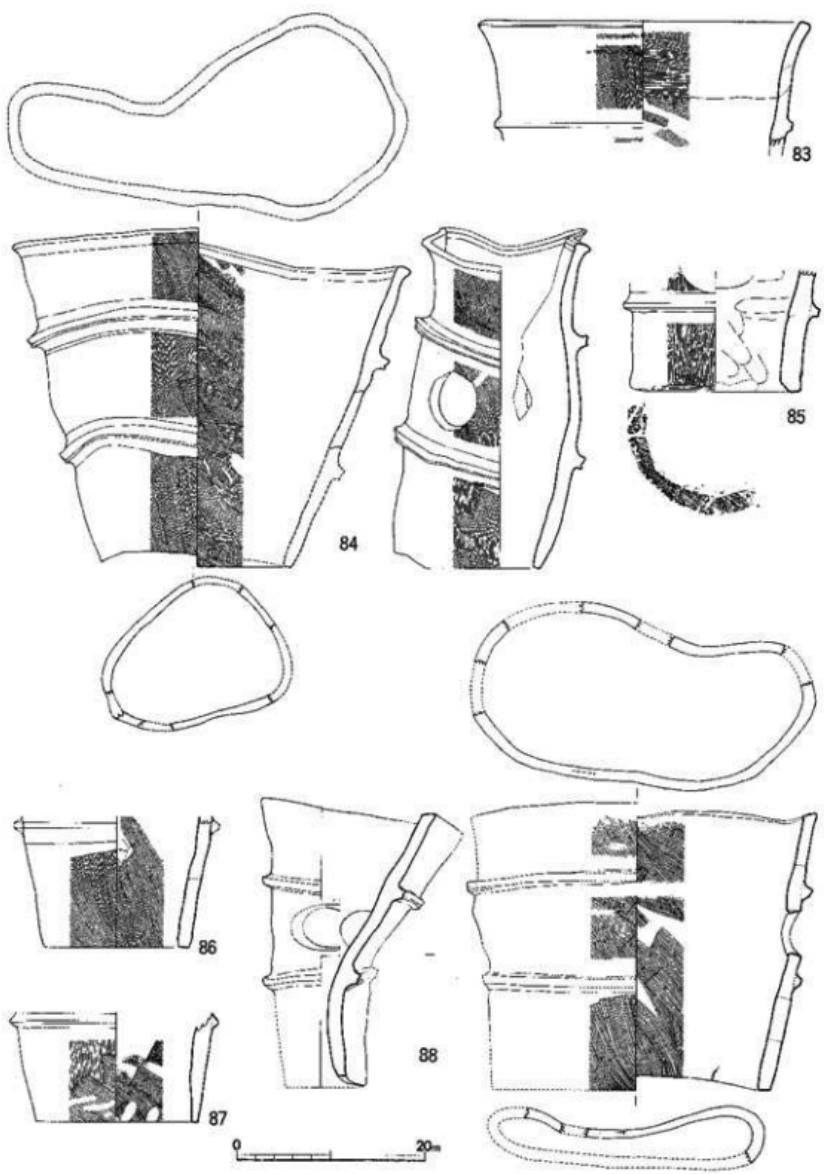
後方部北東側裾出土埴輪（第119図） 後方部北東側の裾付近から出土した原位置を保っていない埴輪で、裾外の埴輪列はさらに外方にあたることから元は段の平坦面か墳頂に樹立していたものが崩落した個体と考えられる。48、49は胴部外面にB種ヨコハケがみられ、49の口縁部外面には×状のヘラ記号が施されている。50は全体的に器形がゆがんでいる。

後方部北西辺出土埴輪（第120図52～59） 52～54は下段平坦面で出土した墳頂から崩落した埴輪である。52は口縁部外面に×状のヘラ記号が施され、内面にはB種ヨコハケが見られる。53は胴部外面に2次調整のヨコハケがみられ、外面には赤色顔料が施されている。

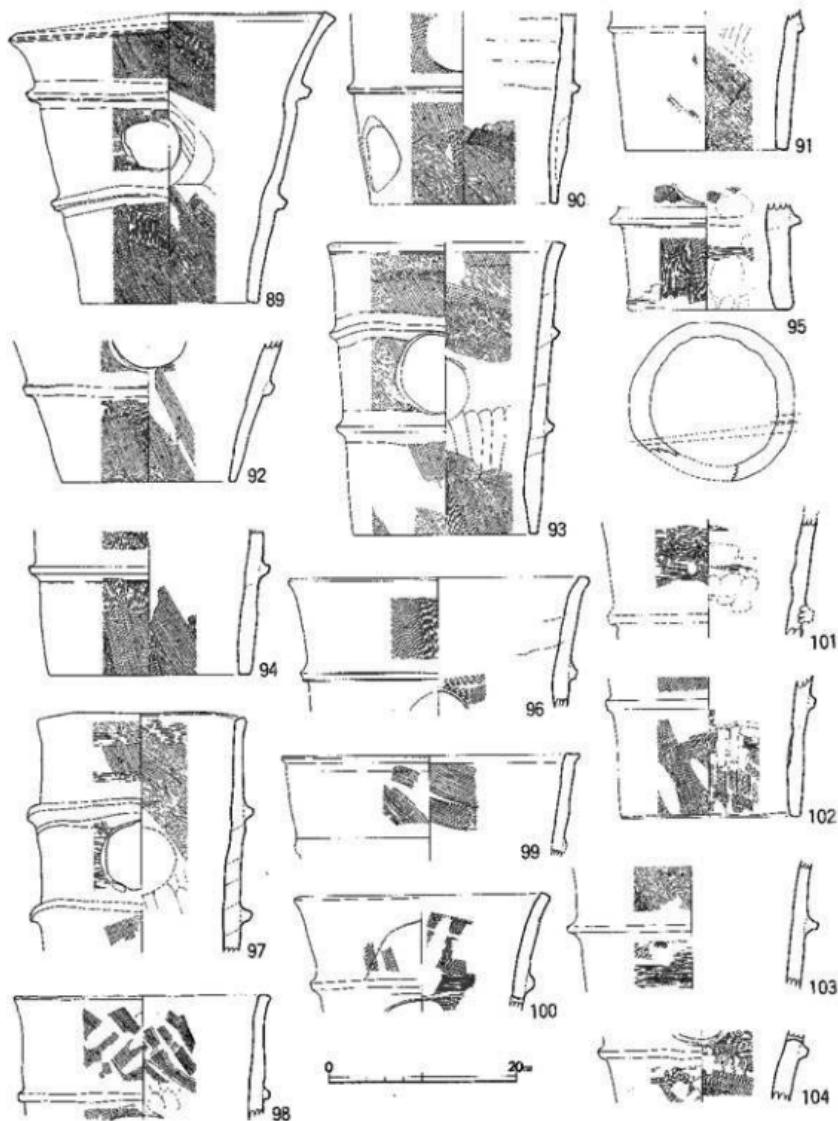
55～59は裾付近から出土したもので、下段平坦面もしくは墳頂から崩落した個体と考えられる。57、58はともに口縁部外面にヘラ記号がみられ、胴部外面にはB種ヨコハケが施される。55、59は胴部外面に2次調整のヨコハケが見られる。これらのいずれにも外面に赤色顔料が施されている。

後方部東隅墳頂出土埴輪（第120図60、61） 後方部東隅の頂上部からやや下がった斜面から出土したもので、2次的に移動したものではあるが明らかに後方部墳頂東隅付近に樹立していたと考えられる個体である。60は須恵質、61は風化が著しい個体である。

東側くびれ部出土埴輪（第121図） 62～66は下段平坦面から出土したもので、墳頂から崩落した可能性が強い個体である。62は須恵質で3段のタガを持ち、他の円筒埴輪とまったく趣を異にする個体である。口縁部は2次調整である斜め方向のハケメを施した後に鋸い工具で切断しており、他の一般例で見る底部の整形、調整と同様の方法を行っている。底部は特に2次調整は行っていない。口縁部は焼きひずみによる変形とひび割れがあつた。63は朝顔形埴輪の口縁部で、くびれ部と口縁端部の間に2段のタガをめぐらし2次調整としてヨコハケを施している。口縁部のタガは偏平で、口縁端部は外方に突出させている。64、65には外面に赤色顔料が見られる。66は口縁部外面に「ノ」状のヘラ記号がみられ、胴部外面には2次調整でB種ヨコハケが施されている。



第123図 古曾志大谷1号墳前方部北東側墳頂～下段平坦部出土埴輪実測図(もと墳頂)



第124図 古曾志大谷1号墳前方部下段平坦部～埴輪出土埴輪実測図

(89～91：もと北東側埴頂、92～94：先端、95：先端下段平坦部、

96～97：もと南北側埴頂、98～103：同平坦部または埴頂、104：同その他の)

第3表 古曾志大谷1号墳出土埴輪調査表

番号	種別	法 量 cm	{① ② ③ 直径 底径 器高}	外 面 調 整		内面調整	底部調整	燒 成 土 質	成 形 質	備 考
				1 次 調 整	2 次 調 整					
1	(底部)	② 22.0		タテハケ		タテハケ	ハケメ、切 断	○		
2	(底部)	② 23.0		タテハケ		タテハケ	ハケメ、切 断	○		
3	(底部)	② 18.4		タテハケ		タテハケ	ハケメ、切 断	○		
4	円 焼	① 9.5~5.7×36.8 ② 16.4~16.5 ③ 30.4~32.9		タテハケ	—	タテハケ	ハケメ、切 断	○	口縁端半	
5	円 焼	① 26~27 ② 15~21 ③ 29~33.3		ハケメ	ヨコハケ (中段)	タテハケ、 指頭圧	ハケメ、指 頭圧、切断	○	ヘラ記号あり 「ノ」	
6	(底部)	② 18.4		タテハケ		ヨコハケ	ハケメ、指 頭圧、切断	○		
7	(底部)	② 16.8		タテハケ		タテハケ	ハケメ、切 断	○		
8	(底部)	② 18.5		タテハケ		タテハケ、 ヨコハケ	ハケメ、切 断	○		
9	(底部)	② 17.4		タテハケ	—	タテハケ、 指頭圧	ハケメ、指 頭圧、切断	○		
10	(底部)	② 19.4		タテハケ		タテハケ	ハケメ、切 断	○		
11	(底部)	② 19.5~20.0		タテハケ		タテハケ	ハケメ、切 断	○		
12	(底部)	② 12.9~13.4		タテハケ			ハケメ、切 断	○		
13	(底部)	② 17.9~18.8		タテハケ	ヨコハケ	タテハケ	ハケメ、切 断	○		
14	(底部)	② 18.2		タテハケ		タテハケ	ハケメ、切 断	○		
15	(底部)	② 17.0		タテハケ	ヨコハケ (中段)	タテハケ	ハケメ、指 頭圧、切断	○	中段下部にタガ 船用の沈締あり	
16	円 焼	① 25.8 ② 16.6 ③ 32.7		タテハケ	—	タテハケ、上 部にヨコハケ が施される	ハケメ、指 頭圧、切断	○		
17	(底部)	② 18.0		タテハケ	—	ナデ	ハケメ(外 周)、指頭 圧、切断	○	底部3方向外周にエダレ あり	
18	(底部)	② 16.8		タテハケ	—	タテハケ	ハケメ、切 断	○		
19	(底部)	② 16.5		タテハケ	—	タテハケ、 ナデ	ハケメ、切 断	○		
20	(底部)	② 17.7~18.5		タテハケ		ヨコハケ	—	○		
21	(底部)	② 18.3~20.0		タテハケ		タテハケ	ハケメ、切 断	○		
22	(底部)	② 14.6~15.8		タテハケ		タテハケ	ハケメ、切 断	○		
23	(底部)	② 18.7~20.6	壁方向の ヘラケズリ			タテハケの 後、ヨコハ ケ	—	○	底部に板目出現有る	
24	(底部)	② 16.8		タテハケ		タテハケ		○		
25	(底部)	② 17.4~19.0		タテハケ		タテハケ	ハケメ、指 頭圧、切断	○		
26	(底部)	② 16.3		タテハケ		タテハケ	ハケメ、指 頭圧、切断	○		



番号	種別	法 量 cm {① 口径 ② 底径 ③ 器高}	外 面 調 整		内面調整	底部調整	焼 成		備 考
			1次調整	2次調整			上部 耐 熱 性 質	下部 耐 熱 性 質	
53	円筒	① 24.9	タテハケ	ヨコハケ (中段)	タテハケ		○		外面に赤色顔料
54	円筒	① 25.2	タテハケ	—	ヨコハケ (2次), タ テハケ		○		
55	円筒	① 28.2	タテハケ	ヨコハケ (中段)	タテハケ, 指頭圧		○		外面と口縁内面に赤色顔 料
56	円筒	① 28.8	タテハケ	—	タテハケ		○		外面に赤色顔料
57	円筒	① 28.2	タテハケ	B種ヨコハケ (中段)	タテハケ, ヨコハケ (2次)		○		外面に赤色顔料 ヘラ記号あり「ノ」
58	円筒	① 32.7	タテハケ	B種ヨコハケ (中段)	タテハケ, ヨコハケ		○		外面に赤色顔料 ヘラ記号あり「ノ」
59	円筒	① 30.0	タテハケ	ヨコハケ (中段)			○		外面に赤色顔料
60	円筒	① 28.2	タテハケ	—	ナデ, タテ ハケ			○	
61	(底部)	② 11.1~12.6	タテハケ		タテハケ	ハケメ, 切 断	○		
62	円筒	① 8.1~26.7 ② 14.0~17.0 ③ 37.0	タテハケ	—	タテハケ, ナデ	—	○		3段タガ 口縁部切断 ヘ 2次ハケメ
63	軽瓶	① 41.0	タテハケ	ヨコハケ	タテハケ, ヨコハケ (2次)		○		
64	円筒	① 28.6	タテハケ	—	タテハケ, ヨコハケ (2次)		○		外面に赤色顔料
65	円筒	① 8.5~12.0	タテハケ		タテハケ		○		外面に赤色顔料
66	円筒	① 27.8	タテハケ	B種ヨコハケ (中段)	タテハケ		○		ヘラ記号あり「ノ」
67	(底部)	② 13.6~19.0	タテハケ		指頭圧, タ テハケ	ハケメ, 切 断	○		外面に赤色顔料
68	円筒	① 26.6	タテハケ	—	タテハケ		○		
69	(底部)	② 15.3				ハケメ(外 面), 切断	○		
70	円筒	① 30.8 ② 19.2 ③ 32.4	タテハケ	—	タテハケ, ナデ, ヨコ ハケ	ハケメ, 切 断		○	
71	円筒	① 25.5	タテハケ	—	タテハケ, ナデ		○		
72	円筒	① 25.7	タテハケ		ヨコハケ, 指頭圧		○		
73	円筒	① 36.1	タテハケ		タテハケ		○		
74	円筒	① 24.6	タテハケ		タテハケの 後ナデ		○		
75	円筒		タテハケ		ヨコハケ		○		外面ヘラ記号あり「×」 内面に縦刻あり
76	(底部)	② 16.4	タテハケ		タテハケ	ハケメ, 切 断	○		
77	(底部)	② 13.8	タテハケ		タテハケ	ハケメ, 指 頭圧, 切断	○		
78	円筒	① 30.0	タテハケ		タテハケ, ナデ		○		

番号	種別	法量 ①口徑 ②底径 cm ③壁厚	外因調整		内面調整	底面調整	焼成 土器質 須恵質	備考
			1次調整	2次調整				
79	円筒	①23.6	タテハケ	ヨコハケ (中段)	タテハケ, ナデ		○	
80	円筒	①29.0	タテハケ	—	タテハケ, ヨコハケ		○	
81	桶		タテハケ	—	タテハケ, ナデ		○	
82	凹筒	①28.4 ②15.8 ③30.5	タテハケ	—	タテハケ, ナデ	ハケメ, 切 断	○	
83	円筒	①35.5	タテハケ	ヨコハケ (中段)	ヨコハケ (2次), タ テハケ		○	外面に赤色顔料 ヘラ記号あり「」
84	円筒	①10.0~45.0 ②14.0~20.0 ③36.5	タテハケ	—	タテハケ	ハケメ, 切 断	○	外面に赤色顔料 扁平でひずんでいる
85	(底部)	②18.0	タテハケ	—	ナデ	—	○	底部に板目压痕あり
86	(底部)	②15.6~16.2	タテハケ		タテハケ	ハケメ, 切 断	○	
87	(底部)	②17.4~17.9	タテハケ		タテハケ	ハケメ, 指 頭圧, 切断	○	
88	円筒	①15.0~37.1 ②4.0~30.2 ③25.0~30.8	タテハケ	—	タテハケ	ハケメ, 切 断	○	扁平でひずんでいる
89	円筒	①35.4 ②17.0~17.5 ③31.2	タテハケ		タテハケ	ハケメ, 切 断	○	
90	(底部)	②19.8	タテハケ		ナデ, タテ ハケ	ハケメ, 切 断	○	底部外面に円形のエグレ あり
91	(底部)	②17.4~18.0	タテハケ		タテハケ	ハケメ, 切 断	○	
92	(底部)	②18.6	タテハケ	—	ナデ, タテ ハケ	ハケメ, 指 頭圧, 切断	○	
93	円筒	①25.5~26.9 ②19.7 ③31.5	タテハケ		ナデ, タテ ハケ	ハケメ, 切 断	○	
94	(底部)	②21.5	タテハケ	—	ナデ, タテ ハケ	ハケメ, 切 断	○	
95	(底部)	②17.7	タテハケ	—	指頭圧, ナ デ, ヨコハ ケ		○	底部に棒状压痕あり
96	円筒	①32.2	タテハケ	—	ヨコハケ		○	外面に赤色顔料
97	円筒	②22.3	タテハケ	ヨコハケ (上・中段)	タテハケ, 指頭圧		○	
98	円筒	①27.6	タテハケ, ナデ	—	タテハケ, ナデ		○	
99	円筒	①32.2	タテハケ		タテハケ		○	
100	円筒	①27.5	タテハケ	?	ヨコハケ, ナデ		○	外面にヘラ記号「ノ」
101	(体部)		タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ, ナデ, 指頭 圧		○	
102	(底部)	②19.1	タテハケ		ヨコハケ, ナデ	ハケメ, 切 断	○	
103	(体部)		タテハケ	ヨコハケ	ナデ		○	
104	(体部)		タテハケ	部に ヘラケズリ	ヨコハケ, ナデ		○	



第125図 古曾志大谷1号墳後方部崩壊部分と遺物出土状況(●鉄器片、■極小河原石)

67~70は裾付近から出土したもので、段平坦面もしくは墳頂から崩落した個体と考えられる。70は須恵質で口縁部の長さが短いのが特徴で、口縁部内面には2次調整のヨコハケが見られる。

後方部南西辺出土埴輪（第122図71~80） 71~77は裾付近から出土したもので、下段平坦面もしくは墳頂から崩落したと考えられる個体である。75は口縁部外面に×状のヘラ記号が見られる。

78~80は段平坦面から出土したもので、元墳頂にあった可能性が高い個体である。79の胸部外面には2次調整のヨコハケが施されている。

南側くびれ部出土埴輪（第122図81、82） 81は朝顔形埴輪の肩付近の破片である。土師質で、肩とくびれにタガを貼り付けている。82は通有の円筒埴輪で、基底部のふくらみが残る個体である。

タガの内側には、タガを貼り付ける際に付いたと考えられる指頭圧痕が見られる。

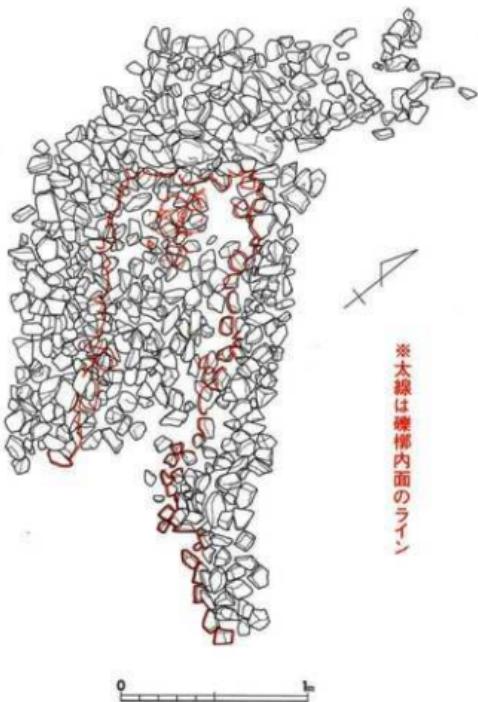
前方部北東辺墳頂及び下段平坦面出土埴輪（第123図、124図89～91） いずれも元墳頂にあったものが崩落した個体と考えられる。83は口縁部外面に「一」状のヘラ記号が見られるもので、外面には赤色顔料、胸部外面には2次調整のヨコハケが施されている。84、88は形が極めて歪んだもので、いずれも須恵質である。84は不規則な歪み方をしているが、88は偏平な形をしており、いずれも極端なひび等は認められないことから、意識的に変形させたものの可能性もある。ともに1次調整のハケメは丁寧に施している。85は底部調整が認められず、底には板目状の圧痕が見られる。89は比較的口縁部に向かって大きく開き、口縁部の長さが短い個体である。90は基底部外面に円形の「エグレ」が見られる。

#### 前方部先端辺（南東辺）出土埴輪

（第124図92～95） 95は造り出し上方下段平坦面に立てられた原位置に唯一のこった個体である。基底部に底部調整は見られず、底には2条の棒状の圧痕が残っている。93はほぼ垂直に立ち上がる形で、口縁部、胸部、基底部の割合がほぼ等しい。

前方部南西辺出土埴輪（第124図96～103） 96、97は墳頂から崩落した可能性が高い個体である。96は外面に赤色顔料の付着が認められる。97は外面の口縁部の一部と胸部に2次調整のヨコハケが施されている。

98～103は裾付近から出土したもので、下段平坦面もしくは墳頂から崩落した個体である。100は口縁部外面に「ノ」状のヘラ記号が見られる。101は胸部の破片、102は口縁部から胸部にかけての破片である。



第126図 古曾志大谷1号墳墳頂主体部分の敷石と遺物出土状況実測図

##### ⑤ 後方部主体部

後方部の墳頂は先に記したように、後世の大規模な地滑りにより大きく崩壊し、墳頂相当部分の北コーナー部分で既に地山が露出している状況であった。よって主体部に関わる何等の遺構も検出できなかったが、主体部から流出したと推定される繊細な鉄器片と、きわめて小形の円礫が出土した。鉄器片は大部分が器種不明だが、刀子と思われる個体が見られる。

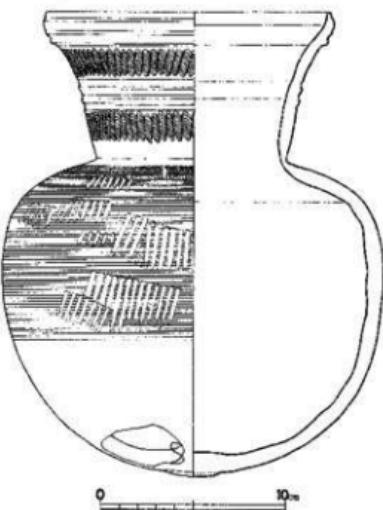
一方極小の円礫は、後方部に存在したはずの主体部の構造を考えるヒントとなる。この周辺地域は、本報告書所載の古曾志善坊1号墳や、鹿島町奥才古墳群に代表される碌床構造の多い地域であり、この後方部主体部も棺の床に小形の円礫を敷き詰めたものであった可能性がある。

##### ⑥ 前方部主体部

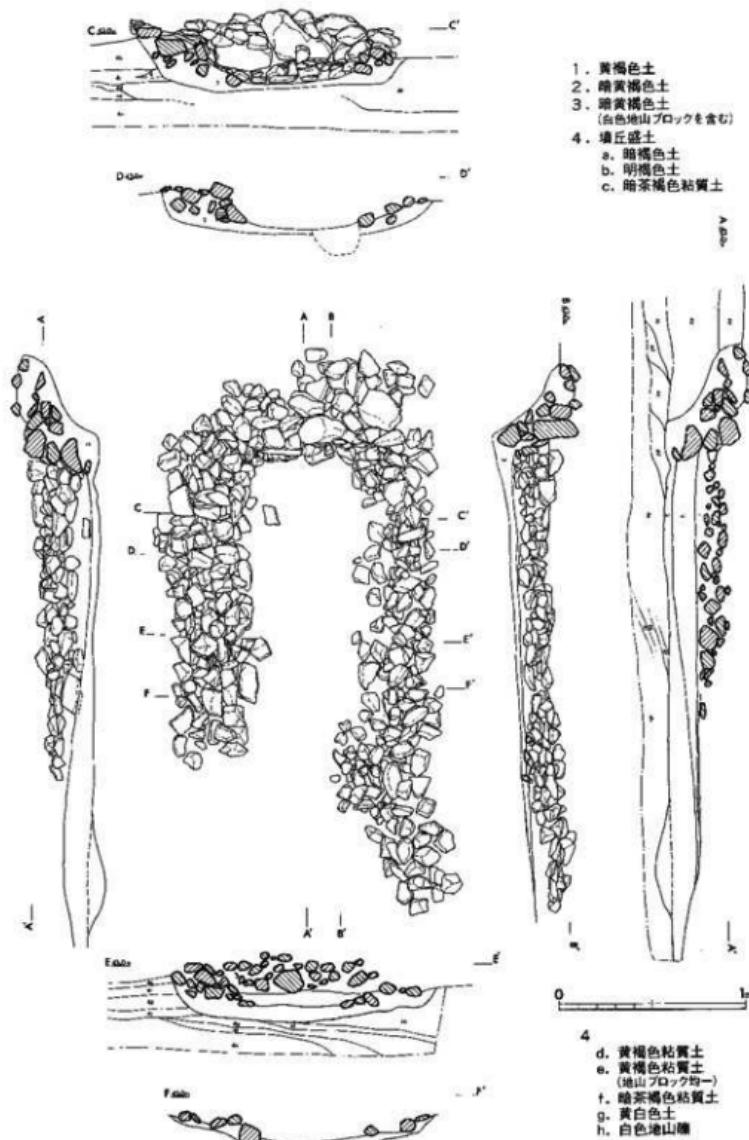
位置 前方部頂上の先端寄り、中軸からわずかに南東に偏った位置に主体部が検出された（第112図）。現状では前方部の南側が流出てしまっているが、この位置がおそらく前方部で最も高い位置であったと考えられる。

検出の状況 前方部の上面の表土を剥いた時点で当該位置の礫の密度が高いことが認められた。当初、前方部に敷かれた碌群の一部と考えて調査を進めたが、浮いた碌を外していくうちに碌がほぼ長方形にまとまっていることがわかり、さらにその上面から須恵器が出土したため主体部と確認された（第126図）。

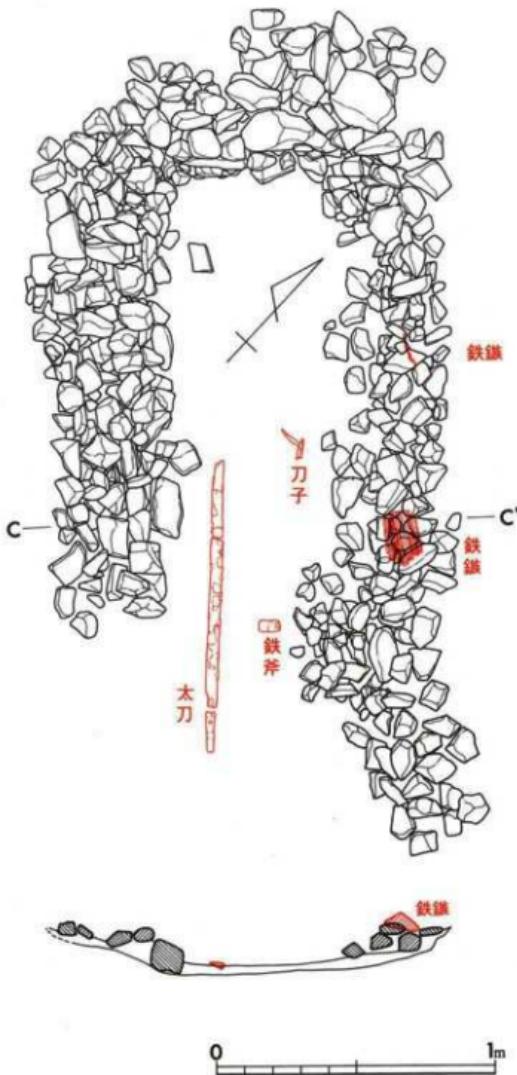
この主体部を構成する碌は大きさが10~15cmと拳よりやや大きい程度の角の取れたものが中心である。この碌の集合のうち、その中央北寄り付近から前方部先端に向かって幅約60cm、長さ約1.8mにわたり碌面が低い部分が認められた。この部分が後で述べる木棺が腐食陥没した部分で、その最も後方寄り（木口部分寄り）から須恵器壺が出土した。須恵器は完形のものが上からつぶれたかたちでまとまって出土しており、埋葬後供献されたものであろう。こうした状況から、棺上の碌は周囲から流入したものではなく、明らかに木棺を据えたのちにその上に置かれたものであること



第127図 古曾志大谷1号墳前方部主体部  
上方蓋石内出土須恵器実測図



第128図 古曾志大谷1号墳前方部墳頂主体部実測図



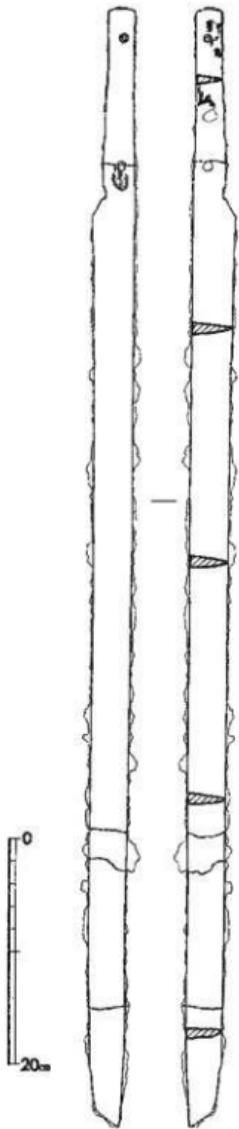
第129図 古曾志大谷1号墳前方部主体部遺物出土状況実測図

がわかる。

さて、前に述べたようにこの礫の集合面は、表土の直下から検出されている。この主体部の南端付近からかなり埴丘は流出しているが、後方部寄りは上面に敷かれた礫も疎らながら残存しており、極端な流出は考えにくい。また、この主体部の北西に近接して礫が密度高く残っている部分があり、これが主体部の形態と直接関わらないことから、残存する数石の可能性もある。とすればこの主体部は埴頂に敷かれた敷石の直下に存在することになり、極めて浅い墓坑だったことになる。このことは後方部の状況と合致している。すなわち、後方部の主体部が後世の流出により跡形もなく失われているが、これは墓坑そのものもかなり浅いものであったと想定されるからである。

主体部上出土の須恵器

(第127図)は、高さ25



第130図 古曾志大谷1号墳前方部  
墳頂主体部出土大刀実測図

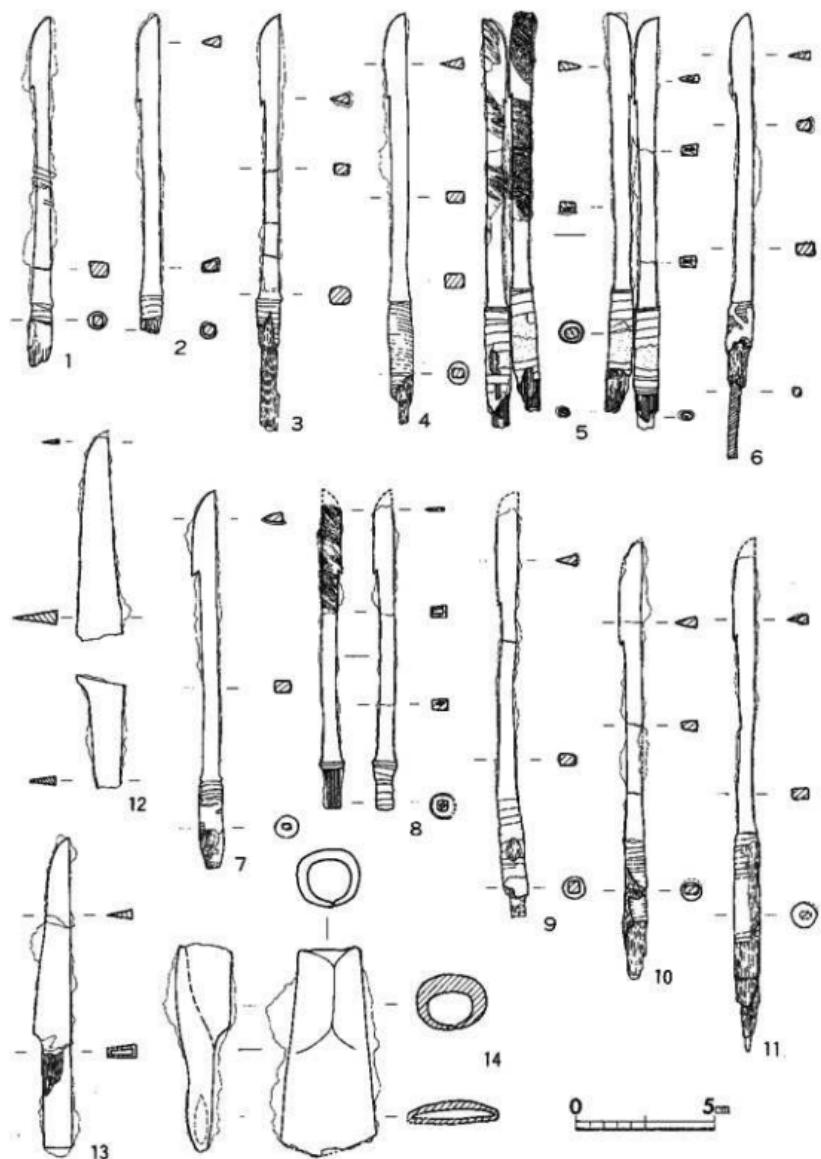
cm、胸部最大径20.5cm、口径15.1cmを測る壺である。胸部は最大径がやや上方にあり、底部は完全に丸底である。外面には平行タタキの痕が残り、上半にはカキメが施される。頸部には二条の凹線状の凹凸を挟んで2列ていねいな構造波状文が施される。口縁はわずかに外面を肥厚させるような格好で「口縁帯」を形作り、端部は上方につまみあげる形で突出させている。底部には径約4.5cmの孔が焼成後に穿たれており、しかもその孔の部分の破片も一緒に出土している。これは、この須恵器を供獻するにあたって、その場で底部穿孔をしたことを示しているものと考えられる。

なお、この主体部から北西寄りの前方部墳頂周辺から須恵器小形器台が出土している。この個体の大部分は前方部から出土しているが、口縁付近のみが造り出しから出土しており（第134図13）、注目される。

**主体部の構造** 上方の縫を取り外すと、細長い「コ」字形の縫の配列が検出された。後で述べるように、この縫群の間の空白地から副葬品と推定される鉄器が出土していることから、これは木棺の周開を縫で囲んだ施設と考えられる。この施設の南側は、墳丘の流出にともなって失われているが、元は四方を取り囲んだものであったろう。

この石組みは、全体幅が1.38～1.47m、残存長が北東辺で2.98m、南西辺で2mを測る。南西側辺の石組みは、幅45cm前後、底面からの高さが木口寄りで33cm前後で、高さは南東にいくにしたがって低くなるが、これは墳丘の流出に伴うと考えられる。内側に面しては、各縫面が緩やかな角度で外方に向かって立ち上がる。

北東側辺の石組みは、幅40cm前後、底面からの高さが29cm前後で、高さが南西側辺に比べて低いのはこの石組み上に鐵錠群が置かれたことと関連するかも知れない。概して小形の縫を利用しておらず、内側に面しては、南西面と同様緩やかに外方に向かって立ち上がる。南東寄りで内側にや



第131図 古曾志大谷1号墳前方部埴頂主体部出土鉄製品実測図

や乱れている礫群は、後に転落したもののが可能性がある。

北西側木口辺は、両側辺とは異なる礫の用い方をしている。まず底に他と同様の大きさの石を置いた後、長さ30~40cmの大形の礫の広い面を内側にしてほぼ垂直に立てるよう据えている。底面からの高さは40cmと、他の辺に比べて高い。

両側辺の石組み間の空白部分の幅は約60cmで、底面は中央に向かってわずかに湾曲する。よって両側辺石組みの礫面から底面にかけては、緩やかな「U」字形を呈する。また底面は南東（前方部先端方向）から北西（後方部方向）に向かって下に傾斜する。

以上のような石組みや底面の状況から木棺の形態は、底から側面にかけて丸く、木口はほぼ垂直な平面を呈すものと考えられ、船形木棺のような形が想定される。木棺の幅は、両側の礫の立ち上がりの頂点の幅から推測して90cm以上と考えられるが、高さは周囲の石組みが低いことや前に述べたようにこの主体部が墳頂からかなり浅いことを考慮すると、あまり高いとは考えにくい。よって蓋に関しては、身と同様の断面半円形ではなく、板状のものであった可能性もある。

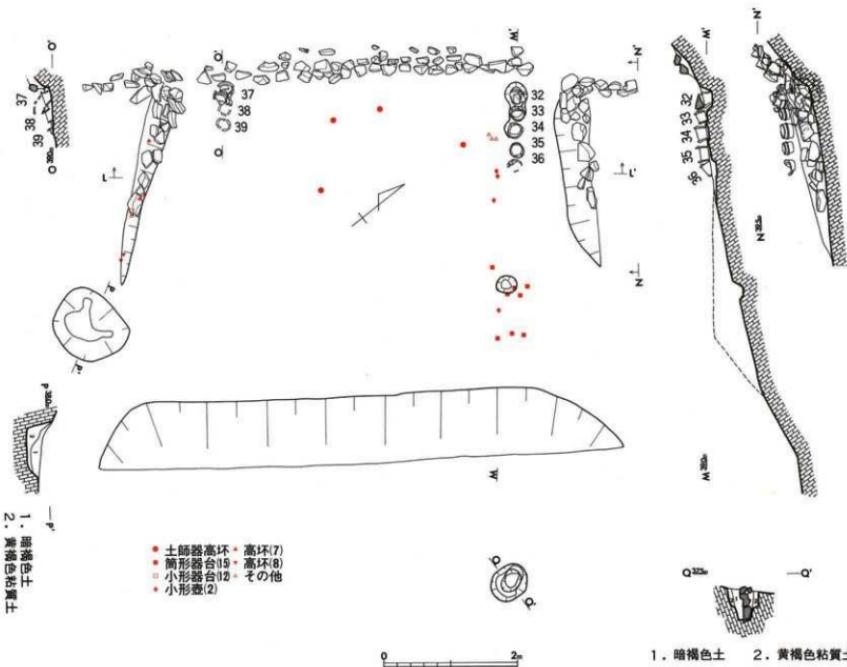
掘り方は、石組みの外縁とはほぼ一致しており、幅1.4m~1.5m長さ2m以上となる。掘り方の底はややいびつで緩やかな「U」字形を呈し、まず底面を揃えるために上が敷かれ（第128図3層）、その上に礫が配置されている。

**遺物出土状況（第129図）** 北西木口から1m南東部分に中軸に平行して大刀が切先を北西に向けて出土、その切先の北東寄りに刀子が2本重なって出土している。また刀子から65cm南東に鉄斧が刃先を大刀のほうに向けて出土している。大刀は中軸からやや南西寄りに置かれており、遺体の横に添えられていたものであろうか。これらは底部には密着しており、棺内に納められたものであろう。

一方北東側側縁の石組み上には、鉄鎌が39本の束と独立した1本とでそれぞれ出土した。39本の束は北西木口から約1.2mの部分から切先をほぼ揃えて密着して出土しており、切先方向は北西（後方部方向）である。これらの鉄鎌は棺外に置かれたものと考えられる。

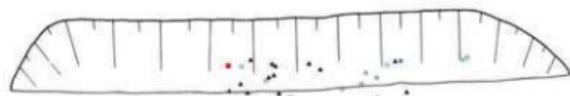
**遺物 大刀（第130図）**は、長さ99cm、刃部長82cm、刃部幅約3.5cmを測る比較的大形のものである。刀身はほぼ直線状を呈し、切先に向かっては比較的鋭い角度で屈曲するような形をとる。峰の部分の幅は現状で1cm程度を測る。茎は長さ17cm、幅が刀身に近い部分で2.75cm、先端部分で2.5cmを測る。目釘穴は2ヶ所に見られ、相互の孔間は11.2cmある。刀身と接する部分の刃部側には長さ1cm、深さ2mmばかりのくり込みが見られるが、これは茎と特殊な柄を止めるために施されたものと考えられる。

**鉄鎌（第131図）**は40本出土しているが、束になっていたため、互いに付着して全ての個体を実測することはできなかった。これらは長さが約15~18cm程度で、いずれも片刃で短い刃部と長い頭



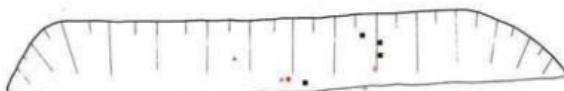
第132図 古曾志大谷1号墳前方部造り出し実測図

壺類



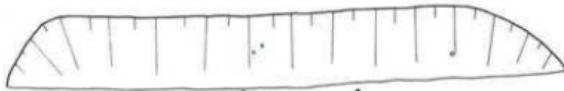
- 壺(17)
- 壺(21)
- 壺(18)
- 壺(19)
- 壺(20)

高坏類



- 土師器高坏 高坏(4)
- 高坏(6)
- 高坏(5)
- 小形器台(13)
- 高坏(9~11)
- 小形器台(12)

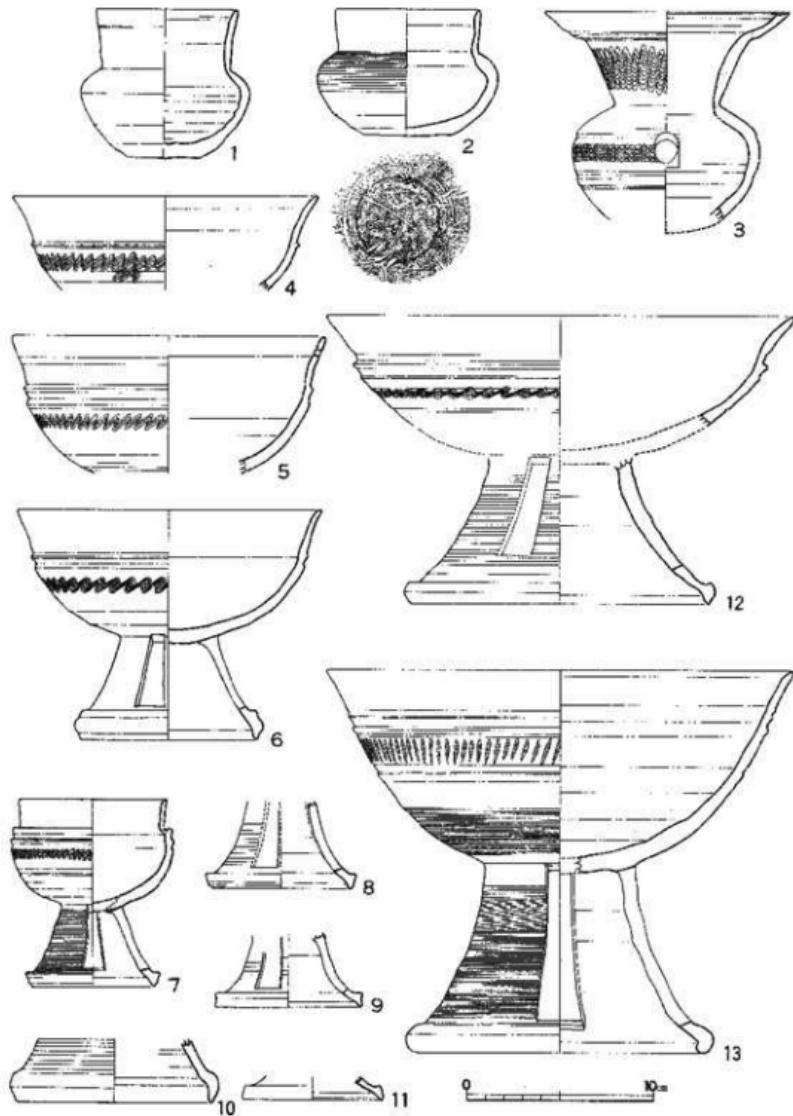
その他



- 筒形器台(10)
- 子持壺(14)
- 小形壺(2)
- 甕(3)
- 筒形器台(15)
- 小形壺(1)
- 奈良時代坏 (第143回)

0 1 2

第133図 古善志大谷1号墳造り出し部南西側遺物出土状況(番号は第134~137図の遺物番号と同じ)



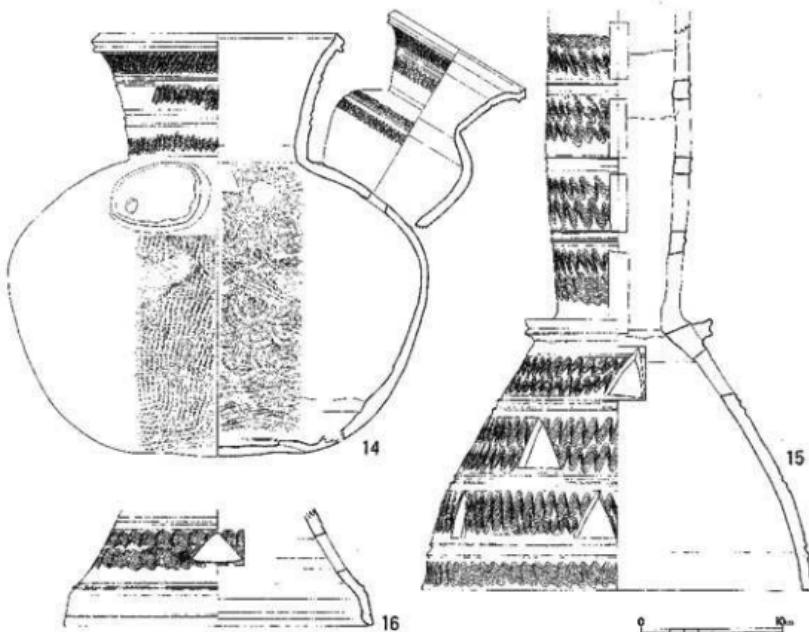
第134図 古曾志大谷1号墳前方部造り出し出土遺物実測図(1)

部を持つものである。刃部の長さは3cm前後のものが多く切先は峰側が直線的で鈍く尖り、いずれも鋭角的に入りこむかえりを持つ。頭部断面は長方形を呈し、茎との境はややふくらみをみせる。注目されるのは一面に微細な筋条痕が見られる個体があることである(5, 8)。これは一部のものにしか見られないこと、片面にしかないことから、束ねたまわりを包んでいたものの痕跡の可能性がある。茎には木質がよく残り、表面には桜の皮を巻いている。

刀子は1点は茎を失っており刃部のみ出土している(12)。13は全長11cm、刃部長7cmで、刃部最大幅1.3cmを測る。茎部は断面が平たい長方形を呈し、わずかに木質が残る。鉄斧(14)は着柄部を折り返して袋状にしたもので、刃部は曲線を呈す。全長7.4cm、刃部幅3.4cmを測る。

#### ⑦ 造り出し

検出の状況 前方部の先端(南東辺基底)の中軸よりやや北西に偏った位置に造り出しが付設されている。造り出しあは基本的に地山を削り出して作っており、明らかに古墳築造当初から設けられたものである。



第135図 古曾志大谷1号墳前方部造り出し出土遺物実測図(2)

幅は前方部と接続する部分で6.6mを測り、先端部に向かってやや開いていき、先端幅は推定8m前後となる。自然地形が先端方向（南東方向）に向かって下がっているため、先端にいくにしたがってかなり流出しているが、地山を削り出した先端辺が残存しており、長さは北東側で5.4m、南西側で5.7mを測る。高さは前方部との接続部では35cmと低いが、先端部にいくにしたがって基底との高さは高くなる。側縁基底は地形に沿って先端方向に下がっていき、斜面には埴体の葺石から引き続いて葺石が施されているが、先端辺にはまったく葺石は見られない。

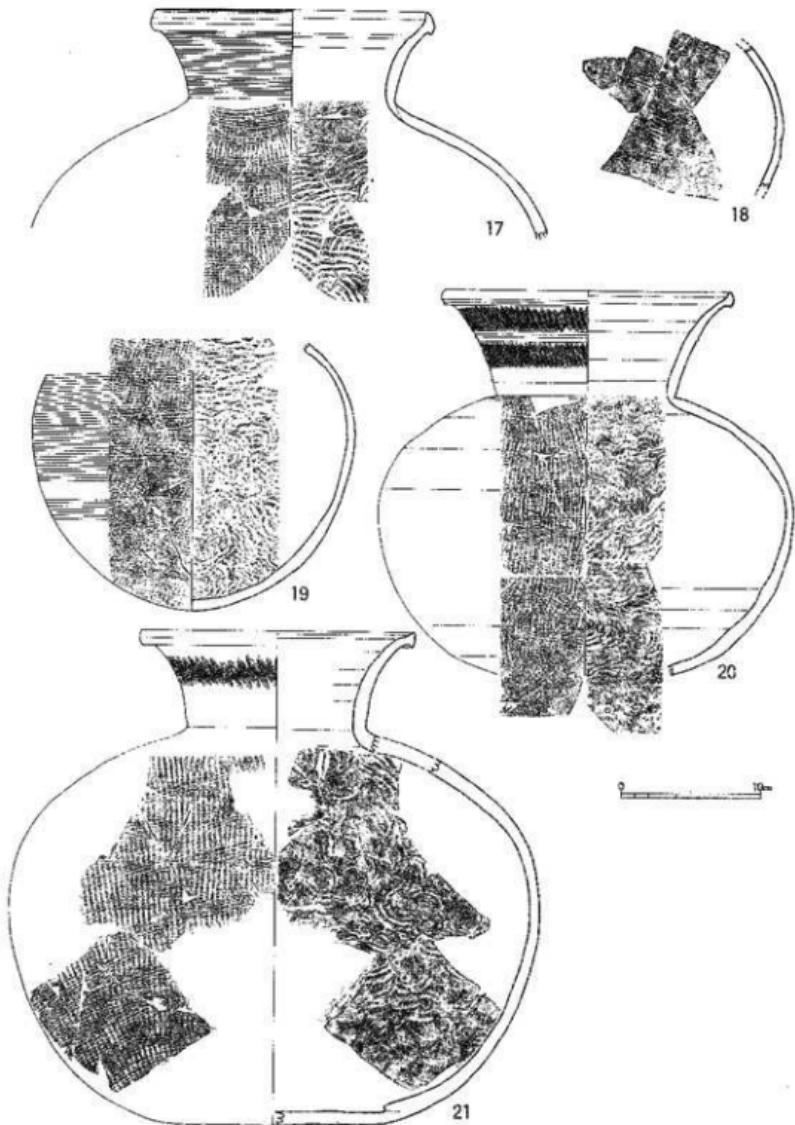
上面は基部付近で幅5.4mを測り、現在はかなり傾斜しているが元は水平に近かったものと考えられる。上端側縁から50~60cm内側には、埴輪が近接して北東側で5本、南西側で3本ならんで出土しており、両側辺にはほぼ隙間なく埴輪列があったものと推定される。なおこの埴輪列の最も基部寄りのものは、両側とも朝顔形埴輪である。この朝顔形埴輪のうち北東列のものは他の埴輪よりも一段分深く埋められていたが、これは北東列の朝顔形埴輪が南西列のものよりタガが1段多く高さが高いためため、両列の高さを揃えるために行われたものであろう。

造り出しの周辺では、3個のビットが検出された。P1は南西辺の裾付近に接して検出されたもので、上端で114×93cmの橢円形を呈す大形のものである。深さは42cmを測り、底は不定形である。P2は北東辺の埴輪列の延長線上で検出されたビットで、直径約30cm、深さ14cmを測る。P3は造り出しの裾外から検出されたもので、上端で60×52cmの橢円形を呈す。ビット内は2段掘りになっており、深さは48cmで内部には石が入っていた。いずれのビットも造り出しと直接関係があるかどうかは不明だが、後に述べるようにP3周辺から奈良時代の須恵器が多く出土しており、P3はその時期のものの可能性がある。

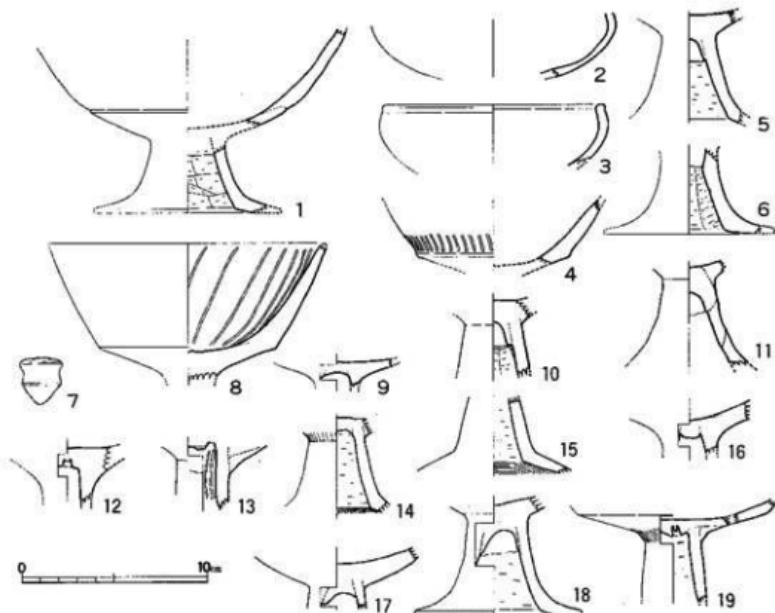
遺物出土状況 造り出しの上面及び南東裾外からは数多くの土器が出土している。特に南東裾外からは多量の土器が出土しているが、造り出し上面がかなり流出していることを考慮すると、これらの一部または全部が、造り出し上面にあったものが流れたもの可能性もある。

(a) 造り出し上面出土状況（第132図） 上面には、高杯、器台類が残存していた。特に土師器高杯（丹塗り）は図示したもの以上に多くのものが上面中央付近から出土しており、より基部に近い部分に置かれていたことが想定される。上面東隅のP2付近には筒形器台（15）が集中して出土している。この筒形器台は裾外からも小量出土し、また墳丘の周囲からも散在的に出土しており注目される。南西裾付近から出土している高杯（7）（8）等は、上面南西辺の肩付近に置かれていたものか。また北東辺付近には小形壺（2）が数点出土しており、この個体は裾外の北東半からも出土している。

(b) 造り出し南東裾外出土状況（第133図） 裟外からは須恵器壺、高杯、器台、疊、子持ち壺、土師器高杯等が細かな破片の状態で出土している。これらは概して散漫な出土状況を示すが、細か



第136図 古曾志大谷1号墳前方部造り出し出土遺物実測図(3)



第137図 古曾志大谷1号墳出土土器高坏実測図 (1~18: 造り出し, 19: 後方部旧表土直上)

く見ると十師塚高坏、壺(17)、高坏(4)(6)、筒形器台(16)のようにはば中央部を中心に出土するもの、壺(19)(21)、小形壺(2)のように北東半を中心に出土するもの、壺(18)、甕(3)のように南西半を中心に出土するもの、壺(20)、小形器台(13)、子持ち壺(14)、高坏(5)のようにはば全城からまんべんなく出土するものなど個体によって出土状況に差が見られる。そのうち小形器台(13)は口縁部分だけが造り出しから出土し、その他の部分は前方部主体部周辺から出土している。また奈良時代の坏がP3周辺から集中して出土している。

以上述べたように、これらの遺物は原位置を留めたものではないが、個体により出土状況に差があることから、おおよそそのところ元の状況を反映しているものと想定される。これらの出土状況で共通していえることは、○破片が細かい。○概して散漫な出土状況である。の2点をあげることができる。この2点から、これ上器類が破碎されてばらまかれたという可能性が考えられる。筒形器台(15)、小形器台(13)は、同一個体片が造り出しがれからも出土しており、破碎されたことは明らかである。また8m以上にわたって散在する高坏(5)、子持ち壺(14)、壺(20)なども破碎さ

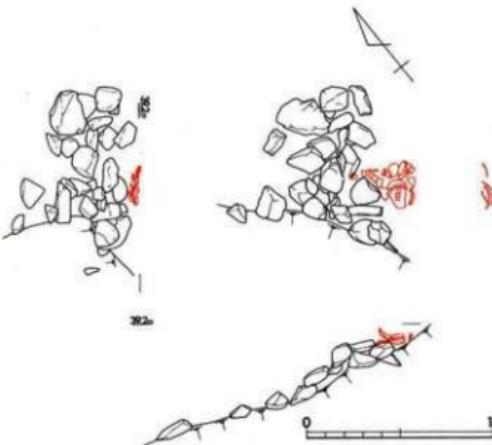
れた可能性が極めて高いと言えよう。その他の個体についても確証はできないものの、同様であるものが多いのではないかと推定される。

遺物 小形直口壺（第134図1,2） 1は平底で最大径が上方にくる胴部にわずかに外方に開く口縁部が付く。胴部下半には回転ヘラケズリを施す。2は1に比べて胴部径に比して器高が低く、口縁部も短い。胴部下半

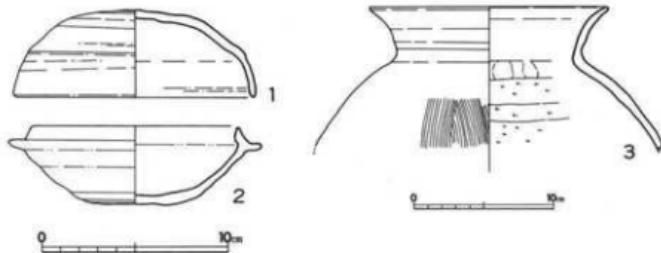
には回転ヘラケズリ、上半にはカキメを施しており、底には「×」状のヘラ記号が見られる。

埴（第134図3） やや偏平な球形の胴部の中央の孔付近には、4条の櫛状工具による刺突文がめぐらされ、その上下は浅い凹線により区切られている。頸部と口縁部の境にはやや不明瞭ながらも段を設けて区切り、口縁はさらに外方に開く。頸部の外面には櫛描波状文を施し、口縁端部内面には浅い段を設ける。

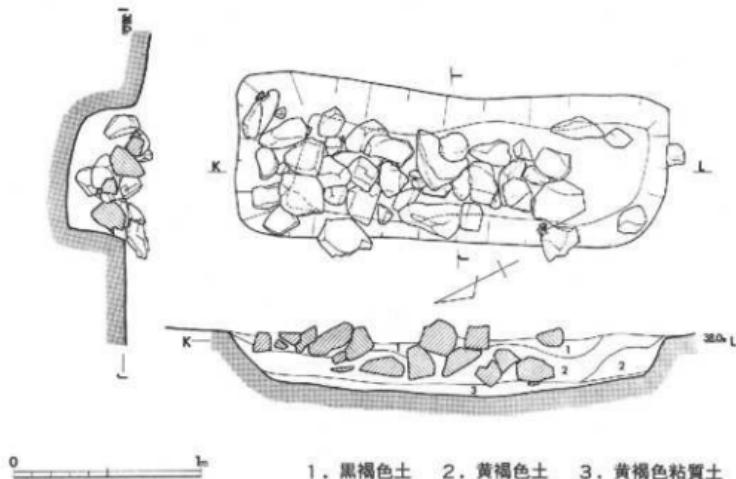
高坏（4～11） 4～6無蓋高坏である。4,6は坏部の破片で、4は外方に開く口縁部と体部の



第138図 古曾志大谷1号墳後方部崩壊部分北側埴壺の残存埴石上祭祀遺物出土状況実測図



第139図 古曾志大谷1号墳後方部西隅埴石上祭祀遺物実測図



第140図 古曾志大谷1号墳前方部据外SK-01実測図

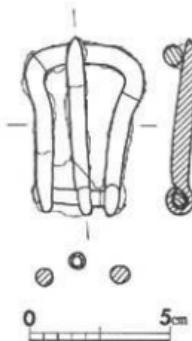
境に突帯を設けて区切り、その下に櫛描波状文を施す。5は4に比して深く、口縁部もあまり開かない。口縁部と体部の境には不明瞭ながらも2条の突帯を設け、その下方に櫛描波状文を施している。6は完形に復元できる個体で、口縁部と体部の間に凹線を施して区切り、さらにその下にもう

1条の凹線と櫛描波状文を施す。波状文は4, 5に比べて丁寧で、体部下半はヘラケズリを施す。脚部は外方に開きながら脚台にいたり、3方向に台形のスカシを設ける。脚台は丸く肥厚させ、脚端部はつまみ出すようにして丸くおさめる。

7は半球形の体部に直立する口縁部がつく珍しい坏部の形で、体部と口縁部の境には溝状になる明瞭な段を設けており、蓋がつく可能性もある。この段の下にさらにもう1段段を設け、その下方には刺突をめぐらす。脚部にはカキメを施し、4方向に台形のスカシを設け、端部は上下にわずかに肥厚させる。

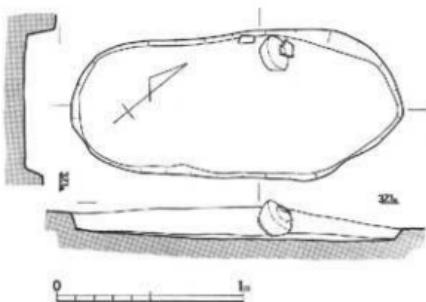
8～11は脚部の破片である。8, 9はともに外面に幅の広いカキメを施し、3方向に台形スカシを持つもので、脚端は上下にわずかにつまみ出す。10は他の高坏に比して底径が大きいもので、外面には幅の広いカキメを施し、脚台はわずかに外側に開いたの

第141図 古曾志大谷1号墳  
前方部墳據SK-01出土遺物  
実測図

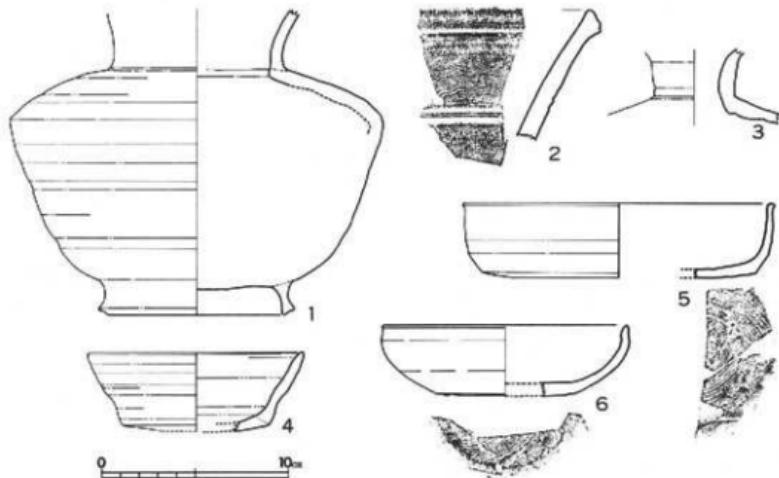


ち脚端に向かっており、端部は細くおさめる。11は端部の小片でかなり開く形態をとり、何かの口縁部の可能性もある。

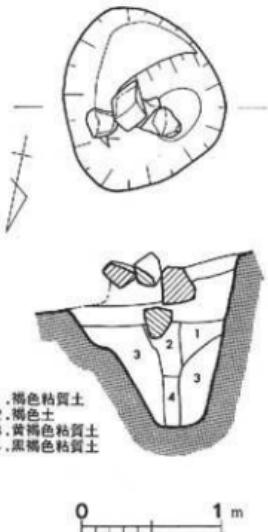
**小形器台（12, 13）** 無蓋高杯が大形化した形態で、ここではとりあえず小形器台として取り扱う。12は杯部は浅く大きく開いており、体部と口縁部の境には明瞭な段を設けている。この段の下にはさらに浅い段を設け、その下には振幅の少ない櫛描波状文を施し、その下方に1条の沈線を施している。脚部も体部から下方に向かってよく開いており、外面には幅の広いカキメを施し、3方向に台形のスカシを設ける。脚台は、コーナーを明瞭に表現している。一方13は、基本的な形態は同一であるが、細部でかなりの変化が見られる。杯部はかなり深くなり、体部と口縁部の境の段はわずかな凹線に、櫛描波状文は刺突文に退化している。



第142図 古曾志大谷1号墳前方部壺外SK-02実測図



第143図 古曾志大谷1号墳SK-02ほか出土遺物実測図  
(1:SK-02, 2:後方部北東側壺外, 4:北東側くびれ, 3・5・6:前方部先端壺外)



第144図 古曾志大谷1号墳前方部  
据外SK-03実測図

壁には、円形の孔が開けられている。

筒形器台（15, 16） 15は上部を失っているが、筒部はエンタシス状に中央部がふくらみ、残存部分で4方向の長方形スカシが4段見られる。スカシとスカシの上下方向の間には浅い凹線によって2条の突帯が表現され、その間には2段の櫛描波状文がそれぞれに施される。脚部はわずかに外湾しながら開くスカート状を呈し、筒部との境には埴輪のタガ状の突帯を貼りついている。脚部外面は筒部と同様4段に区画され、その上方3段には三角形のスカシが開けられ（数は不明）ており、2段の櫛描波状文が施される。最下段の脚端部の区画にはスカシはなく、振幅の狭い波状文が1段施されている。脚端の底は平坦で、外方にわずかに突出させている。16は脚部裾の破片で、15に比すと脚部と脚端の間は屈曲して明瞭に区画し、脚端の外面に波状文は見られず底も平坦ではない。脚部はやや内湾しており、外面には15と同様三角形スカシと2段の櫛描波状文が見られるが、波状文の振幅は小さい。

臺（第136図） 17は胴部外面には平行タタキ、内面には同心円タタキが残り、外面にはカキメを施しているが、内面のタタキはまったく消していない。頸部外面にはカキメを施し、口縁部は上下に肥厚させている。19は球形の胴部で、外面は平行タタキ、内面は同心円タタキが残り、外面に

脚部は12ほどは開かず長さが長くなり、外面のカキメは細く浅くなっている、スカシは4方向に開けられる。脚台は12に見られる鋭さはまったくなく、丸くおさめる形となっている。

子持ち壺（第135図14） 最大径がやや上方にあるわずかに偏平な胴部の上部3ヶ所に子壺を取りつけた壺である。胴部外面には平行タタキ、内面には同心円タタキ痕が残るが、内面は若干ナデ消している。頸部はやや外反しながら立ち上がり、外面は2条の凹線により分けられた3区画に櫛描波状文が施される。頸部と口縁部の境は、突起を外方につまみ出すことによって区画し口縁端は上方にわずかにつまみあげる。子壺は直接接合するものはないが、同一個体と考えられるものがある。それは胴部を切断した形で親壺に接着し、胴部肩付近に1状の沈線が見られ、その上下に刺突文をめぐらす。頸部から口縁部にかけては親壺と同様の特徴を持つが、頸部の櫛描波状文は2段である。子壺が接着する部分の親壺の器壁には、円形の孔が開けられている。

はカキメを施している。20はやや偏平な胴部を持ち、外面には平行タタキ、内面には同心円タタキが残るが、内面のタタキは若干ナデ消している。頸部外面には2段に細かい櫛描波状文を施しており、口縁部は上下に突出させて端部はシャープである。21はやや偏平な胴部で、底は明瞭ではないが平坦である。内外面ともタタキが残るが、内面は若干ナデ消し、外面にはカキメを施す。頸部には1段やや不規則な櫛描波状文を施し、口縁は上下につまみ出している。

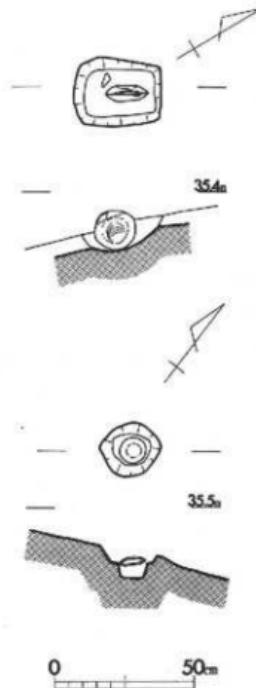
**土師器高坏**（第137図1～18） 坏部は底と口縁部との間に明確に段を持つもの（4）、不明瞭ながら段を表現したもの（1）、ボール状のものに大別でき、暗文を施したものも見られる。脚部も中途で屈曲するものと、不明瞭なものとがあり、内面はヘラ削りを施したものが多く、屈曲部より下に細かなハケメ状の調整を行ったものもある。いずれも丹塗りである。

#### ③ 後方部崩落部祭祀遺構

後方部北西辺（後方部先端辺）の下段葺石が、地滑りによる崩落部分の肩に接する部分（第100図、O-5付近○印部分）から、土師器、須恵器が出土した。これらの土器は下段葺石の崩れた石の上に置かれていたもので、まず丹塗の土師器壺を石の上に置いた後、須恵器の蓋と壺をいずれも内側を上向きにして据えている（第138図）。これらは崩落した石の上に置かれていることから、築造後かなりの時間が経った後置かれたことは間違いない。

**須恵器蓋**（第139図1）は丸い天井部と口縁部との間にわずかに段を表現しており、天井外面には回転ヘラケズリを施す。壺身（2）は口縁部の立ち上がりがかなり頗る、長さも短くなってしまっており、底部外面にはなでるような回転ヘラケズリが残る。土師器壺（3）は丸い胴部から外反して口縁部が開くもので、胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ、表面には丹による彩色を施している。須恵器の特徴は山陰須恵器編年Ⅲ期でも新しい様相をもつもので、およそ6世紀末～7世紀初頭頃のものであろう。

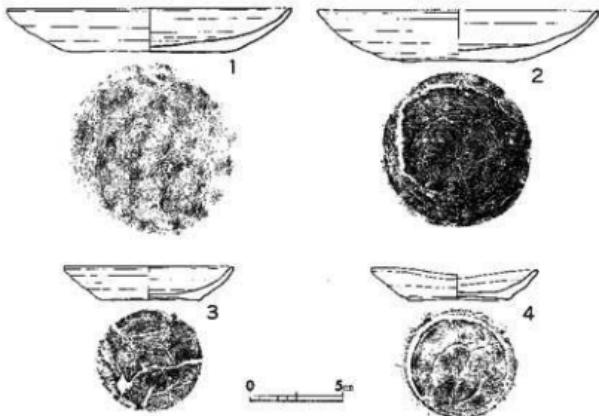
これらの土器類は、置かれた位置が地滑りによる崩落部の肩にあたる部分であり、また崩落した



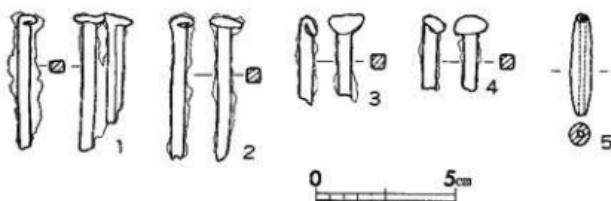
第145図 古曾志大谷1号墳前方部  
南裾外殿様道下近世祭祀遺構実測図

石の上に置かれた状況から考えて、墳丘の崩壊に対する何等かの行為を反映している可能性が強い。とすれば、この土器の時期が地滑りによる墳丘大規模崩壊の時期を示している可能性があり、およそ古墳築造から100年前後経過後地滑りによる崩落が生じたことになる。

これに関連して興味深いのは、崩落地方に流



第146図 古曾志大谷1号墳南端殿様道下祭祀遺構出土土師質土器実測図



第147図 古曾志大谷1号墳南端殿様道内出土遺物実測図

出したはずの葺石、埴輪等の墳丘の残骸や主体部の残骸、副葬品等がまったく見られないことである。あるいは、崩落後こうした残骸の「かたづけ」を行い、何らかの祭祀を行ったのかも知れない。これらの土器群がこうした祭祀の一環と考えることも可能であろう。

### ⑨ 墳外の遺構

SK01(第140図) 前方部南東辺(先端辺)の裾から約2m離れて、長軸を裾のラインとほぼ平行に掘り込んだ土壙が検出された。この土壙は長さが上端で2.3m、下端で1.8m、幅が上端で0.8m、下端で0.5mを測るやや不整の長方形の土壙である。深さは21~30cmを測り、底部は中央部分がくぼんでいる。

土壙内には葺石と同様な石が充満し、覆土上面からは石に挟まれる形で鉄製絞具が出土している。これらの石は転落した葺石が落ちこんだ可能性もあるが、上面から絞具が出土していることから考

えると、土壙に伴うものとも考えられる。

鉄製絞具（第142図）は馬蹄形のフレームの先端に軸を受け、それを回転軸に棒状の芯を取りつけたものである。軸は1本で、芯をはさんで二又に分けてバンドの帯を接続したものであろう。

この土壙は形態、規模から見て墓壙の可能性が高いと考えられる。また古墳の裾と平行して作られていることから大谷1号墳に付帯する墓壙の可能性が高い。

SK02（第142図） 前方部南東辺の裾外、SK01のさらに南東約7.6mの部分（第100図、E-32付近）で検出された土壙である。長さ1.8m、最大幅0.8mの長椭円形を呈し、深さは検出面から最大15cmと浅い。北西壁に接した底部から、須恵器壺が完形に近い形で出土している。

須恵器壺（第143図1）は肩の張った胴部に高台が付く形で、頸部はやや外方に開きながら立ち上がり、口縁部は破損して失われている。胴部最大径は19.8cm、高台径が10.3cmを測る。7～8世紀のものであろう。

土壙の規模からすると、墓壙の可能性もある。大谷1号墳と直接の関係はないが、造り出しや墳丘から近い時期の須恵器が出土しており、古墳をなんらかの形で意識していた可能性もある。

SK03（第144図） SK02の約6m北の、大谷1号墳を築く基盤となる平坦面の肩に近い部分（第100図、C-30付近）で検出された土壙である。上端で径85～97cmの椭円形を呈し、深さは90cmを測る。土壙中段南側の底から45cmの部分には幅27cmの平坦面があり、二段掘り状となっている。覆土の断面を観察すると、底から55cm上方にかけて幅12～18cmの柱痕状のものが見られ、その上方には大谷1号墳の葺石と同様の石が数個入っている。大谷1号墳との関連性は不明である。

#### 「殿様道」に関わる遺構、遺物

土器埋設ピット（第145図） 大谷1号墳築造基盤平坦面の南端付近（第100図 S-33付近）の「殿様道」疊群下の盛土の下面から検出されたピットである。約2.5m離れて2個検出されており、北東のものをP1、南西のものをP2と呼ぶ。P1は上端の長辺30cm、短辺24cmの長方形で、検出面からの深さ10cmを測る。ピット内には、土師質土器皿が2枚、口縁部を重ね合わせて垂直に立てた状態で置かれていた。皿の内部には、細かな砂が充満していた。

P2は上端の径が20cm程の円形でピット内は二段掘りとなっている。上端から中間の段までは深さ8cmで、底からさらに5cm掘り込んでおり、底面の直径は8cmを測る。ピット内中間の段のレベルで、小形の土師質土器皿がP1と同様口縁部を重ね合わせて水平に置かれていた。P1のものと同様、皿の内部には砂が充満していた。

P1出土の皿（第146図1,2）は、共に口径15cmで回転糸切り痕の残る底部から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端は薄く丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデで、底径は1が8.7cm、2が6cmである。P2出土の皿（3,4）は、共に口径9cm、底径5.4cmを測り、回転ヘラ切り痕の

残る底部から体部はやや内湾しながら立ち上がる。

これらのピットは土師質土器の出土状況が酷似しており明らかにセットで、何らかの祭祀に関わる遺構であろう。「般様道」の直下であり、しかも位置が「交差点」に当たるところであることから、道の造成に関係している可能性もある。

「般様道」敷石内出土遺物（第148図） 「般様道」の敷石に混ざって出土したものである。1～4は断面がほぼ正方形の鉄釘で、頭は細くして折りまげている。5は細い紡錘形の上鍤である。

## 2. 古曾志大谷2号墳

古曾志大谷2号墳は、大谷1号墳の前方部から南に延びる尾根の先端部に位置する。古墳の西下方は地滑りにより急峻な斜面となっており、その西側は干拓地で、築造時にはすぐ下方に穴道湖が広がっていたはずである。

### 墳丘

当初一辺約8mの方墳と考えられたが、墳丘南側には地山をわずかに削り出した低い前方部状の加工が見られ、あるいは前方後方墳（約14m）であった可能性もある。この加工段は墳丘の地山部分に直接接続し、次第に外方に開いて端部で丸く回っていく。ただこの削り出しは東側の一辺しか確認できず、また前方後方墳としては一般的に規模があまりに小さく、墳丘の形態については断定はできない。墳丘の東側から北側にかけては、浅い溝が確認されており、それは西側にも続く。溝の幅は北側で2m、東側では広がって3.7～4mを測る。西側の裾付近からは、土器高杯が5点出土している。

墳丘は、地山を若干削り出した後、盛り土をして築成しているが、盛り土の相当量が流出しているものと考えられ、検出時での墳丘の高さは低い南側裾を基点にしても1mに満たない。地山直上には一部旧表土と考えられる黒色土がみられる。

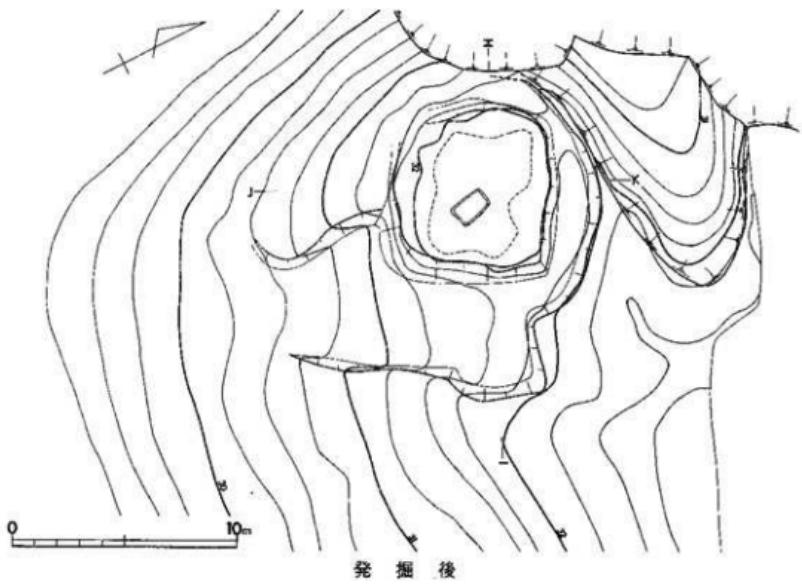
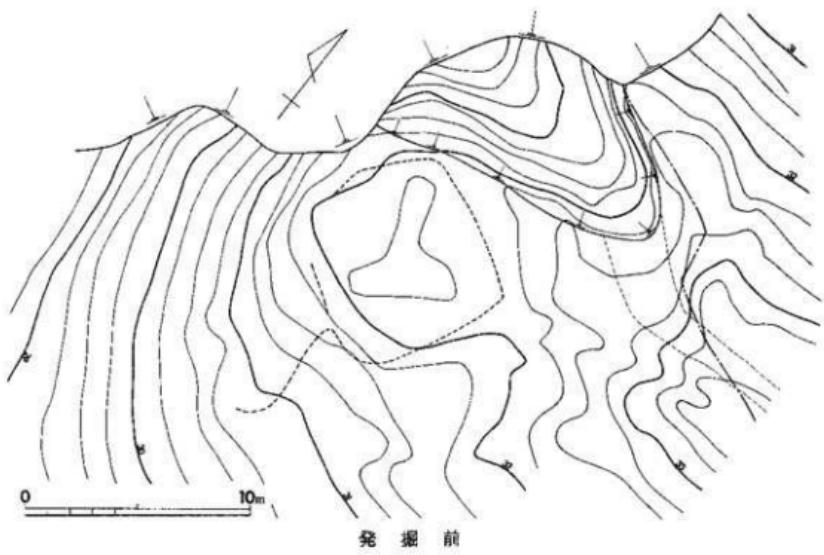
### 主体部（第150図）

墳丘上面の中央からやや南に偏った部分で、対角線にはば平行して上塙が検出された。土塙は長さが中軸部分で165cm、幅が南側で96cm、北側で78cmを測る不整長方形を呈す。深さは、墳丘上面がかなり流出していることもある、10cm程度しかない。

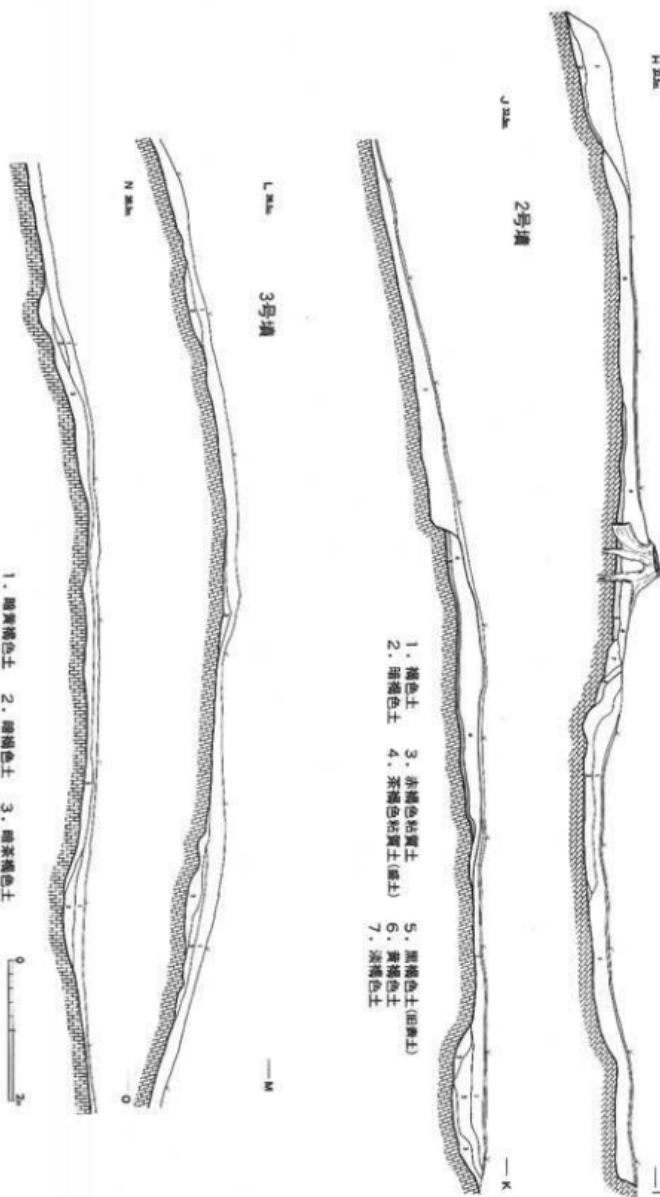
この土塙の南短辺の西壁に偏った部分で、須恵器蓋杯が2つ並んで検出された。双方とも杯と蓋がセットとなっている。出土状況から、枕であった可能性もあるが、出土位置が偏っており確言はできない。

### 遺物（第151図）

主体部出土蓋杯（1～4） 蓋1は、回転ヘラ削りを施す天井部と口縁部との境に2条の沈線を



第148図 古曾志大谷2号墳発掘前地形測量図および発掘後墳丘測量図

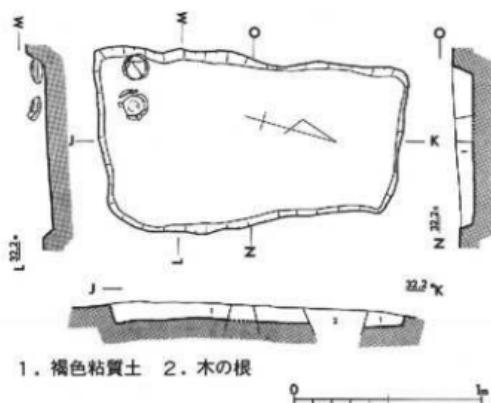


第149図 古曾志大谷2・3号墳土層測定図

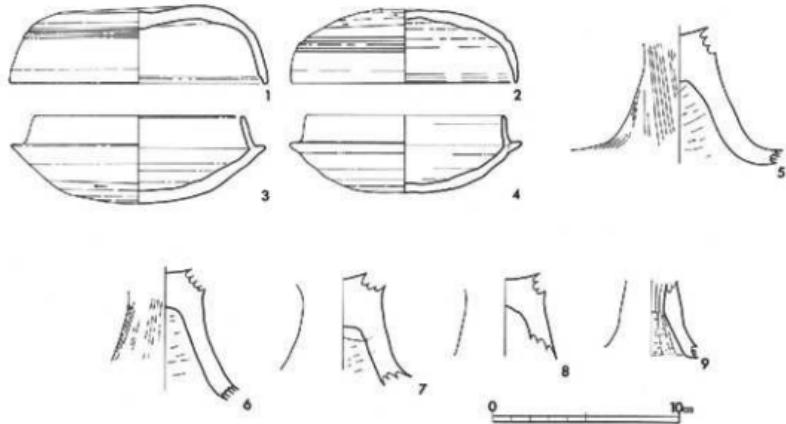
施しており、口縁部はわずかに外方に向かって下りる。口縁端部の内面には浅い段を設けている。口径14.5cm、器高4cmを測る。坏3は最大径14.5cm、口径11cm、器高4.7cm、1とセットになるもので、体部下半には回転ヘラ削りを施す。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。坏4は、最大径13.9cm、口径10.5cm、器高4.1cmと3に

比してやや小形で、体部下半には回転ヘラ削りを施し、口縁部は垂直に近い角度で立ち上がる。山陰須恵器編年Ⅲ期でも、比較的古い特徴を持つものと考えられる。

墳出土土師器坏（5～9） いずれも脚部の破片である。基本的に中途に明瞭な段を持たず、次第に外方に開いていく形態で、外面にはハケメが見られるものがあり、内面はヘラ削りを施す。いずれも外面丹塗りである。



第150図 古曾志大谷2号墳主体部実測図



第151図 古曾志大谷2号墳出土遺物実測図 (1～4: 主体部, 5～9: 北西側周溝内)

### 3. 古曾志大谷3号墳

大谷1号墳後方部の北に続く尾根から東に派生する尾根上から検出された古墳で、谷を挟んで1号墳の北側にある。

#### 墳丘（第152・153図）

大谷3号墳は、尾根の比較的平坦な部分の先端部に位置する一辺約8mの方墳である。尾根の高い側（墳丘の北西側）には幅2mの溝が検出され、反対の南東側は流出により不明瞭となっている。墳丘は流出もしくは後世の加工が著しく、高さは北西の溝の底からわずか40cm、北東斜面の裾から60cmを測るのみであり、主体部等もまったく検出できなかった。南西裾を中心に墳丘の周囲から須恵器の小片が出土している。

#### 遺物（第154図1～3）

出土した破片はいずれも小片で、全形がわかるものはなかった。1は須恵器の小形の壺の底部である。丸底で外面は平行タタキ、内面には指頭圧痕が残る。2は小形壺の胴部で内外面とも回転ナデを施す。

### 4. 古曾志大谷4号墳

大谷3号墳からさらに南西に約10m下がった斜面で検出された古墳である。谷の最奥部に面しており、集落等への見通しはまったくきかない地点である。

#### 墳丘（第153・155図）

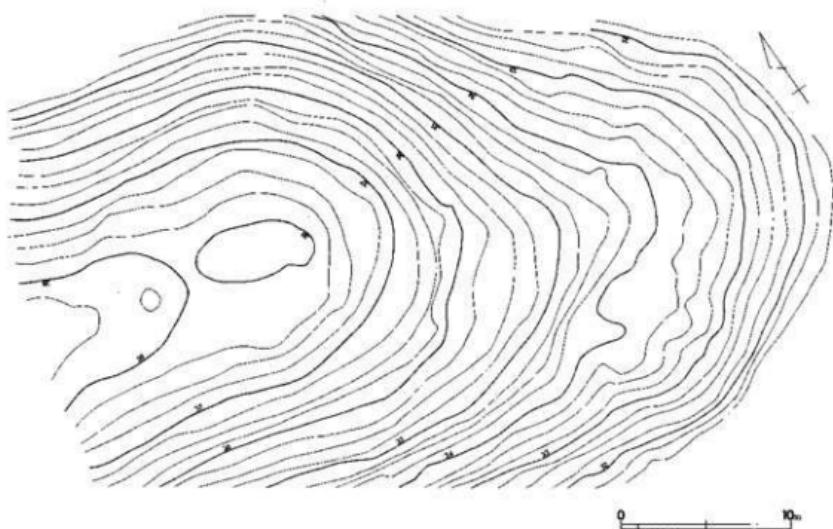
背後の丘陵を大きく削り取って溝を形成し、下方に盛土をして墳丘を作成するいわゆる山寄せの古墳である。この古墳はわざわざ尾根線から若干ずれた急斜面に築いており、墳丘の軸が東西南北に近い方向をさしていることからみると、あるいは地形条件よりも方向を重視した結果とも考えられる。墳丘の規模は、検出時で南北長8.2m、東西長が下端で7m、上端で5mを測り、ややいびつな台形状を呈していたが、かなりの流出があり、元は整った形であったかも知れない。

高さは、流出により不明だが、北側の裾と南側の裾とでは2.4m高さの差があり、築造当時は下方から見ると相当の高さであったものと推定される。

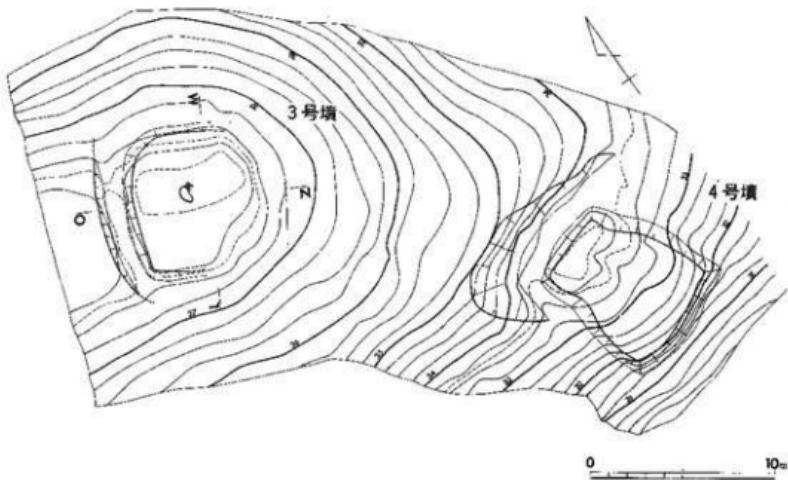
築成はまず、背後の山を高さ1.3m（検出時の高さ）にわたって削り、溝を作つて墳丘の西側の大略を整えたのち、全般に盛り上を行つたものと考えられる。地山の南半直上には旧表土が残つておらず、下方は地山整形を行なわなかつたことがわかる。築成の詳細は主体部の項でも触れたい。

#### 主体部（第156・157図）

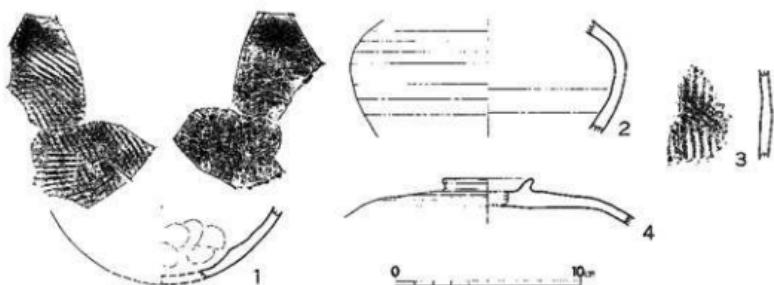
墳丘の中心からやや北にずれた部分の表土直下から、底石（2枚で構成）の周り3方向を1枚石で囲んだ小規模な石組みが検出された。この石組みの西側には盗掘坑と考えられる穴があり、その



第152図 古曾志大谷3・4号墳発掘前地形測量図



第153図 古曾志大谷3・4号墳墳丘測量図



第154図 古曾志大谷3・4号墳出土遺物実測図(1~3:3号墳, 4:4号墳)

部分の石が抜き取られていた。ただ短壁の石には両側にくり込みが刻まれており、反対側（東側）ではそのくり込みに石がはさみ込まれていることから考えて、この部分にも石があったことは間違いない。この石組みを復元すると、内法が長辺70cm、短辺35cm、高さ35cmのきわめて小形の「石棺」である。石材は底石、壁石とも凝灰質礫岩の切石で、底石のみは2枚を組み合わせている。

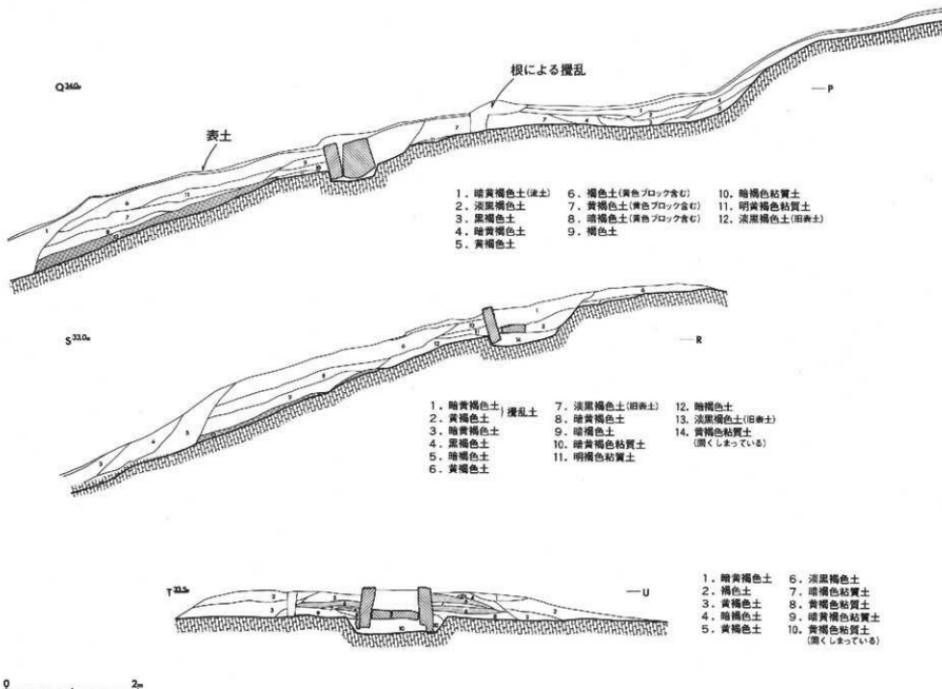
石材の厚さは壁石が18cm、底石が12cmで、石材と石材の間には小形の石が嵌ませてある。これは石と石を固定するとともに石棺内に土が流入しないための工夫であろう。石棺の下には地山を掘り込んだ掘り方が検出された。この掘り方は、現存する壁石の周囲はほぼ石の周りに沿って掘り込んでいるが、北側は大きいくびつに掘り込んでいる。

以上のような石棺の状況と、土層断面の状況から、この石棺を形づくる過程はおよそ次のようなものであったと考えられる。

1. 掘り方を掘る。
2. 掘り方に添う形で3枚の壁石を組み合わせ、底石の高さを調



第155図 古曾志大谷4号墳発掘後墳丘測量図



第156図 古曾志大谷4号墳埴丘断面土層実測図

整するために土を入れる。

3. 底石を据え、最後に北側の壁石を組み合わせる。

(この間、石の組み合わせ部分に小形の石を埋ませる。)

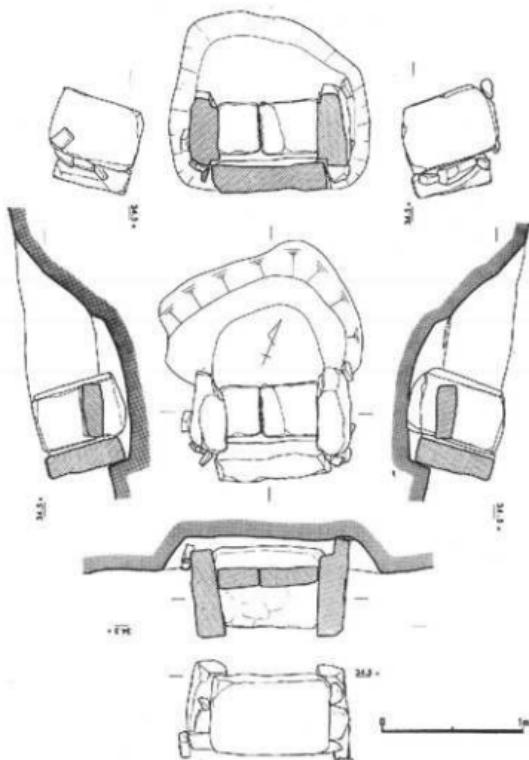
4. 石棺の周りを土饅頭状に盛り上げる。(この作業はあるいは石の組み合わせと並行して行われたかも知れない。)

5. 蓋石をのせる。  
蓋についてはまったく痕跡がなかったが、常識的に判断して元は存在していた可能性が強いであろう。

遺物（第154図4）

背後の轟の中の堆積

土から出土した須恵器蓋である。天井が平坦で輪状つまみが付けられており、およそ7世紀後半以降のものであろうか。この遺物が直接古墳に伴うものかは不確実であるが、墳丘や主体部の状況から、古墳時代終末期のものの可能性が高いと考えられる。



第157図 古曾志大谷4号墳小石棺実測図

## 第5節 古曾志清水遺跡

古曾志清水遺跡は、古曾志大谷1号墳から南に伸びる短い尾根と、東側に長く伸びる尾根上に位置している。4箇所に分散しているが、ひとつの谷に面しているところから一遺跡として扱った。各調査区は、西から順にⅠ～Ⅳ区と呼ぶことにし、Ⅰ区には古曾志大谷2号墳も含まれている（第158図）。

### (1) Ⅰ区の調査

宍道湖に向かって伸びた短くならかな尾根で、当初多数の遺構・遺物が存在すると予想されたが、出土遺物に比べて遺構は少なかった。Ⅰ区南西端には古曾志大谷2号墳があり、その東側斜面で土壙2基と土器の集中して出土する地点を、また北西端で加工段とピット群、その斜面下方で遺物集中地点を確認した（第160図）。

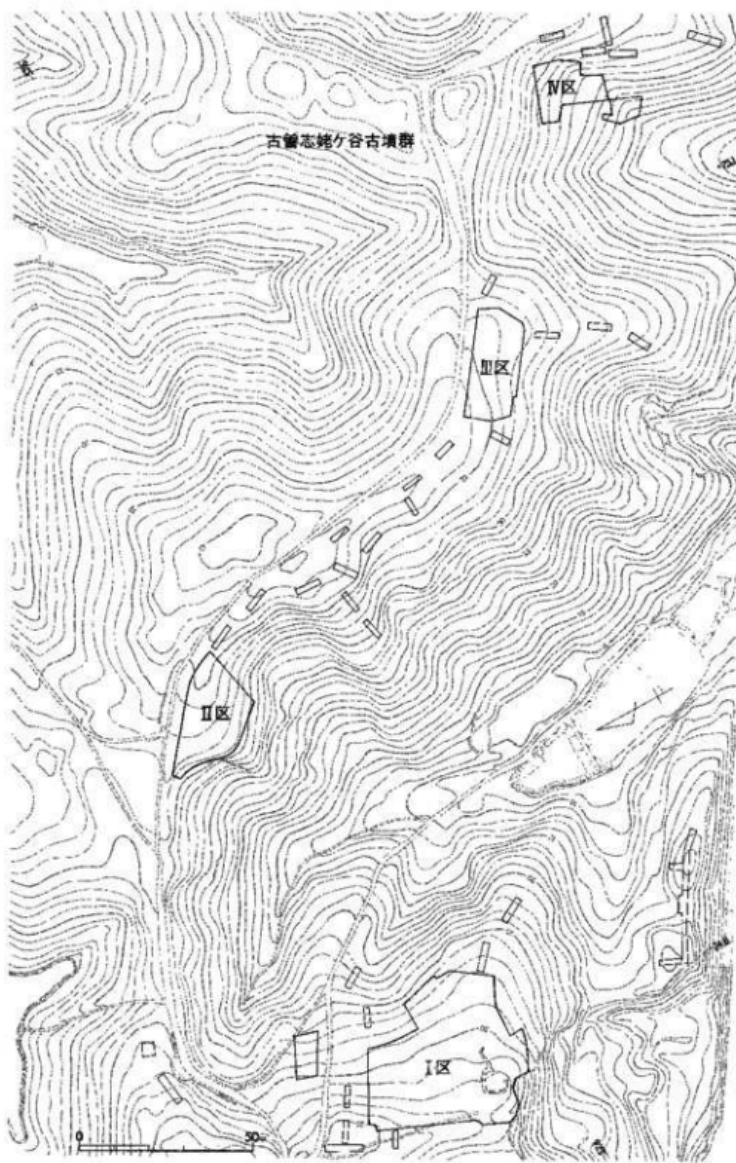
土壙 SK01は、平面形が長径1.7m、短径1.2mの楕円形の土壙であるが、底面は水半でなく、南側と西側に段がある。内部には赤褐色粘質土が堆積し、十層観察では切合関係は認めなかつたが、複数の土壙が重なっている可能性もある（第159図上）。遺物は出土していない。SK02は長径0.9m、短径0.6mの小形楕円形の土壙で、内部には炭化物を多く含んだ暗褐色土が堆積する。やはり遺物は出土していない（同下）。どちらも用途は不明である。

加工段 尾根頂部付近で検出した溝を有する加工段で、段差は約30cmである。全長は約6.7m、溝になっている部分はその半分程度である。明確な平坦面は残っていないが、斜面や下方にピットともうひとつ別の段があり、盛土して幅2.5m程度の平坦面を作り出していた可能性が強い。ピットはどちらも深さ20cm未溝で、ピット間の距離は1.8mである。加工段の南西側から、また別の溝を検出した。健状に一端が短く折れ曲っており、深さは10cm程度であるが、これと加工段との関係は把握しきれなかった（第161図）。

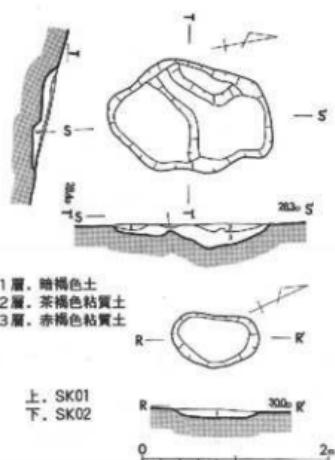
これらの遺構からは遺物は出土しなかつたが、斜面下方から弥生土器（第162図1）や磨製石斧（第163図6）等が出土しており、弥生時代の遺構の可能性が高い。

出土遺物 上記加工段の下方から弥生土器・旧石器～弥生時代頃の石器類（第163図）が、またSK01の南東斜面に堆積した暗褐色土中から奈良時代の須恵器類（第162図2～8）が出土した。

第162図1の弥生土器は、臺形上器の底部片で、外面に縦方向のヘラミガキ、内面にはナデ調整を施している。2は宝珠状つまみのつく蓋で、口縁端部はわずかに直立する。3は口縁部が内側に屈曲して段になる坏で、体部は全面回転ナデ調整を行い、底部は回転糸切り放しである。4・5は口縁がほぼ直立するもので、6には高台がつく。7は長頸壺の頸部で、口縁に向かうにつれ、器肉



第158図 古曾志清水遺跡調査区配置図



第159図 古曾志清水遺跡I区土壤実測図

ある白色の玉髓質メノウ製の台形様石器である。素材は横長の剝片を利用しておあり、背面には腹面と同方向の剝離面数枚と石核素材の底面がみられる。腹面の打点側には打瘤を除去する平坦剝離が施され、さらに腹面からプランティング状の剝離が、基部から刃部手前にかけて施されている。その反対側側縁の腹面には、基部付近から刃部にかけて細かな平坦剝離による調整が施されている。3は黒曜石製の石核か、あるいは他の何らかの未成品と考えられるものである。横長のやや分厚い剝片を素材に、主要剝離面には打瘤付近とその反対側側縁に調整剝離が加わり、背面には四方からの大きな剝離のまわりに若干の細かな調整が見られる。4・5は黒曜石製の石器で、4はいわゆる鎌形鎌と呼ばれるわたりの深いもの。一方、5はわたりがごく浅い小形品である。どちらも剝片鎌である。1・2は旧石器時代、3は時期は判然としないが縄文時代と考えられる。

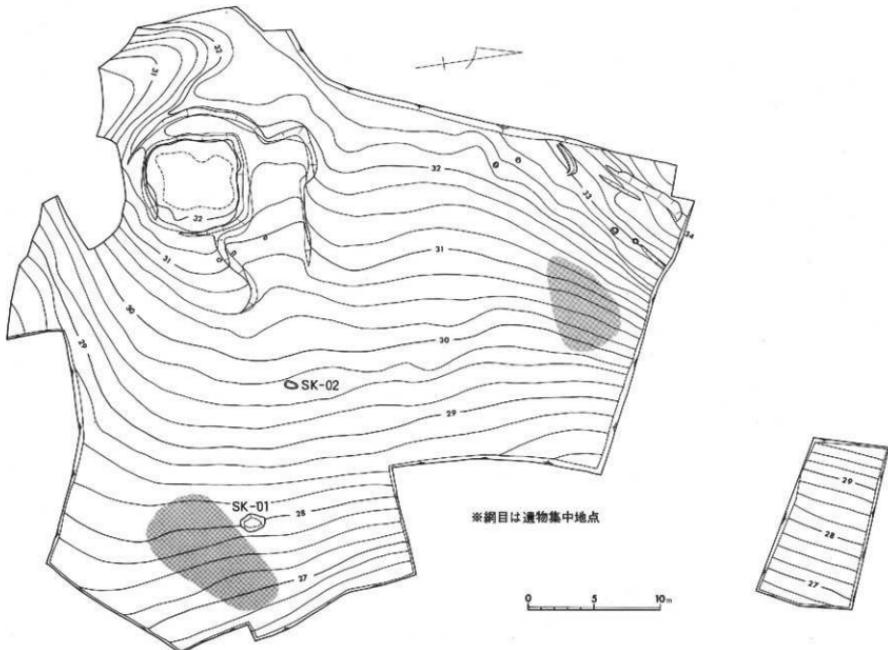
6は凝灰岩製の磨製石斧であるが、始刃の刃部がわずかに半分残るのみである。全面よく磨研されており、敲打痕は認められない。

## (2) II区の調査

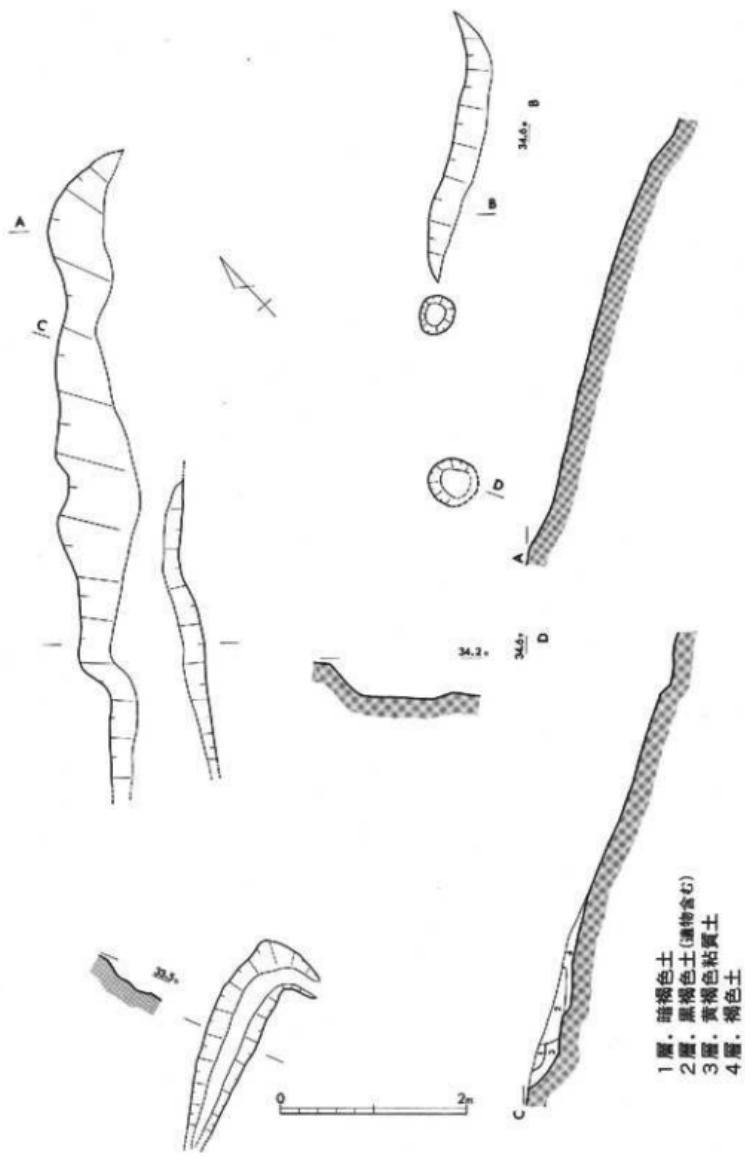
II区は、I区の東側に南北に切り込んだ谷を挟んで、反対側の尾根部に位置している。調査区の北東側が尾根の稜線にあたり、調査区端が石敷の殿様道に接する形になっている。調査区中央付近から西側は、調査前に既に重機によって削り取られていたため、発掘作業は縁辺部のみとなつた(第164図)。調査の結果、南側傾斜地では遺構遺物は発見されず、北側および北東側で溝状遺構を

が徐々に薄くなるが口縁端部の形状は欠損のため不明である。頭部中央部には沈線状に細い凹部が数段に廻る。8の壺は太めの頭部を持ち、張った肩から下の胴部を角ばせらしたものである。器面調整は外面胴部下半に平行タタキ目文、内面には同心円タタキ目文が残り、その他は回転ナデ調整である。肩部は著しく灰を被っている。

第163図1は細粒凝灰岩製の石核である。原礫を縦位に用いて縦長の剝片を得ようとしたものと考えられ、打面は上面の一面のみである。打面を形成する剝離は二方向から数度にわたって行われているが、周縁にわずかに礫面が残っている。作業面を整えるため、図左端(右端)と下端に稜を取り調整剝離が施されている。2はやや透明感の



第160図 古曾志清水遺跡I区地形測量図



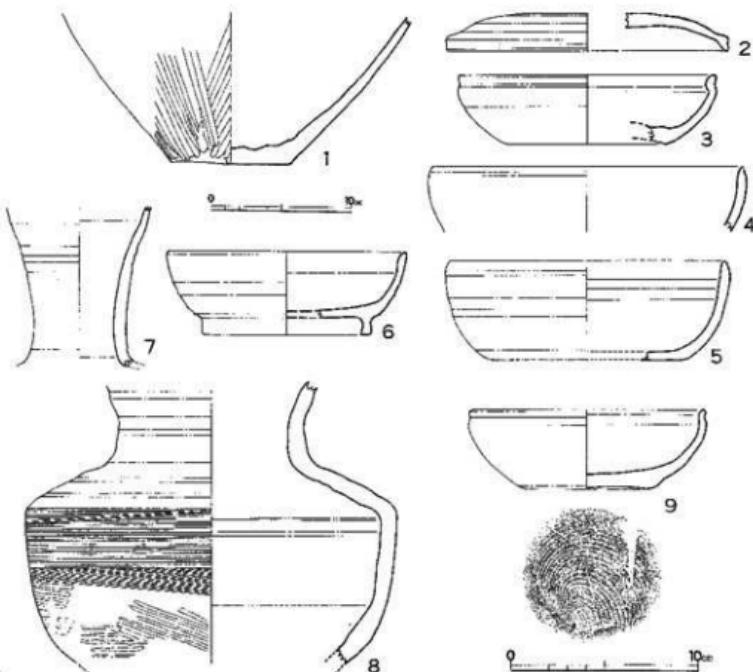
第161図 古善志清水遺跡Ⅰ区加工段・溝状遺構実測図

検出したのみである。遺構は幅0.8~1m、深さ40~80cmで、北東側では尾根筋に沿って1本しか確認されなかったが、北側では数条に分れていた。古曾志善坊遺跡Ⅰ区で検出した溝状遺構と同様に、遺構内にはサラサラした細粒子土が堆積しており、その中に若干の須恵器蓋杯や甕の破片も含まれていた。これらの遺構は尾根上を走る道のようなものと考えられ、須恵器の年代から奈良時代頃にはすでにできていたと考えられる。

第162図9はその須恵器坏で、体部が丸く立ち上がり、口縁部はわずかに内傾させて端部を丸く取める。口縁外面もわずかに屈曲する。底面には回転糸切り痕が残っている。

### (3) Ⅲ区の調査

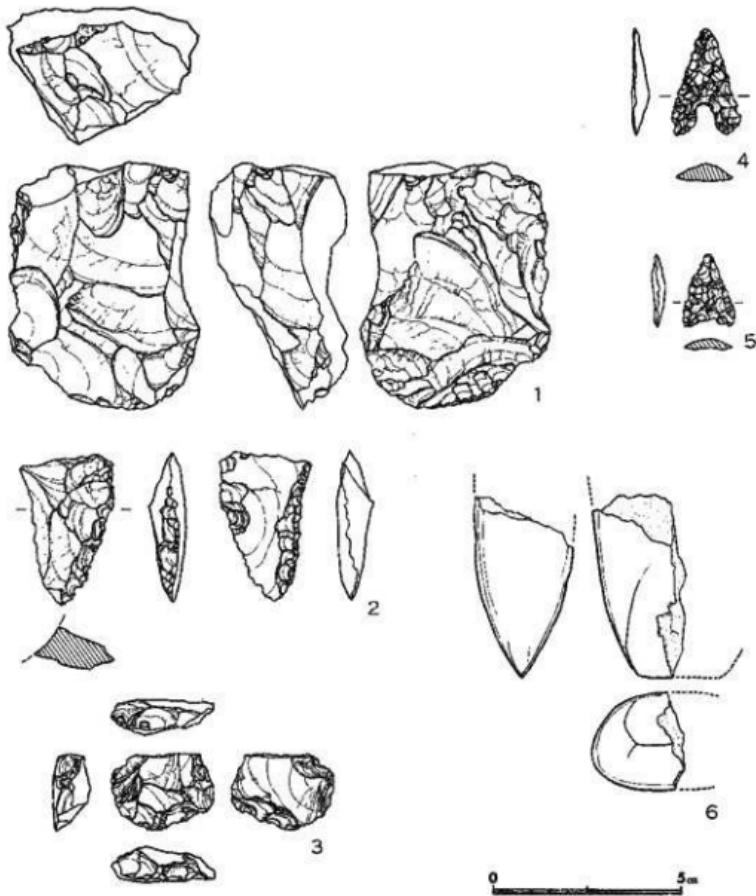
Ⅲ区は、Ⅱ区から南東へ100mほど離れた同じ尾根筋にあり、穴道湖に面した南向きの斜面から遺構遺物を検出した。遺構は、地表下約40cmの赤褐色地山粘土に掘り込まれた土壙と溝状遺構、お



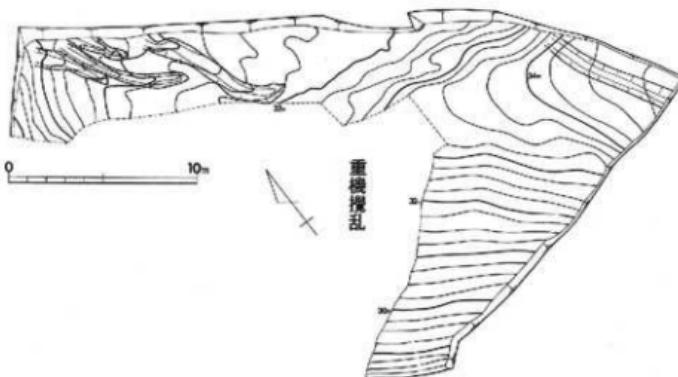
第162図 古曾志清水遺跡Ⅰ区・Ⅱ区出土遺物実測図(1~8:Ⅰ区, 9:Ⅱ区)

上びピット数個を検出したのみだが、遺物については表土層および第2層褐色土から、旧石器時代・縄文時代の石器類や奈良時代頃の須恵器類が比較的良好な状態で出土した（第165図）。

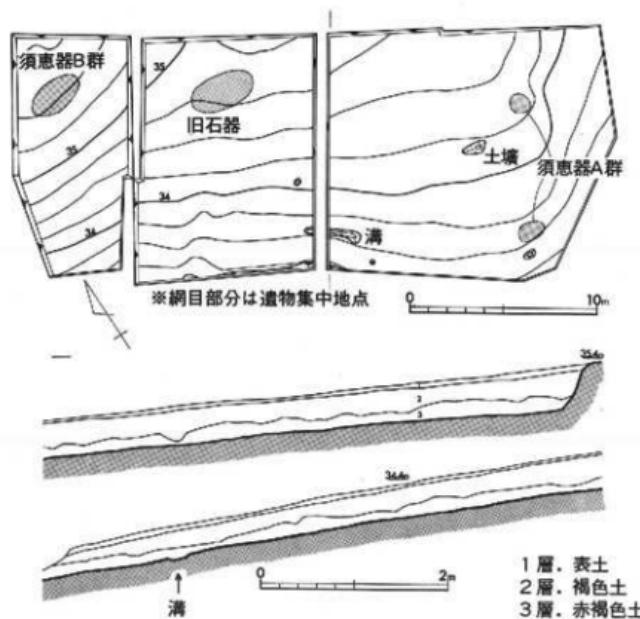
**土壤** 調査区東半中央に検出した遺構で、長径約2m、短径約1.3mの椭円形に緩かに落ち込んだ土壇である。深さは15cm程度で中央に火を受けて赤く焼けた粘土塊があり、その他は炭化物と焼土小ブロックを多量に含んだ暗褐色土が堆積する（第166図）。遺物を含んでいないため、年代を即



第163図 古曾志清水遺跡I区出土石器実測図



第164図 古曾志清水遺跡II区測量図

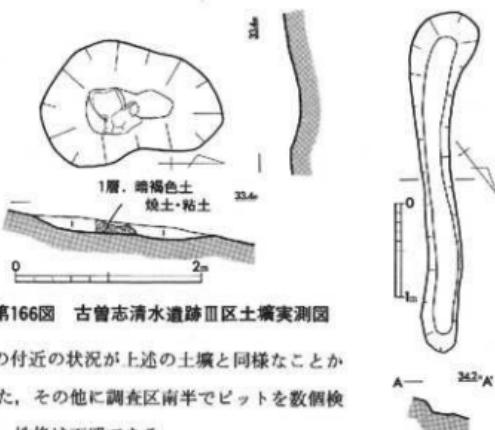


第165図 古曾志清水遺跡III区発掘後地形測量図および土層断面図

座に決定し難いが、土壤周辺では須恵器A群が集中して出土しており、遺構の年代もほぼその時期と考えられる。

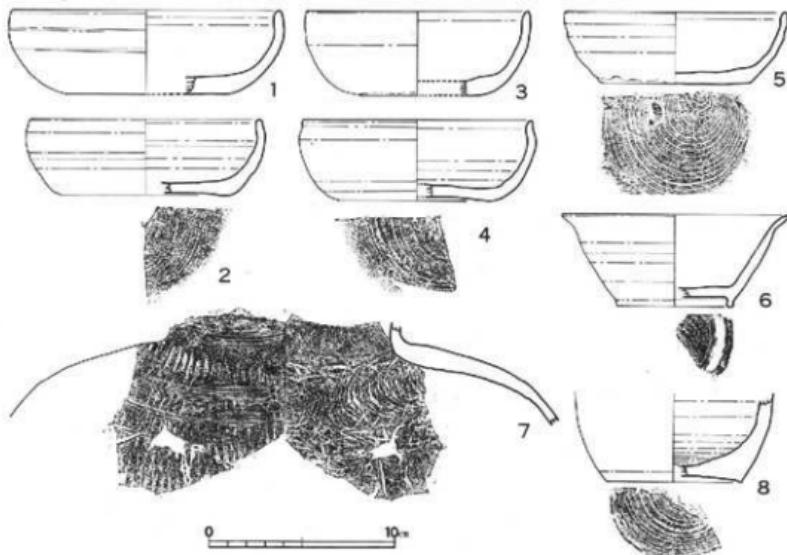
**溝状遺構** 調査区南側で検出した長さ3.6mの遺構である。幅35~40cm、深さは約10cmと浅く短いもので、中には暗褐色土が堆積する（第167図）。遺物は伴っていないが、遺構の付近の状況が上述の土壤と同様なことから、それと同時期と考えられる。また、その他に調査区南半でピットを数個検出したが、各々がかなり離れており、性格は不明である。

**須恵器** 3つに分れた調査区のうち、北端と南側の2箇所から出土した。南側をA群、北側をB群とすると、A群は調査区内に広く散在する格好で出土し

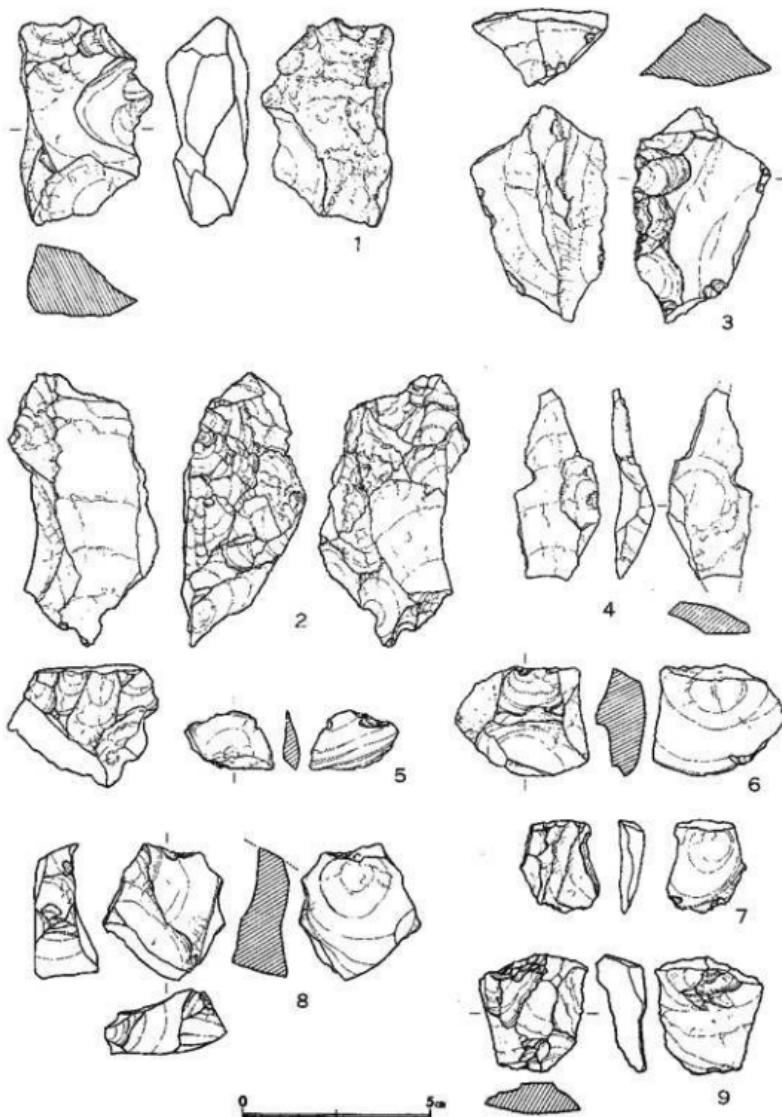


第166図 古曾志清水遺跡Ⅲ区土壤実測図

第167図  
古曾志清水遺跡Ⅲ区溝状遺構実測図



第168図 古曾志清水遺跡Ⅲ区出土須恵器実測図



第169图 古兽志清水遗址Ⅲ区出土石器实测图(1)

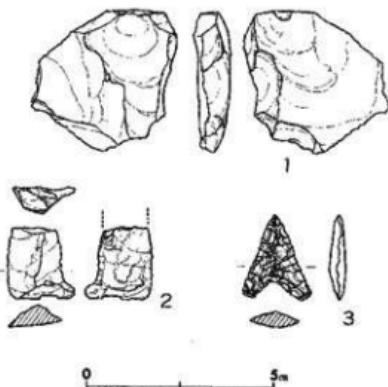
ており、第165図に図示したものはその中でも集中して出土した地点である。壺・壺類がほとんどで、壺（第168図1～5）は、口縁径12～14.5cm、器高3.8～4.5cmとはほぼ同じ大きさで、器形も回転糸切り放しの底部から体部が丸く立ち上がり、口縁部は直立するかやや内傾させ、端部は丸みを持たせるという画一的な特徴を持つ。5は内傾した口縁の端部をもう一度外反させるようにしてつまみ出し、内側に面を作り出している。壺（同図7）は肩のかなり張ったもので、外面は平行タタキのちカキ目調整、内面には同心円タタキ目文が残る。

一方、B群は第165図に示した範囲内から出土し、点数も少ない。壺・壺類の破片が多いが、図示できたのは2点である。第168図6は高台付壺で、厚さ5mmの薄手で精巧なつくりの土器である。口縁部は長さ1cm程度を外に折り曲げ、その下から高台まではほぼ一直線である。底部も水平で、底面には回転糸切り痕が残る。8の小形壺は徳利形になるもので、外面にはヘラケズリのち回転ナデを加える。これらB群の須恵器は、明らかにA群と時期の異なるものである。

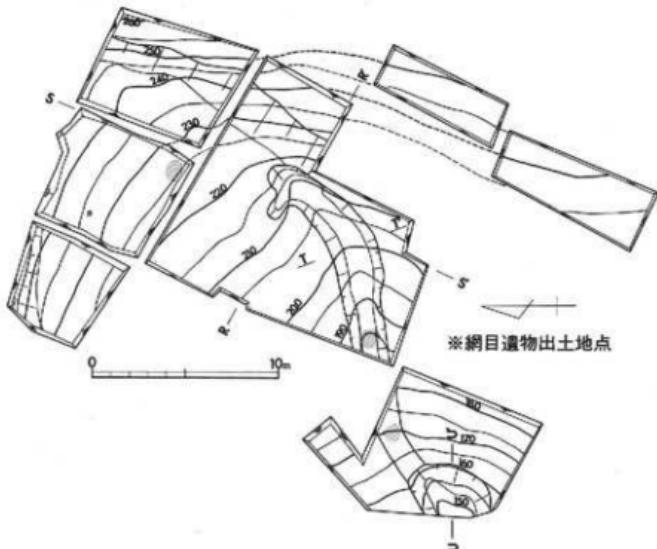
**石器** 中央の調査区北東半から旧石器時代の石核やナイフ形石器をはじめとするメノウ・安山岩製の製品やフレイク類が、また南側調査区東半から縄文時代の黒曜石製の石器やフレイク類が出上した（第169・170図）。

第169図1～3はメノウまたは玉髓質メノウ製の石核で、1はメノウの自然縫から剥ぎ取った剥片を素材としたものである。自然面側を打面にして、打点を大きく移動しながら4枚の横長不定形剥片を剥取している。自然面側にみられる剥離面は、打面作成のためと考えられる。2はメノウ製で、大きな剥離面を打面にして、やや縦長の不定形剥片を剥離している。底面付近には自然面が残り、自然縫を大きく分割した剥片を素材にしているものと考えられる。3は断面三角形を呈する剥片を素材に、一側縁を作業面に上から順に不定形の剥片を剥離したものである。玉髓質メノウ製である。170図1は安山岩製剥片の一側縁から横長の不定形剥片を剥離している。

ナイフ形石器（第169図5）は、横長の不定形剥片の3ヶ所に、微細な調整を施したものである。素材はメノウで、背面もボジティブな面であり、石核の主要剥離面と考えられる。



第170図 古曾志清水遺跡Ⅲ区出土石器実測図(2)



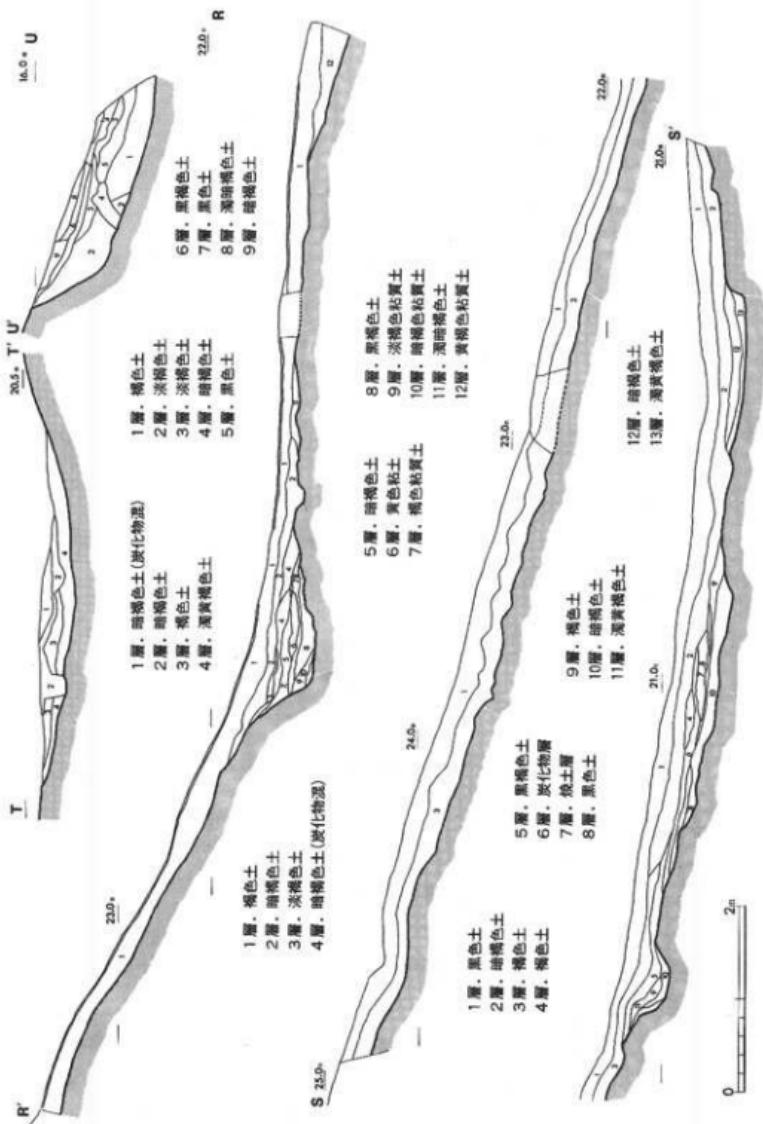
第171図 古曾志清水遺跡Ⅳ区測量図

第169図4・6～9は剝片である。4はメノウ製の横長剝片で、「翼状剝片」状を呈す。6は背面に縦面を残す剝片である。玉髓質メノウ製で、背面には上下からの剝離面が観察される。7は玉髓質メノウ製のやや縦長の剝片で、縁辺にわずかに二次加工がみられる。8は玉髓質メノウ製の剝片で周囲には鋭い縁辺ではなく剝離面によって構成される。9は玉髓質メノウ製のやや縦長の剝片で、背面には上下方向の剝離面が観察される。第170図2も玉髓質メノウ製の剝片だが、背面に稜を持つ縦長剝片を主要剝離面側から切断したものか。

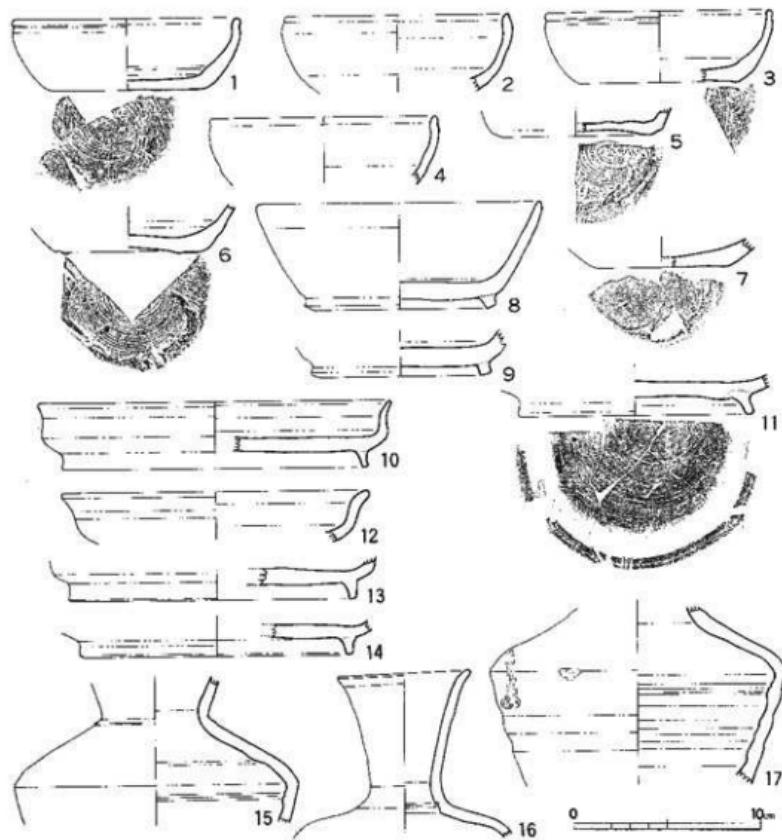
第170図3は黒曜石製の石鎌である。表裏とも細かい剝離が深くまで入り込み、わたりよりも深い。右側の脚には欠損後、再加工が施されている。現存長2.3cmを測る。

#### (4) Ⅳ区の調査

Ⅳ区はⅢ区からさらに南東に伸びた尾根の西側斜面に位置する（第158図）が、ちょうど谷奥の屈曲部にあたり、斜面の傾斜の厳しいところである。調査の結果、調査区の全体に、黄褐色粘質土の地山に褐色土または暗褐色土が堆積しており（第172図）、斜面の向きが変わるあたりで、地山を掘り込んだ形で縦方向に長さ22m程度にわたって溝状遺構を検出した。その他にも北中央区から東区にかけてピットを数個確認したが、まとまりをもっておらず、性格は掘みきれなかった。また北



第172図 古曾志清水遺跡IV区土層断面図



第173図 古曾志清水遺跡IV区出土遺物実測図(1)

中央区から東区にかけての暗褐色土中から家形埴輪片・鉄器・土鍤等が、また中央区から西区にかけて須恵器類が出上した（第171図）。

**溝状遺構** 幅は2m前後あるが、深さは30~50cm程度で浅い。標高22mあたりで途切れているが、それから上の斜面も大幅に加工されており、一連のものと考えられる。一方下端では、幅3.5m、深さ1m程度の落ち込みができる。遺構の内部には、ほぼ全体にわたって、炭化物や焼土の粒が多量に含まれた黒褐色土が堆積していたが、遺物は全く出土しなかった。炭化物や焼土の混在す

る原因を調べるために、斜面上方でもトレンチ調査を行ったが、遺構は確認できず、溝状遺構ともども、その性格を明らかにすることはできなかった。

**出土遺物 須恵器**（第173図）は、特に中央区に集中して出土した。1～7は底面回転糸切り放しの杯類で、いずれも体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁はほぼ直立する。2は端部を外へわずかにがらつまみ上げ、内面に端面を作り出すもので、その他はわずかに屈曲するものの端部を丸く収めている。3の口縁外面は凹線状の凹みが廻っている。内外面とも回転ナデ調整で、内底面にはさらに不定方向にナデが加わる。8・9は高台付杯で、厚さ1cmの底部に厚手の高台がハの字状に付く。体部はごくわずかに湾曲して立ち上がり、口縁はそのまま丸く収めている。底面は回転糸切りのち回転ナデ、その他には回転ナデ調整を施す。10～14は盤の類である。11は垂直な体部から先を薄手にした口縁を強く外反させた土器で、12はその屈曲が11よりもなだらかでしかも厚手である。高台はいざれも高さ1cm程度で、11・13・14は復元高台径が約19cm、10・12はそれよりも若干小さくなると考えられる。底面は回転糸切り後回転ナデを行うが、11のように糸切り痕は完全に消えていない。内底面は回転ナデのち不定方向にナデを加えることが多く、11には使用によると思われる摩滅が認められる。

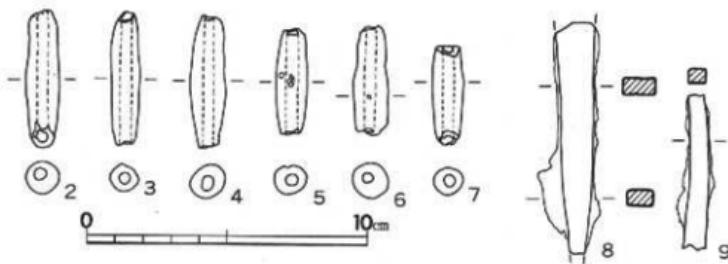
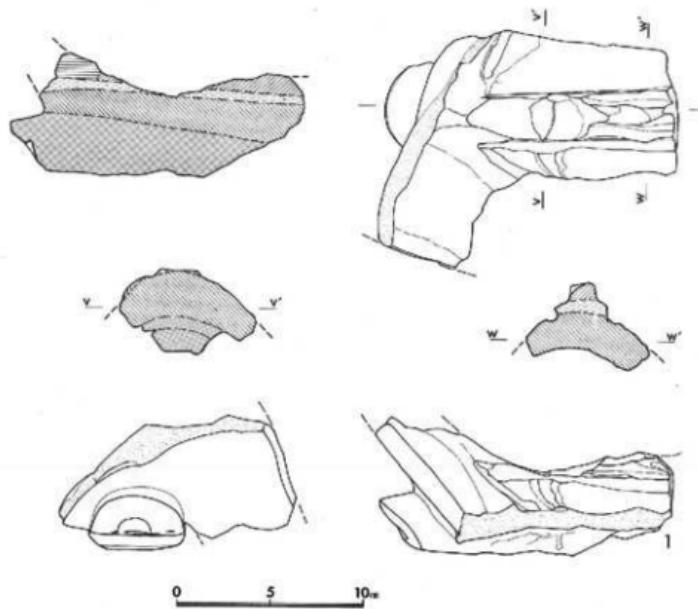
**長頸壺**（15～17）は肩部がよく張り、体部が直線的に作り出されたもので、頸部から口縁にかけても直線的である。外面には文様はなく、丸みのある口縁端部は若干外に向く。調整は内外面ともに回転ナデである。

**家形埴輪**（第174図1）は、切妻造りの屋根の破風と棟の部分の破片である。破風板は厚さ約1cm、幅約6cmで、棟に対して約40度の角度で斜めに取り付けられている。屋根頂部には、厚さ5～7mmの粘土帯を貼り付け、両側をヘラで切り取って、幅2.5～2.7mmの棟を作り出すが、片側はヘラで切ったあと、さらに断面半円形に削り直して凹線を施したようしている。この凹線は破風まで達すると今度は破風に平行に走り、屋根と破風板との境目も意識させている。棟木の上にはさらに厚さ1.5cmの程度の粘土板を貼り付ける。上面を指頭で押さえたりして整形した痕跡があり、何らかの文様を表出しようとしたことが窺えるが、どのような棟飾りかは推定できない。棟端部には、ヘラで棟と棟飾りを切り取った後、ナデ調整を施すが、これは棟飾りの一部かあるいは破風頂部への反りを強調するための細工と思われる。これら棟と破風の接合具合を観察したところ、屋根頂部に①棟、②棟飾、③破風板の順に貼り足していくようである。

棟を挟んで両側の屋根と破風の上面には、表面が剥脱してしまったような凹凸が顕著に残っており、屋根の破風側には幅1.5～2cm、高さ2mmのわずかばかりの隆起がみられる。前者は何らかの工具で意図的に施された感があり、網代を表現した沈線文に替わる文様の可能性もある。また後者はそれを押える縁押木の可能性が強い。妻の合掌部には半円柱の突起が付けられている。破風から

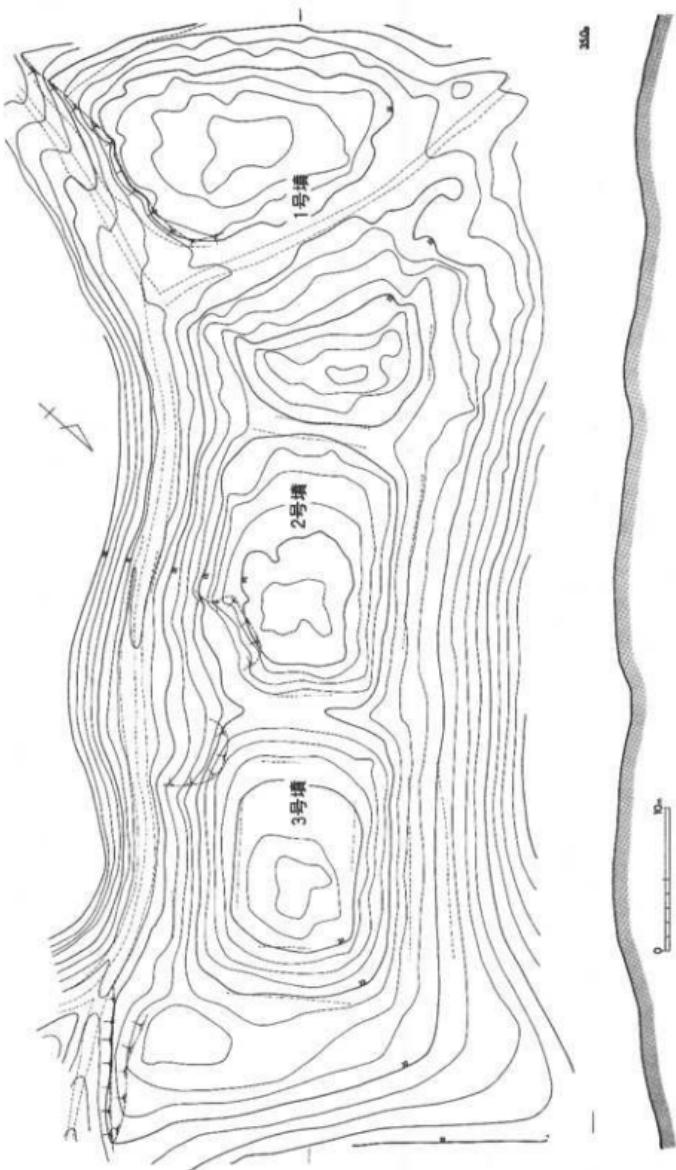
外側に露出するのは先端の2cmほどで、下半を平らにして半円柱にしている。端部中央には、やはり半円形の凹みがあり、下弦に沿って沈線状の切り込みが認められる。

この埴輪片は胎土が緻密で焼成もよく、淡褐色の遺存状態の良好な破片であり、IV区で出土した埴輪片はこれ1点のみであるが、もともとIV区屋根上の古曾志嵯ヶ谷古墳群に据えられていた可能性が強い。



第174図 古曾志清水遺跡IV区出土遺物実測図(2)

第175圖 古魯志純介谷古墳群(1~3号墳)地形測量圖



鉄製品は2点（第174図8・9）出土しており、8は現存長8.2cmの棒状のもので、一端の幅が狭くなっている。断面長方形を呈する。9も断面長方形の棒状の鉄製品であるが、用途はどちらも不明である。

土鍤は6点（第175図2～7）出土しているが、いずれも全長4.5～5cm、最大径1～1.3cmの管状の上鍤である。直径4mm程度の棒に粘土を巻きつけ、手捏ねによって成形する。年代は不明である。

### （5）古曾志姥ヶ谷古墳群について

昭和59年の分布調査の際に、古曾志清水遺跡Ⅲ・Ⅳ区から東に向って伸びる尾根の上に古墳群を発見し、古曾志姥ヶ谷古墳群と命名した。古墳群は尾根上に5～6基並んでいたと考えられるが、このうち大形で墳丘の残りのよい1～3号墳について、古墳の丘古曾志公園の整備計画の一環として保存整備することになり、その資料を得るために、昭和63年度に1～3号墳の地形測量を行うとともに、一部にトレンチ調査を実施している。前述の古曾志清水遺跡Ⅳ区から家形埴輪片や鉄製品が出土し、それらに最も密接に関係していると考えられるのがこの古曾志姥ヶ谷古墳群であるところから、ここに簡単にその紹介をしておきたい（第175図）。

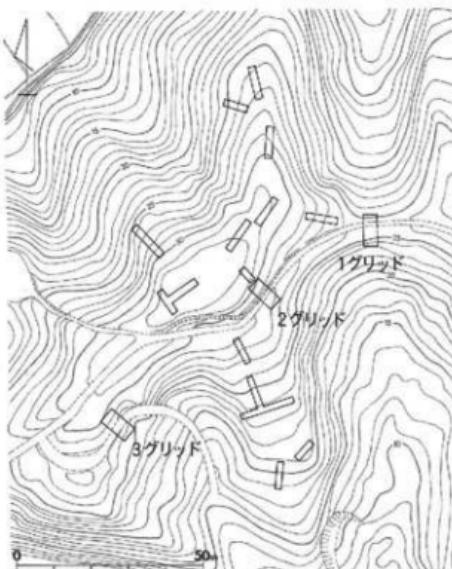
1～3号墳は、南西端から順に1号墳・2号墳・3号墳とし、1号墳は当初、2つの高まりがつながった大形の方墳と考えられたが、南北両高まりに各々2本ずつトレンチを設定して発掘したところ、北の高まりの北辺・西辺で古墳の墳裾を検出し、南の高まりでは、地山が大幅に削り取られ、しかもその攪乱土が大量に南西斜面方向に流れていることが判明した。南北の高まりに挟まれた切り通し状の凹部は、殿様道と呼ばれる石敷の道で、1号墳の南西尾根鞍部のところに、大量の土砂を盛って造成した様子が窺われるところから、この1号墳は、もともと1基の方墳がこの殿様道を敷設するためその高まりを削り取られ、さらに中央部分に切り通し状の道をつけられてしまったものと推定される。そして1号墳の本来の規模は、トレンチ調査の結果から、南北に長い、長辺約19m、短辺約16mの方墳と考えられる。築造年代は、古曾志清水遺跡Ⅳ区出土の家形埴輪がこの古墳に関係するものとすれば、およそ5世紀墳と考えられる。

2・3号墳は尾根筋と同じ方向を長辺とした方墳で、地形的な制約を受けて1号墳の辺方向と若干ずれる格好になっている。測量の結果、2号墳は長辺約18m、短辺約15m、3号墳は長辺約19m、短辺約16mを測る。1号墳と2号墳・2号墳と3号墳の間は、どちらも地山を平坦に加工ただけで、特に溝状に切った様子ではなく、両側から徐々に墳丘盛土が流出して堆積した感じを受ける。長辺側の墳裾は短辺側よりも0.5m程度低い位置に設定することができ、裾外には不明確ながら平坦面が作り出されていると考えられる。2～3号墳の築造時期は、1号墳に隣接し、しかも同規模の古墳であることから、1号墳のそれとはほぼ同じ墳と推定される。

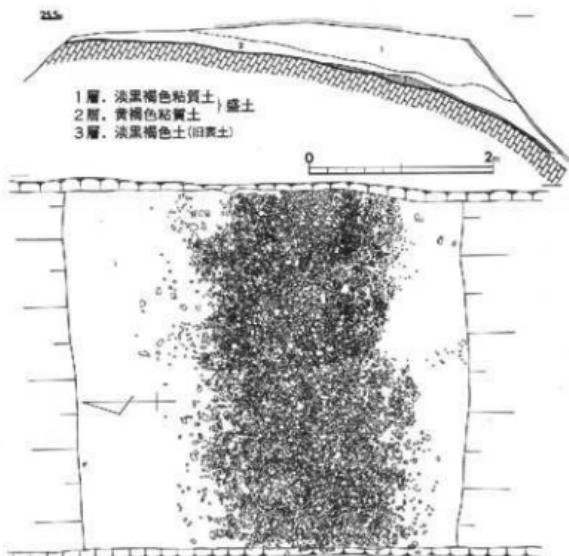
## 第6節 大谷根智地区の調査

朝日ヶ丘団地造成予定地内には、通称“殿様道”と呼ばれる石敷の道が尾根上を走っている（第180図）。この殿様道という名の由来説として、地元では、松江藩の殿様がこの地で鷹狩りをしていたという伝承が残っているが、古文書をあたってみると残念ながらそのような具体的な記録は残っていない。よって、引き続き文献で関連資料を探す一方、まず殿様道がどのようなものか、その実態を調べるために、遺存状態の良好な大谷根智地区でグリッド調査を行うことにした。

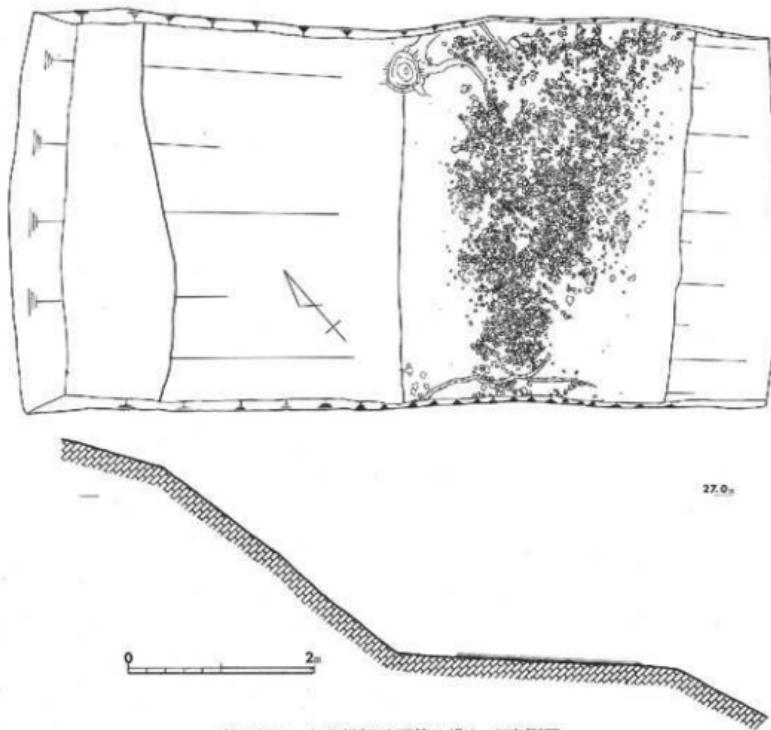
大谷根智地区は古曾志大谷1号墳から西に伸びた尾根で、尾根鞍部と尾根頂部付近、宍道湖岸へ降りていく道の3ヶ所に調査区を設定し、各々第1～第3グリッドと命名した（第176図）。第1グリッド（第177図）では、南向きに若干傾斜するが比較的平坦な尾根頂部に、鞍部両側の尾根



第176図 大谷根智地区調査区配置図



第177図 大谷根智地区第1グリッド実測図



第178図 大谷根智地区第2グリッド実測図

から削り出した地山攪乱土を盛り、幅4.4～4.5mの平坦な道を作り出し、さらに中央付近に幅2m前後にわたって礫を敷き詰めていた。礫は、付近の河原から運んだと思われる円礫で、最大でも径が10cm程度の小さいものを厚さ5cm程度に敷き重ねている。尾根頂部からやや下ったところを道が走っている第2グリッド（第178図）では、尾根側の斜面を2.4～2.8mの幅で削り取り、約3mの平坦面を作り出していた。平坦面には地山粘土が出ており、その上にやはり2m前後の敷石を行うが、南東面では礫が流失したようで、その量は少なかった。第3グリッド（第179図）でも尾根頂部側を削って、斜面下側に盛り、平坦面を作り出した経緯が観察された。道幅は4.4m～4.8mとさらに広がり、敷石も幅2.6mにわたって良好に遺存していた。

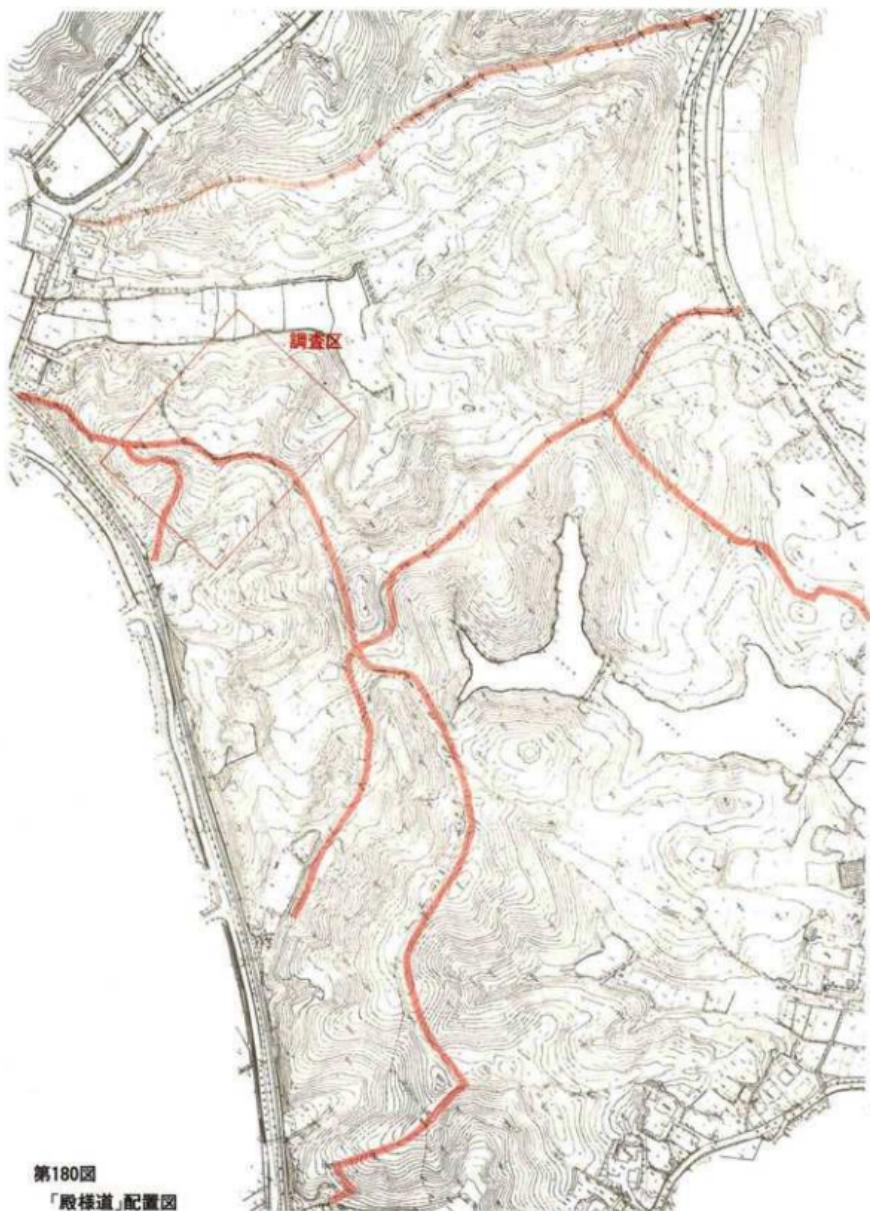
敷き詰められた礫の中からは、特に第1グリッドを中心、瓦片や陶磁器片が出土した。いずれもかなり摩耗が進んでいることから、河原で礫を採集した際に紛れ込んだものと思われ、殿様道の



第179図 大谷根智地区第3グリッド

建設年代と即座に結び付くものではない。瓦片は、いぶし瓦の細片で長さ10cmを越えるものは少なく、陶磁器は染付けの磁器類や陶器の壺・播鉢等で、近世末以降の所産と考えられるが詳細は不明である。その他、須恵器片もごく少量出土している。

昭和24年に編纂された古江村誌に記載された古文書から、松江藩の藩政時代後期に、秋鹿郡古曾志村（現松江市古曾志町）から同大垣村（現同市大垣町）にかけて、農家の副業として瓦焼や疊表の生産を行っていたことが窺え、明治20年代の古曾志村道敷圖では殿様道が村道として、すなわち幹線道路として扱われていることを考え合せると、藩政時代後期に瓦焼の原材料や製品の運搬などを中心とした生活道路として開削し、その後も主要道路として修復を受けながら利用されていた道と考えるのが妥当ではないかと思われる。そして、開削工事に直接関係するものとして、古曾志大谷1号墳南側の2本の殿様道が交叉する地点で発見された土師質土器の祭祀土壤があげられよう。



第180図  
「段様道」配置図

## 第6章 自然科学分野の分析

### 第1節 古曾志大谷1号墳出土須恵器、埴輪の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

#### 1. はじめに

古曾志大谷1号墳、および、その周辺の古墳、焼跡出土須恵器、埴輪の蛍光X線分析の結果について報告する。

試料はすべて粉砕し、粉末試料はプレスして、厚さ3~5mmのコイン状錠剤として蛍光X線分析を行った。分析値は岩石標準試料JG-1で標準化した値で表示された。

#### 2. 分析結果

##### (1) 古曾志大谷1号墳出土須恵器

古曾志大谷1号墳は5世紀末~6世紀初と推定される前方後方墳である。したがって、これらの須恵器の産地を2群間判別分析法を使って推定する場合、地元母集団として高畠群と大井群が考えられる。

はじめに、地元の両群間の相互識別が可能であるかどうかを検討した結果から説明する。K, Ca, Rb, Srの4因子を使い、両群の重心からのマハラノビスの汎距離を計算して、その結果を作図した $D_{(2)}^2 - D_{(3)}^2$ 分布図を図1に示す。 $D_{(2)}$ ,  $D_{(3)}$ はそれぞれ高畠群、大井群の重心からのマハラノビスの汎距離である。この図を使って産地推定をする場合、高畠群に帰属するための条件は $D_{(2)}^2 < 10$ ,  $D_{(3)}^2 > 10$ であり、大井群への帰属条件は $D_{(2)}^2 > 10$ ,  $D_{(3)}^2 < 10$ である。 $D_{(2)}^2 < 10$ ,  $D_{(3)}^2 < 10$ は両領域が重複し、相互識別が難しい領域である。もう少し、具体的に説明すると、 $D^2 = 10$ とは母集団の重心から、約3σ(標準偏差)離れた距離である。したがって、上記の条件は母集団への帰属条件は3σ以内ということであり、ただ、相手母集団からは3σ'以上離れることが必要であるということを示している。そこで図1をみると、高畠群の多くのものは自然領域内に分布しているものの、大井群のはほとんどのは重複領域に分布しており、両群の須恵器の化学特性はやや類似していることを示している。前記の帰属条件がこの場合、使い難いことがわかる。しかし、図1を見る限り、両群の須恵器は遍在しており、とくに、高畠群の検出は容易であるが、大井群の検出が難しいことがわかる。

図2には古曾志大谷1号墳出土須恵器の $D_{(2)}^2 - D_{(3)}^2$ 分布図を示す。高畠領域内に明確に分布するものは全くないことが注目される。さらにもう一つ注目すべき点は、No.1, 5, 8, 10, 11, 13, 14とNo.2, 3, 4, 6, 7, 9, 12の2群に分かれて分布している点である。このことはこれら14点の須恵器はすべてが同一産地のものではなく、2ヶ所の産地のものである可能性もあることを示唆する。その場合、分布位置よりみて前者は大井群産の可能性をもち、後者は地元産ではない可能性をもつ。外部からの搬入品を考える場合、この時期の全国各地の古墳出土須恵器の分析データをみてみると、大阪陶邑群を産地の対象として考えなければならないだろう。そこで、まず、図3には地元、高畠群と大阪邑群との相互識別の結果を示す。両群の相互識別は十分可能であることを示している。とくに、Ca, Sr因子が有効であることがわかっている。そこで、この図を使って古曾志大谷1号墳出土須恵器の產

図1 高畠群と大井群の相互識別

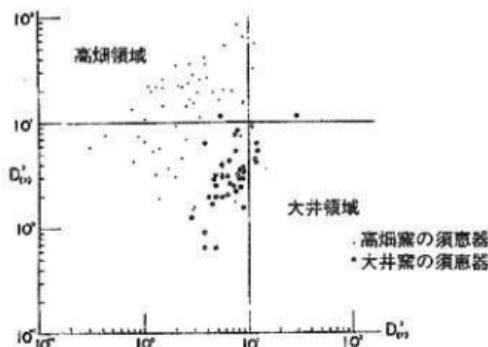


図2 古曾志大谷1号墳出土須恵器の產地推定(1)

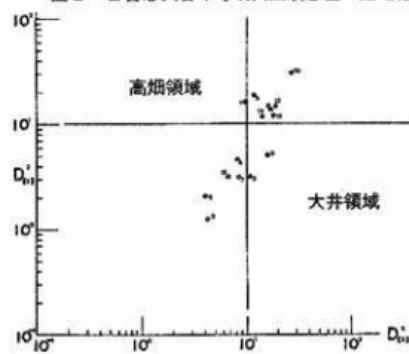


図3 K, Ca, Rb, Sr因子による大阪陶邑群と高畠群の相互識別

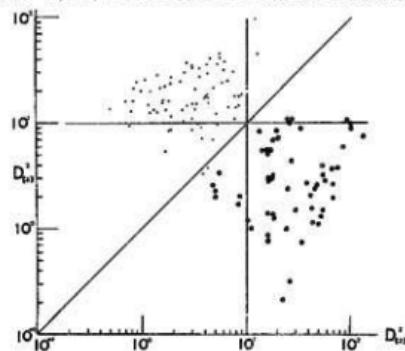


図4 古曾志大谷1号墳出土須恵器の産地推定(2)

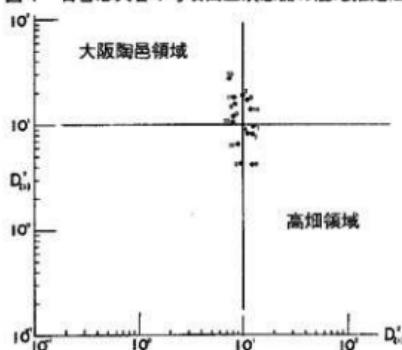


図5 大阪陶邑窯と大井窯の相互識別

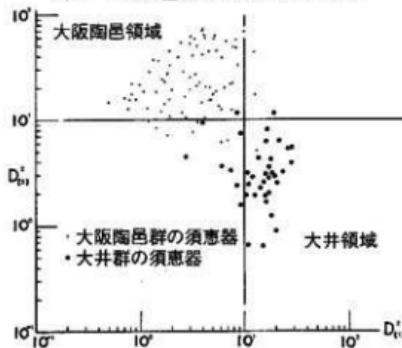
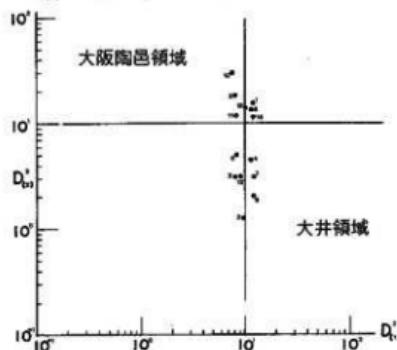


図6 古曾志大谷1号墳出土須恵器の産地推定(2)大井領域



地推定を試みた結果を図4に示す。すべての点は判別が難しい領域に分布しており、帰属させることは難しい。ここでは無理をして帰属を決めることにする。

次に、地元、大井群と大阪陶邑群との相互識別の結果を図5に示す。一部、重複領域に分布するものがあるものの、両群の相互識別は十分可能であることを示す。そこで、この図を使って両群への帰属を検討した結果を図6に示す。この図でも古曾志大谷1号墳の14点の須恵器は明確に判別できる領域には分布せず、微妙な位置に分布する。しかし、図2で得られたのと同様、No1, 5, 8, 10, 11, 13, 14とNo2, 3, 4, 6, 7, 9, 12の2群に分かれて分布し、2ヶ所の産地のものである可能性を示唆する。その場合、前者は大阪陶邑的であり、後者は地元、大井的である。ただ、これら14点はいずれの図を使っても判別が難しく、産地を明確に推定することは出来ない。強いて言えば、No1, 5, 8, 10, 11, 13, 14の胎土は大阪陶邑的であり、No2, 3, 4, 6, 7, 9, 12は大井的である。

高烟産とみられるものはないというのが蛍光X線分析の結果である。これらを一まとめにして未発掘の別産地のものであるという可能性も否定はできないことを断っておく。改めて、考古学的にも吟味してみる必要があろう。

#### (2) 古曾志窯、およびその周辺の遺跡出土須恵器

10世紀代と推定される古曾志平廻田3号窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図を図7に示す。若干、ばらつくものがあるが、大部分のものを閉むようにして一応、古曾志領域を示しておく。高烟群や大井群の須恵器に比べてRb量が少ないので特徴である。

次に、10世紀代と推定される天満谷遺跡、神田遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図を図8に示す。古曾志領域に対応するものは殆どなく、これらは古曾志窯産の須恵器ではないことがわかる。この時期の島根県内の窯跡出土須恵器の化学特性は未だ十分にまとめられていないので、判別分析を適用することはできない。Rb-Sr分布図やK, Ca因子より定性的に推察する限り、天満谷遺跡の須恵器は島根県西部のものであるようみえる。高広Ⅱ区SB19の須恵器胎土は天満谷遺跡のものとは異なるが、やはり、その産地は不明である。

#### (3) 古曾志大谷1号墳出土埴輪

古曾志大谷1号墳出土埴輪のRb-Sr分布図を図9に示す。埴輪の場合、必ずしも対照すべき窯跡は残っていないので、何か手掛りになる対照物を探さなければならない。ここでは時代は新しいが、距離的には近い古曾志平廻田3号窯跡の須恵器の化学特性と比較することにした。図9より、大半の埴輪は古曾志領域に対応することがわかる。さらに、K, Ca, Fe因子でも両者はほぼ対応したので、古曾志窯の須恵器とはほぼ同じ胎土。すなわち、地元産の粘土を素材として作った埴輪であると推定される。ところが、これらの埴輪胎土をよく点検してみると、2種類あることがわかった。すなわち、図10のK因子をみると、K量が多いA群と、少ないB群に2分される。この傾向はCa因子にもみられる。図11より、A群にはCa量が多く、B群には少ない。A群に対応した埴輪を番号で示すと、A-1, 2, 3, 6, 13, 14, 16, 18, 20, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 29, 30, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 41, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 58, 62である。B群はA-4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 15, 17, 19, 21, 26, 31, 40, 42, 49, 50, 57, 59, 60, 61, 63の23点である。分類されたこれらの埴輪胎土は再度、考古学的にも吟味する必要がある。このように、K, Ca因子により2種類に分類されたものの、Rb-Sr分布図では両者とも古曾志領域に対応しており、地元産の埴輪とみられる。古曾志領域を少しはみだしたもののが何点かあるが、目下のところ、よく解説できない。

#### (4) 松江市周辺の古墳出土埴輪

埴輪の窯跡は須恵器ほど多く発見されていない。そのため、化学分析による埴輪の産地推定は須

恵器よりも難しい。また、その产地推定法の開発研究も、当然、須恵器とは異なった手法で進められる。筆者の基本的な考え方は同一地域内で同じ胎土をもった埴輪によって古墳を分類してみるとことである。このような考え方で、松江市周辺の古墳出土埴輪をK, Ca, Rb, Srの4因子を使ってクラスター分析してみた。しかし、類似度に明確なギャップが生じず、クラスター分析では簡単に分類できないことがわかった。そこで、仕方がないので、手間がかかるが、Rb-Sr分布図、K, Ca, Fe因子を一つ一つ対応させつつ分類してみることにした。その場合も、古曾志大谷1号墳出土埴輪胎土を基準として比較していくことにした。

まずはじめに、5世紀後半と推定される井ノ奥古墳群、金崎1号墳、丹花庵古墳、石屋古墳の埴輪胎土をみてみよう。

図13には井ノ奥古墳群出土埴輪のRb-Sr分布図を示す。すべてのものは古曾志領域によく対応していることがわかる。このうち、1号墳の埴輪にはRb量が多く、4号墳のものには少ない。この傾向は図10のK因子でもみられる。この点で1号墳の埴輪は古曾志大谷1号墳のA型埴輪に、4号墳のものはB型埴輪に類似しているように見える。しかし、図11のCa因子ではそれぞれA, B型には対応しない。したがって、古曾志大谷1号墳の埴輪と全く同じ胎土であるとは言えないことになる。しかし、Rb-Sr特性からみてもわかるように、類似した胎土であることには間違いない。

図14には金崎1号墳出土埴輪のRb-Sr分布図を示す。2点を除き、他の埴輪は同じ胎土をもち、古曾志領域に分布している。これらはK因子では古曾志大谷1号墳のB群埴輪に対応するが、Ca因子ではむしろA型埴輪に対応しており、Fe因子では古曾志大谷1号墳の埴輪には対応しない。このように、金崎1号墳の埴輪胎土はRb, Sr特性では井ノ奥古墳群のものと同様、古曾志大谷1号墳の埴輪胎土に類似しているが、K, Ca, Fe因子を点検すると、びたりと対応するものは一つもないことがわかる。

図15には石屋古墳の埴輪のRb-Sr分布図を示す。古曾志領域に対応するものは1点もない。したがって、古曾志大谷1号墳、井ノ奥古墳群、金崎1号墳の埴輪胎土とは異なる。つまり、これらはそれぞれ別産地の埴輪である。上記の古墳はいずれも5世紀後半と推定される同時期の古墳であるが、胎土が一致するものは一つもなく、この点から考えると、これらは窯ではなく、野焼きの埴輪である可能性が高い。なお、それぞれのグループから大きく離れて分布した金崎1号墳と石屋古墳の2点の埴輪は同グループの他の埴輪とは別胎土であり、それぞれ別のところで作られた埴輪である。少なくとも二元供給であったことを示す。石屋古墳の、別胎土の2点のうちの1点は形象埴輪であった点が注目されよう。

もう一つの5世紀後半の古墳は丹花庵古墳である。図9より、この古墳の埴輪胎土も上記のいずれの古墳の埴輪胎土とも異なることがわかる。

なお、5世紀代(?)と推定される馬込山古墳、竹矢岩船古墳の埴輪胎土は図16、17、および図10～12より類似していることがわかり、同一場所で作られたものである可能性があるが、分析試料数が少ないので断定はできない。

さて、次に6世紀代の古墳出土埴輪胎土についてみてみよう。はじめに、松江市内の古墳出土埴輪から説明する。

向山西 2 号墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図を図18に示す。Sr 量が多く、グループから大きくずれる

図7 古曾志平廻田3号窯跡  
出土須恵器のRb-Sr分布図

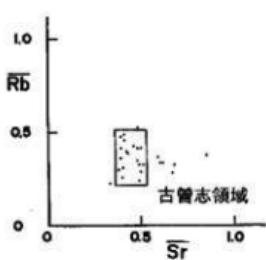


図 8 10世紀代の遺跡  
出土須恵器のRb-Sr分布図

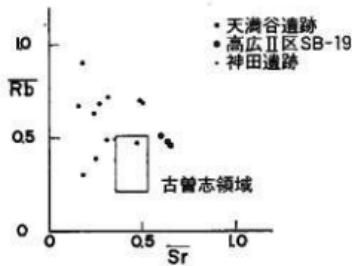


図9 古曾志大谷1号墳  
出土埴輪のRb-Sr分布図

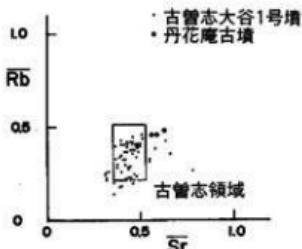
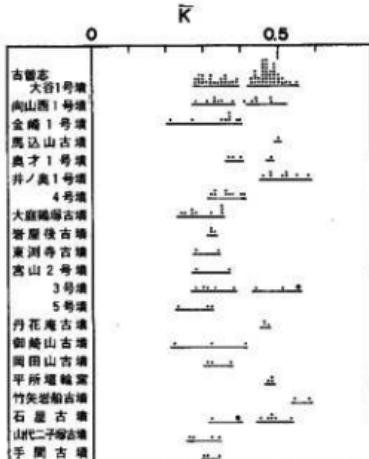


図10 K因子の比較



1点はD-1の試料である。これだけは別胎土の埴輪である。他のものは古曾志領域にはば分布している。図12のFe因子でもD-1の1点のみはFe量が多くずれるが、他は古曾志大谷1号墳の埴輪によく対応している。K, Ca因子をみると、K, Ca量がそれぞれ、多いものと少ないものの2群に分かれ、古曾志大谷1号墳A型、B型によく対応した。したがって、向山西2号墳にも古曾志大谷1号墳の埴輪と同質の2種類の胎土の埴輪があることが明らかになった。したがって、これらは同じ素材粘土（又は場所）で作られた可能性がある。そうすると、この場合、簡単に野焼きの埴輪であると片付けられることになる。このようなことは次の大庭鶴塚の埴輪の場合にもみられる。

大庭鶴塚出土埴輪のRb-Sr分布図を図19に示す。図13, 10~12と比較すればわかるように、この埴輪胎土は全因子で井ノ奥4号墳の埴輪胎土と類似しており、これらも同じ素材粘土（又は場所）で作られた可能性をもつ。

図20には岩屋後古墳、東渕寺古墳出土埴輪のRb-Sr分布図を示す。図19, 20をみると、これらの埴輪胎土は大庭鶴塚の埴輪胎土に類似しているように見えるが、図12よりFe因子では大きくずれており、同質の胎土とは言い難い。

図21には山代二子塚の埴輪のRb-Sr分布図を示す。C-4の1点のみは古曾志領域に分布するが、他の3点にはSr量が多く、大きくずれて分布する。この傾向はCa因子でもみられる。したがつ

図11 Ca因子の比較

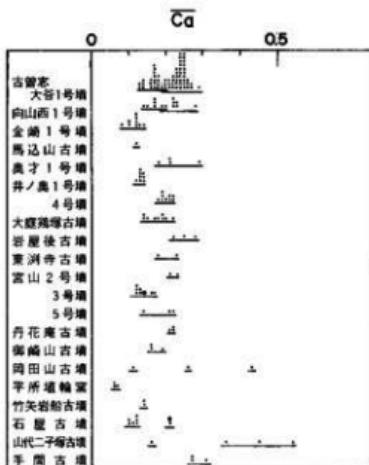


図12 Fe因子の比較

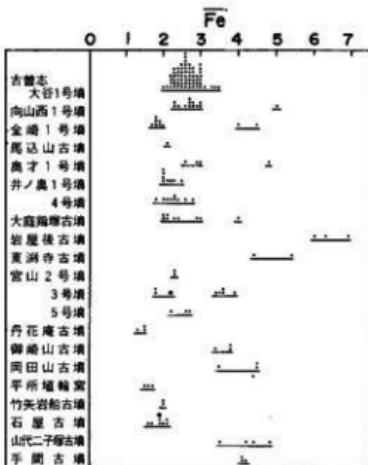


図13 井ノ奥古墳群出土埴輪の  
Rb-Sr分布図

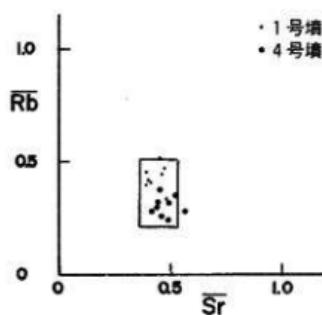


図14 金崎1号墳出土埴輪の  
Rb-Sr分布図

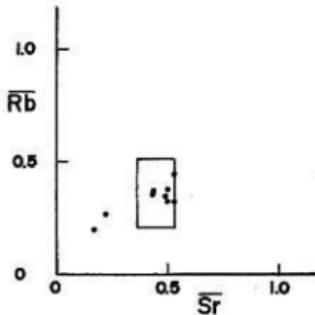


図15 石屋古墳出土埴輪の  
Rb-Sr分布図

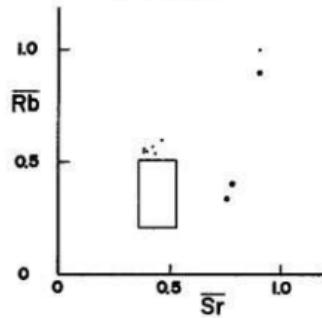


図16 馬込山古墳、奥才1号墳出土埴輪の  
Rb-Sr分布図

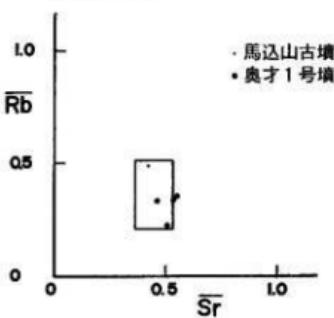


図17 平所埴輪窯、竹矢岩船古墳  
出土埴輪のRb-Sr分布図

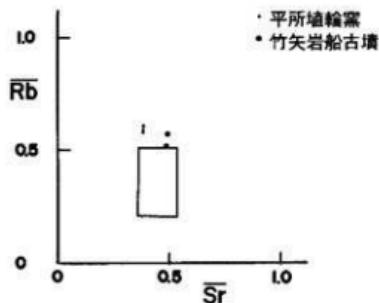


図18 向山西2号墳出土埴輪の  
Rb-Sr分布図

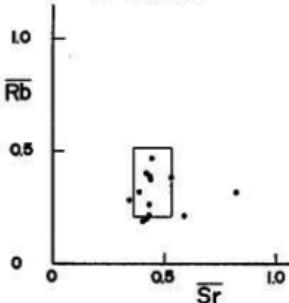


図19 大庭鶏塚古墳出土埴輪の  
Rb-Sr分布図

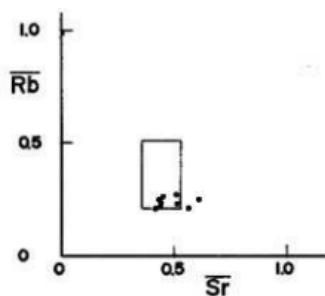


図21 山代二子塚古墳出土埴輪の  
Rb-Sr分布図

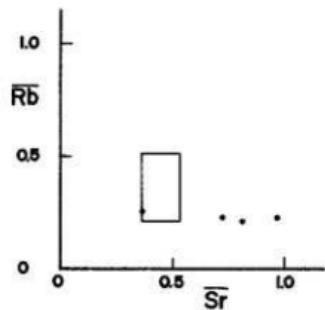


図23 手間古墳出土埴輪の  
Rb-Sr分布図

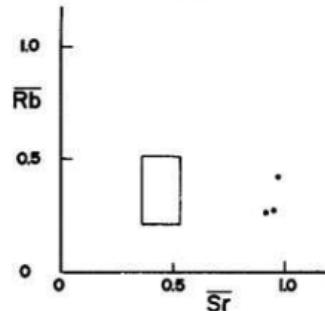


図20 岩屋後古墳、東湖寺古墳  
出土埴輪のRb-Sr分布図

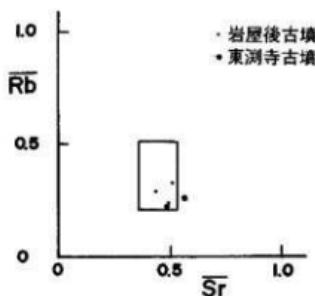


図22 御崎山古墳、岡田山1号墳  
出土埴輪のRb-Sr分布図

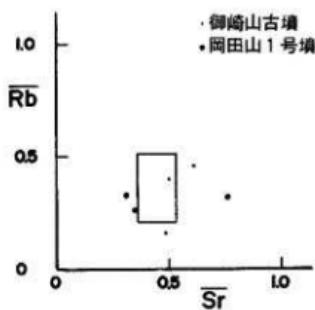
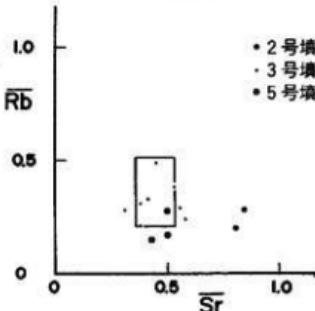


図24 宮山古墳群出土埴輪の  
Rb-Sr分布図



て、この1点は別胎土であるが、他のC-1, 2, 3の3点は全因子で類似しており、同質の胎土であるとみられる。

図22には御崎山古墳、岡田山1号墳の埴輪のRb-Sr分布図を示す。少しばらつきが大きく、これだけでは同質の胎土かどうかは何とも言えない。しかし、御崎山古墳の1点はK, Rb量が少なく、他の2点とは別胎土とみられるが、他の2点は同質の胎土である。岡田山1号墳の3点はCa因子が大きくばらついており、同質の胎土とは言い難い。

図23には手間古墳の埴輪のRb-Sr分布図を示す。3点ともSr量が多く、古曾志領域には全く対応しない。しかし、この3点は全因子でよくそろっており、同質の胎土である。また、これら3点の埴輪胎土は全因子で、向山西2号墳の埴輪の中に1点だけSr量が多く、ずれたものがあったが、これとよく対応しており、これらは同一産地の埴輪である可能性がある。

なお、平所窯出土埴輪の分析データは図17、10~12に示してあるが、石屋古墳の埴輪と同質であることがわかる。したがって、石屋古墳の埴輪は平所窯で作られたものである可能性がある。

以上にみてきたように、松江市内の古墳出土埴輪は同時期のものでも全因子で対応するものは少ない。このことはこれらの埴輪は別々の場所で作られたもの、所謂、野焼きの埴輪であることを示唆しているのかもしれない。ただ、例外は石屋古墳の埴輪で、これは平所窯で焼成された埴輪である可能性が高い。

最後に、安来市の宮山古墳群出土埴輪のRb-Sr分布図を図24に示す。この図をみると限り、2号墳、3号墳、5号墳の埴輪胎土は少しづつ異なるように見える。2号墳の2点を除く他の埴輪胎土は全因子で古曾志大谷1号墳のB型に対応している。したがって、古曾志大谷1号墳のB群、向山西2号墳の一部と、宮山3号、5号墳の埴輪胎土は同質であり、同じ場所で焼成された可能性を持つ。ただし、3号墳のうちの3点はK, Fe因子で他の埴輪胎土とは異なっており、別胎土である。

このように、松江市周辺の5~6世紀代の古墳出土埴輪は胎土からみて、大部分は野焼きの埴輪である可能性をもつが、一部には同質の胎土をもつものがいくつかの古墳に検出されており、これらの埴輪は果して同一場所で焼成され、別々の古墳に供給されたものであるかどうか、今後、考古学的な観察の結果も併せて総合的に検討していく必要がある。また、平所窯の埴輪が石屋古墳以外の他の古墳からも検出されるかどうかかも重要な問題である。つまり、このことは1ヶ所の窯で焼成された埴輪が、別々の古墳に供給されていったという需要・供給のバターンが島根県下でもあったかどうかの決め手になるからである。

表 胎土分析試料一覧表

(古曾志大谷1号墳)

試料番号	掲載図番号	取り上げ番号	胎土	試料番号	掲載図番号	取り上げ番号	胎土
A-1		D-5-1	A	40	-35	造-北-4	B
2	埴輪-1	D-5-2	A	41	-36	造-北-5	A
3	-2	D-5-3	A	42	-37	造-南-1	B
4	-3	D-6-1	B	43	-38	造-南-2	A
5	-4	D-6-2+3	B	44	-39	造-南-3	A
6		D-7-1	A	45	-95	K-26-1	A
7	-51	D-7-2	B	46	-63	G-16	A
8		D-7-3	B	47		K-6	A
9	-5	D-7-4	B	48		E-17, 18	A
10		D-8-1	B	49	-50	1T-A	B
11		D-8-2	B	50	-54	2T	B
12	-6	D-9-1	B	51	-56	L-4	A
13	-7	D-9-2	A	52	-53	J-6	A
14	-8	D-10-1	A	53	-81	N-16	A
15	-9	D-10-2	B	54		F-4-1	A
16	-10	D-11-1	A	55	-59	L-4	A
17		D-11-2	B	56	-58	2T-1	A
18	-11	D-13-1	A	57	-82	N-15	B
19		E-7-1	B	58	-88	北クビレ	A
20	-49	E-7-2	A	59	-48	1T	B
21	-47	E-7-3+4	B	60	-62	北クビレ	B
22	-12	F-10-1	A	61			B
23	-13	F-11-2	A	62	-85	H-18	A
24	-14	F-12-3	A	63	-93	E,F,G-26~28	B
25	-15	F-13-5	A	64	須恵-19		
26	-18	F-14-8	B	65	-20		
27	-61	G-17-11	A	66	-2		
28	-21	F-17-12	A	67	-1		
29	-22	F-17-13	A	68	-14		
30	-23	F-18-14	A	69	-3		
31	-24	F-18-15	B	70	-16		
32	-26	F-19-17	A	71	-10		
33	-27	F-19-18	A	72	-12		
34	-28	F-20-20	A	73	-6		
35	-29	E-22-21	A	74	-4		
36	-30	E-22-22	A	75	-8		
37	-32	造-北-1	A	76	-5		
38	-33	造-北-2	A	77	-9		
39	-34	造-北-3	A				

## (その他の遺跡)

試料番号	遺跡名	特徴
B-1	宮山2号墳	土師質
-2	"	"
-3	タ3号墳	"
-4	"	"
-5	"	"
-6	"	"
-7	"	須恵質
-8	"	" , 切除
-9	"	" , "
-10	"	形象埴輪
-11	タ5号墳	土師質
-12	"	"
-13	"	"
C-1	山代二子塚	土師質
-2	"	須恵質
-3	"	土師質
-4	"	"
D-1	向山西2号墳	切除
-2	"	土師質
-3	"	切除
-4	"	須恵質
-5	"	土師質9片
E-1	大庭鶏塚	土師質9片
F-1	井ノ奥1号墳	土師質8片
-2	井ノ奥4号墳	9片(須恵質含)
G-1	手間古墳	土師質
-2	"	"
-3	"	"
H-1	竹矢岩船古墳	土師質
-2	"	"
I-1	岩屋後古墳	土師質
-2	"	"
-3	"	"

試料番号	遺跡名	特徴
J-1	東瀬寺古墳	土師質
-2	"	"
K-1	御崎山古墳	土師質
-2	"	"
-3	"	"
L-1	岡田山1号墳	土師質
-2	"	須恵質, 切除せず
-3	"	土師質
M-1	平所埴輪窓跡	3片
N-1	金崎1号墳	土師質
-2	"	"
-3	"	" 7片
O-1	馬込山古墳	土師質
P-1	丹花庵古墳	土師質
-2	"	"
-3	"	"
Q-1	奥才1号墳	須恵質, 切除せず
-2	"	土師質
-3	"	"
-4	"	"
R-1	向山古墳	土師質
S-1	石屋古墳	土師質8片, 形象1

その他の遺跡でとりあげた試料で、すでに発掘調査がなされたものについては、出土資料をあてたが未調査のものは表面採集資料によった。

胎土分析試料の提供を快諾された松江市教育委員会 昌子寛光氏、鹿島町教育委員会 赤沢秀則氏、八雲立つ風上記の丘資料館 幸野芳英氏に感謝の意を表します。

(鳥取県教育委員会 記)

## 第2節 古曾志平廻田遺跡の熱残留磁気測定

島根大学理学部

時枝克安・伊藤晴明

古曾志平廻田遺跡（松江市古曾志町、北緯35度29分 東経132度59分）のⅢ区3号窯跡、Ⅰ区SB-05床面焼土、Ⅱ区SB-02 P-8焼土から定方位試料を採取し熱残留磁気を測定した。そして、残留磁気の平均方向を西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化と比べて焼土の最終焼成年代の推定を試みた。その結果、3号窯跡についてA.D.1000±100、Ⅰ区SB-05床面焼土についてA.D.580±30の考古地磁気年代を得た。Ⅱ区SB-02 P-8焼土については、残留磁気の方向が大きく乱れるために年代推定は不可能である。なお、Ⅰ区SB-05の年代の導出については残留磁気の平均方向が参照曲線から著しく離れているという難点があるが、この原因を焼土の傾動と考えて処理している。

### 1. 热残留磁気による年代測定の仕組

地磁気の方向は一定ではなく10年以上経過すると目に見えて変化する。このようなゆっくりした変化は地磁気永年変化と称されている。一方、地磁気中で粘土が焼けると焼土は熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の担い手は焼土中に数パーセント程度含まれる磁鉄鉱等の強磁性鉱物である。この熱残留磁気の方向は焼けた時の地磁気の方向に一致し、再加熱されないかぎり安定であり数万年程度経過しても変化しない。それゆえ、あらかじめ過去の地磁気の方向が時間とともにどのように変化したかをグラフにできれば、このグラフを“時計”的目盛として焼土の最終焼成年代を推定できる。この時計では、地磁気の方向が針に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の針の位置を記憶していることになる。『地磁気の方向一年代のグラフ』を決めるためには、年代既知の焼土の残留磁気から各年代の地磁気の方向を測定しておかなければならぬ。幸い、日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線がかなり詳しく定められているので、この方法が焼土の簡便な年代決定法として実用化されている。<sup>1)</sup>

### 2. 遺跡の概要と定方位試料

3号窯跡は登り窯（～長さ4m、幅1.4m）であり、出土した須恵器から10世紀の年代を考えられている。Ⅰ区SB-05床面焼土は建物跡の一隅にある床面より少し盛り上がった焼土（～75×75cm）であり、建物跡からは奈良時代の土器が多く出土した。Ⅱ区SB-02 P-8焼土は、別の建物

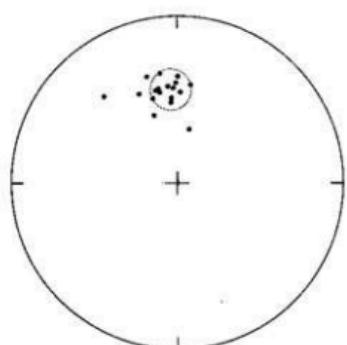


図1 3号窯跡の残留磁気の方向

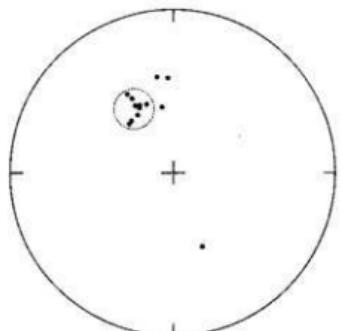


図2 I区SB-05床面焼土の残留磁気の方向

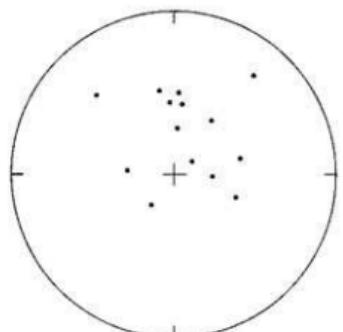


図3 III区SB-02-P-8焼土の残留磁気の方向

跡にある穴（径～100cm、深さ～50cm）の焼けた壁面であり、建物跡は奈良時代のものと考えられているが焼土の性格は分っていない。

年代測定用の定位試料については、石膏で固めクリノコンパスで方位を測定する仕方で次のように採取した。

3号窯跡	窯尻から15個 焚口から15個
I区SB-05 床面焼土	22個
II区SB-02 P-8 焼土	16個

### 3. 測定結果

図1, 2, 3にそれぞれの遺構について無定位磁力計で測定した残留磁気の方向を示している。方向の集中度はいずれもよくないが、特に乱れの著しいII区SB-02 P-8焼土（図3）以外では、大きく飛び離れた結果を省略すると比較的よく揃っているので（図1・2、点線円内）、これらのデータを年代測定に用いることにする。

このように選択したデータの平均方向と測定誤差の目安となる数値を計算すると次のようになる。95%誤差角（ $\theta_{95}$ ）というのは、円錐（頂点はステレオ投影図の中心に、軸は平均方向に沿い、頂角は測定結果の95%を含むように選ぶ）の頂角の半分に相当し、値が小さいほど測定誤差が少ないことを意味する。反対に、Fisherの信頼度係数（k）は大きいほど測定精度がよいことを意味する。3号窯跡、I区SB-05床面焼土のk（146, 196）および $\theta_{95}$ （3.4, 3.5度）は方向の乱れを反映して、平均的レベルよりかなり劣った値になっている。

### 熱残留磁気の平均方向

遺構	Im(度)	Dm(度W)	k	$\theta_{95}$ (度)	N
3号窯跡	42.50	5.20	146	3.40	13
I区SB-05床面焼土	51.80	30.60	196	3.50	10

Im : 平均伏角      Dm : 平均偏角      k : Fisherの信頼度係数  
 $\theta_{95}$  : 95%誤差角      N : 有効試料数

### 4. 考古地磁気年代推定

図4には、広岡(1977)による過去2000年間の西南日本の地磁気永年変化曲線とともに、3号窯跡とI区SB-05床面焼土の残留磁気の平均方向と誤差の範囲を十印と点線の楕円で示してある。焼土の考古地磁気年代を求めるには、地磁気永年変化曲線上に残留磁気の平均方向に近い点を求め年代を読みとればよい。

3号窯跡の年代として、A.D.55±30, A.D.470±30, A.D.1000±100, A.D.1850±100の4つの候補値を得る。複数の値を得るのは参照曲線の重なり合いのためである。しかし、出土した須恵器が10世紀に比定されているので、考古地磁気年代としてA.D.1000±100を選ぶのが妥当となる。

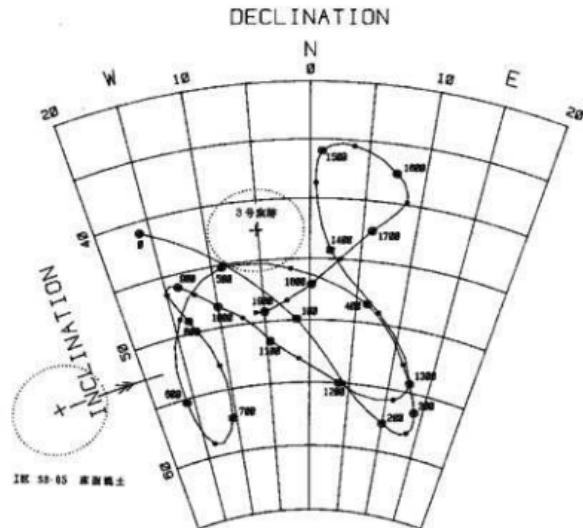


図4 3号窯跡、I区SB-05床面焼土の残留磁気の平均方向(+)と誤差の範囲(点線の楕円)および広岡による西南日本の過去2,000年間の地磁気永年変化曲線

I区SB-05床面焼土の年代については、残留磁気の平均方向が参照曲線から著しく逸れているので、このままで年代を推定するのは少し無理がある。そこで、ありうる仮定として、最終焼成後に、焼土が遺構の位置する丘陵の傾斜方向（東）に傾いたとすると、復元された残留磁気の方向は図4の矢印に沿って参照曲線に近づくことになる。このような考慮に基いて、I区SB-05床面焼土の年代としてA.D.580±30を得た。

#### 考古地磁気年代

3号窯跡 A.D. 1000±100

I区SB-05床面焼土 A.D. 580±30

#### 5. 考 察

3号窯跡の残留磁気の方向集中度はよくないが、この原因は少なくとも窯の構造の局部的な傾動のせいではない。それは窯の両端での残留磁気の方向がほぼ一致しているからである。4つの候補年代について、残留磁気の平均方向と参照曲線上の点の間の距離を比較すると、選択した年代よりも他の候補値のものの方がむしろ近接している。これは好ましい状況とは言えないが、その原因はよくわからない。

I区SB-05床面焼土の年代を求めるときに、ありうる傾動方向として斜面の方向（東）を選んだが、この方向がたまたま参照曲線の相当部分には直交しているので、傾斜の大きさが変っても、残留磁気の方向から最短距離にある点（参照曲線上）の位置、ひいてはそれぞれの場合の推定年代はあまり変わらない。

考古学的年代との関係を調べると、3号窯跡はうまく合っているが、I区SB-05床面焼土については、考古地磁気年代（A.D.580±30）の方が遺構から出土した土器の推定年代（奈良時代）よりもかなり古くなっている。しかし、土器が持ち込まれたのは建物の年代よりかなり後かもしれないで、年代差が少しき問題点があるものの、年代の順序に矛盾はないと考えられる。

最後に、試料採取の便宜を図り、考古学の知識を教示された足立克己氏（島根県教育委員会）に厚く感謝する。

註1 広岡公夫（1977） 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究15巻、200~203

### 第3節 古曾志大谷1号墳周辺の表層土の構造と黒色土層

島根大学 三浦 清

古曾志大谷1号墳の周辺には図-1で示すように新第三系布志名泥岩層（ここでは古江泥岩層と呼ぶ）に対して不整合の関係で赤茶褐色土層が被覆し、さらにそれを覆って黒色土層が分布する。その上を古墳を構成する盛土が覆うという関係になっている。

ここで問題とするのは、黒色土層が人為であるかどうかという点である。もしそうであるなら、なんらかの土質力学的意味を考察する必要が生ずる。そのような意味から、この黒色土層について検討した。

古曾志大谷1号墳の周辺の基本的な地質は、前述のように新第三系古江泥岩層からなっており、それを洪積世の乃木層、さらには大山松江降下軽石層が部分的ながら覆っている。しかし、この大山松江降下軽石層や乃木層はこの古墳構築部の付近では見られない。

古墳のまわりでは図-1に示すように、古江泥岩層（4）の上には赤茶褐色土層（3）が20~50cm程度の厚さで覆い、その上を黒色土層（2）が覆っている。

赤茶褐色土層中には、火山ガラスが含まれ、このEPMA分析値を図-2に示す。この火山ガラスはアイラTn火山灰ATのものと、アカホヤ火山灰Ahのもの両者がある。つまり、アイラTn火山灰ATの降下年代がおよそ2万3,000年から2万5,000年以前（最近の考え方）であり、アカホヤ火山灰Ahの降下年代が6,100年ぐらい以前のものであるから、この赤茶褐色土層は少なくとも、このアカホヤ火山灰Ah降下後に形成されたものである。赤茶褐色土層中には古江層起源の有孔虫化石も多く含まれており、土層そのものの材料の主部を占めるものが古江層起源のものであるから、結局、アカホヤ火山灰Ah降下後に、古江層表層部とこれらテフラが混りあって出来た崖堆土であると判断される。

赤茶褐色土層（3）を覆って黒色土層が分布する。この中には図-3で示すように、アイラTn火山灰ATおよびアカホヤ火山灰Ah起源の火山ガラスが含まれる。さらに、古江層起源の有孔虫化石もかなり含まれ、少なくともこの土層の材料が古江泥岩層起源のものと前記のテフラなどからなっていることを示し、その下位の赤褐色土層と大局的には同じものである。しかし、この黒色土

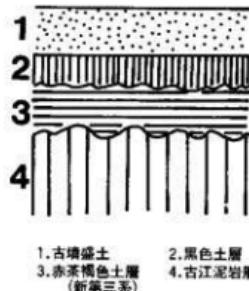


図1 古曾志大谷1号墳のまわりの表層土の構造

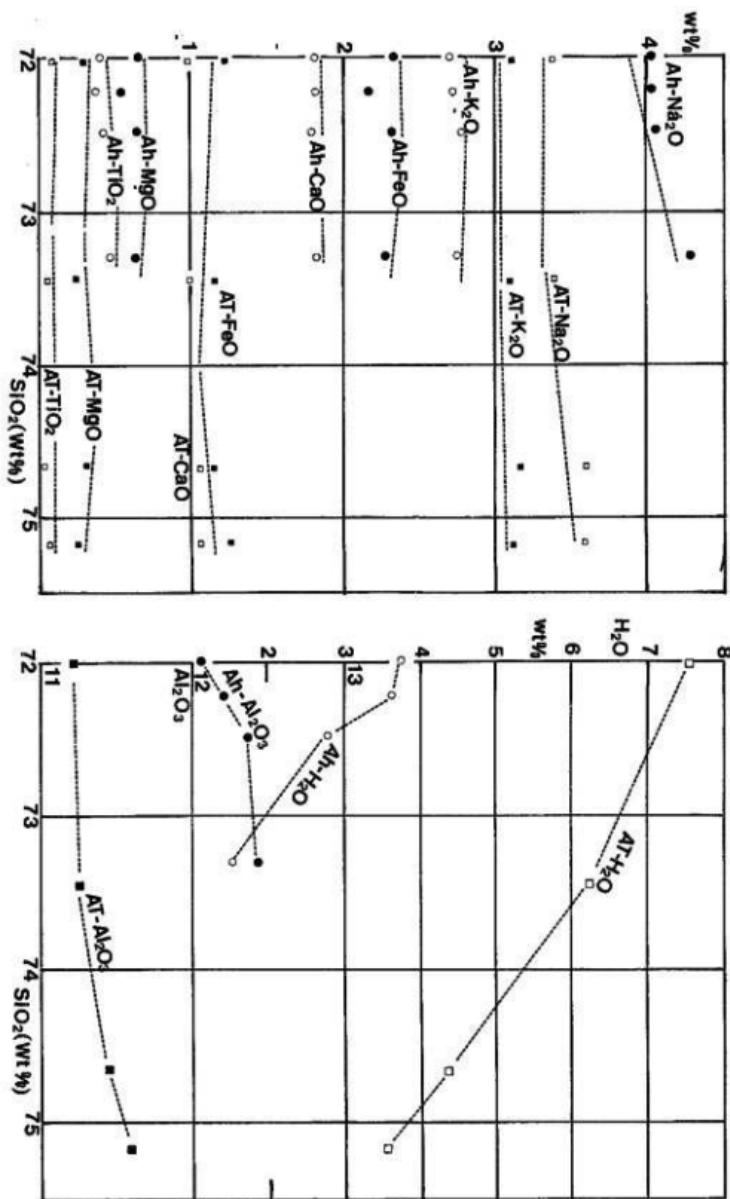


図2 赤茶褐色土層に含まれる火山ガラスの化学組成  
AT:アイラ火山灰起源の火山ガラス, Ah:アカホヤ火山灰起源の火山ガラス

層中には木炭小片や灰化木炭が多量に含まれ、黒色の原因がこれによることを示す。さらに、赤色鉱物片も多量にこの中に見られるが、これは褐鉄鉱脈片の酸化物である。これら包含物質の電顕写真をまとめて示す（図版166、167）。

結論的に述べるとこの黒色土層は赤茶褐色土層上に繁茂していた埴生が焼かれて灰化され表層土と混りあった部分であろうと見られるのである。黒色土層上に直接的に古墳盛土が被覆されているので、古墳構築に先立って地表が焼き払われたものであろう。これによって地表表層土が木炭片、灰化木炭片などと混りあって黒色化すると同時に、含まれていた褐鉄鉱脈片（古江層中に生成している褐鉄鉱細脈起源）が赤鉄鉱化したものと考えらる。同時に黒色土層の下位層をなす赤茶褐色土層も加熱酸化を受けて、より赤味を増したものとみられる。

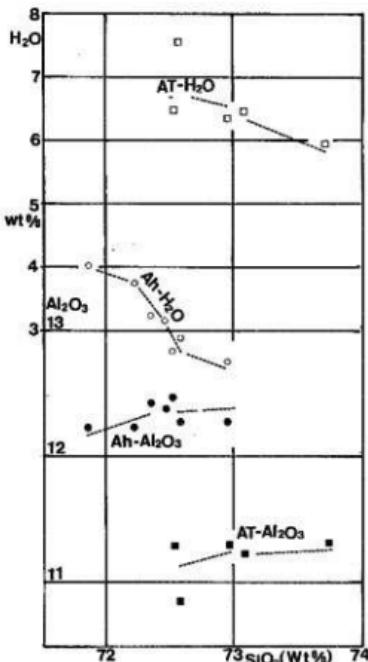
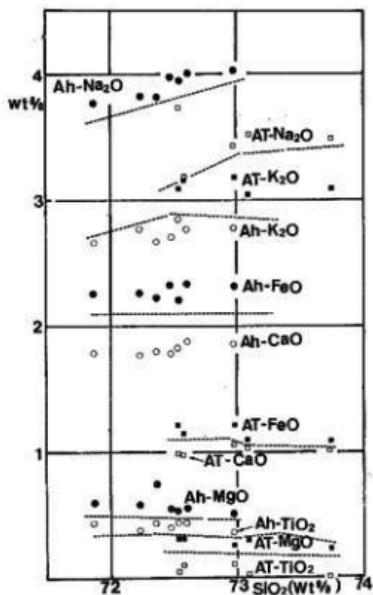


図3 黒色土層に含まれる火山ガラスの化学組成  
AT:アイラ火山灰起源の火山ガラス, Ah:アカホヤ火山灰起源の火山ガラス

## 第7章 まとめ

### 第1節 占曾志遺跡群出土の旧石器について

#### 1. 古曾志清水遺跡出土石器

古曾志清水遺跡からは、I区及びII区から旧石器時代のものと考えられる石器が出土している。これらのうち、定形的な石器としてI区から台形様石器、II区から小形のナイフ形石器が出土している。台形様石器（第164図3）は、横長の剝片の一側縁に、プランティング状の加工を加えて台形様に形を整え、腹面の両側に平坦剝離を施したもので、石材は玉髓質メノウである。周辺地域で類似のものは、広島県冠遺跡、広島県西ガガラ遺跡、岡山県野原早風A地点、<sup>(1)</sup> 小林河原遺跡、<sup>(2)</sup> 兵庫県春日七日市遺跡などで見ることができる。

小形のナイフ形石器（第171図2）はやや横長の不定形剝片の末端及び打点側の一部に微細な二次加工を施したもので、同図4も同種のものかもしれない。類似の石器は、広島県地宗寺遺跡や岡山県野原遺跡出土の石器の中に見ることができる。さらに目を広げると、北陸地方を中心に分布する「立野ケ原型ナイフ形石器」<sup>(3)</sup>と類似しており、注目される。

剝片剝離技術は、石核の観察から、A. 分厚な剝片の腹面側に向かって打点をわずかに移動しながら連続して小形の剝片を剝離するもの（第170図3、第171図5）。B. 一定の打面から、やや寸づまりの継長剝片を剝離するもの（第170図2）。C. 打面の転移を頻繁に行って不定形の剝片を剝離するもの（第164図1）等がみられる。これらのうちAは前述の小形のナイフ型石器の素材を供給するものであるが、注目すべきは「米ヶ森技法」と同様の技法であることである。この米ヶ森技法とは、東北地方日本海側でみられる「米ヶ森型台形石器」と呼ばれる台形ないし円形の小形剝片にわずかな二次加工を行った石器の素材を剝離する技法で、<sup>(4)</sup> 北陸の立野ケ原型ナイフ形石器の製作技法においても同様の技法が確認されている。

さてこれらの石器群は、層位的にまとまったものではなく、また山陰において比較すべき良好な石器群がないため、位置づけは難しいが、他地域との比較により若干の予察をしたい。まず時期的には、台形様石器、小形ナイフ形石器とも、同様の石器が出土している遺跡の層位関係から、AT火山灰の下位に位置づけられる可能性が高い。剝片剝離技術から見てもそれは現在の研究状況と矛盾しないと思われる。地域的位置づけについては、大局的に見れば西日本のAT下位の石器群の一般的なあり方に近いものと言えるが、先に述べたように、北陸、東北日本海側との繋がりを示す可能性があるものもあり、今後の資料の増加を期待したい。これらの石器群のもう1つの特徴は、玉髓、

メノウ類を石材の主体としていることである。これらの石材は、玉湯町の花山山を中心に産出する地元石材で、近年松江市周辺で出土している旧石器時代の遺物の多くがこの石材を利用している。旧石器時代の少なくともある時期に、地元の玉髓系石材が主体的に使われていたことは確かで、今後この石材には注意を要するであろう。

## 2. 古曾志平廻田遺跡出土石器

横長の剝片を素材としたナイフ形石器が2点出土している。黒曜石と安山岩製で、製品2点のみのため不明瞭ではあるが、国府型の範疇にはいるものか。中国山地を経て瀬戸内地方の石器文化との交流があったことを示すものであろう。ただ、窓の灰原という悪条件ながら、製品2個のみで剝片、石核類がまったく出土していないことや、共に外來の石材製であることから、これらが搬入品である可能性も含めておく必要があろう。

### 註

1. 佐尾周三 「広島県冠遺跡群D地点の調査」『第5回中・四国旧石器文化談話会発表要旨』 中・四国旧石器文化談話会 1988年
2. 藤野次史 「西ガガ遺跡第1地点、旧石器時代」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 W 広島大学統合移転地理文化財調査委員会 1988年
3. 平井 勝 「野原遺跡群平風A地点」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』32 岡山県教育委員会 1979年
4. 犀川 純 「小林河原遺跡採集の台形様石器」『岡山理科大学藤山研究所研究報告』11 岡山理科大学 藤山研究所 1985年
5. 久保幸弘・藤田淳・山口卓也 「兵庫県における最近の旧石器時代遺跡発掘調査の動向」『日本考古学協会 1987年度大会研究発表要旨』 1987年
6. 三枝龍二 「地寺寺遺跡発掘調査報告」 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1982年
7. 麻柄一志 「いわゆる立野ケ原型ナイフ形石器の基礎的整理」『旧石器考古学』33 旧石器文化談話会 1986年
8. 協和町教育委員会 『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』 1977年  
麻柄一志氏の御教示を得た。
9. 奥村吉信 「北陸の後期旧石器時代前半の石器群」『旧石器考古学』37 旧石器文化談話会 1988年
10. 松原和人 「西日本におけるATT下位の石器群」『国立歴史民俗博物館研究報告』第13集 1987年  
藤野次史 「中国地方・近畿地方西部におけるATT下位の石器群について」『九州旧石器』創刊号 1989年
11. 稲田孝司 「中国地方旧石器文化の諸問題」『岡山大学文学部紀要』第7号 1986年

## 第2節 古曾志大谷1号墳をめぐる諸問題

### 1. 古曾志大谷1号墳について

#### (1) 墳丘の築造方法と墳形

古曾志大谷1号墳は、出雲地方でも有数の前方後方墳であったことから、その発見以来、多くの研究者の注目を浴び、保存問題が人々の关心を集めることとなつたが<sup>(1)</sup>、最終的には移築復元といふ方針が出て、墳丘盛土も完掘するという結果になった。これにより、滅多に知ることのできない大形前方後方墳の築造方法が判明するに至つた。以下にその知り得た知見を簡単に述べておきたい。

#### 古墳の築造方法

古墳の築造にあたってはまずその選地が問題となるが、出雲地方の前～中期古墳では、沖積平野や宍道湖、中海、もしくは主要河川に面した丘陵上やその先端部に築かれる場合が多い。古曾志大谷1号墳も直下に宍道湖を見下ろす丘陵の最高所に位置し、集落から隔絶した感が強い。この尾根頂部は、幅は10m前後と狭くてやや丸みがあるものの、北西から南東に向けて、1号墳の上段の長さにはほぼ匹敵する約40mの水平な面があり、40数mの古墳を造るにはちょうど手頃な場所であったと考えられる。

1号墳の築造方法については、調査結果をもとにその築造手順を復元すると次のようになると考えられる。すなわち、

- ① 古墳の築造に必要な範囲を伐開し、地表面を焼き払う。
- ② 地表面のうち、上段の裾および墳丘裾に相当する部分を前方後方形に削り出す。
- ③ 墳形内部の地表面はそのまま残し、古墳周辺の地山を削り、後方部上段の裾付近にまず土盛りし、順次後方部全体に盛土を行う。
- ④ その後、後方部側から前方部の盛土を開始し、のち、前方部先端側からさちに盛る。
- ⑤ 下段を盛り、平坦面を造り出して葺石を貼り、頂部には敷石を行う。

後方部の中心主体については、第5章第4節で記したようにすでに流出したらしく、発見できなかつたことから、どの段階で構築されたかは不明である。しかし、前方部の主体部が敷石からさほど深くないところで検出されたことを考えると、後方部主体部の構築も墳丘の盛上がりから完成した段階に行われたことが推定される。古墳下の旧地形は、墳丘を高くに足る長さではあったものの短軸方向には不十分で、特に南西側斜面の傾斜が急で、古墳長軸の中軸線が尾根筋にはほぼ一致しているにもかかわらず、この面だけは墳裾を削り出すことができていない。このことは築造当初から理解されていた問題のようで、南西面に現存している葺石には盛土をしっかり押さえるためにはかの面よりも大形の石が配されている。しかし、結果としてはその努力もむなしく、この面の多く

は流出してしまっており、後方部北西隅および前方部南西隅の崩壊などはおよそ想像だにしなかつたにちがいない。

大形の古墳における墳丘と盛土（地山）との関係は、尾根上に立地する古墳の場合墳丘のかなりの部分が地山であることが推測されるが、旧地表面の処理の仕方が問題となろう。古曾志大谷1号墳のように、各段の裾部分を加工するのみで旧地表面はそのまま残して盛土を行うというやり方は、<sup>(2)</sup> 松江市井ノ奥4号墳、向山西2号墳、岡田山1号墳、<sup>(3)</sup> 安来市宮山1号墳など、島根県内の5~6世紀代の古墳には多く認められる現象で、広島県双三郡吉舎町三玉大塚古墳や岡山県久米郡久米町久米三成4号墳、<sup>(7)</sup> 神戸市五色塚古墳など県外にも類例が多い。旧表土を除去したり、一度地山を平らに削って主体部や盛土を構築していく前期の古墳や、松江市金崎1号墳のように主体部の周辺以外は旧地表面を削り取ってしまう方法に比べて、労働力の省略化の傾向が窺われる。盛土の順序としてまず段の裾や墳裾から盛っていく手法は、岡山市七ツ塚1号墳など発生期の古墳からすでに行われており、同古墳や五色塚古墳のように土堤状に高く盛り上げるまではしていないが、同様な技術を駆使して築造していることがわかる。五色塚古墳ではさらに、盛土下に残された旧表土に焼土や灰が含まれていたことがわかつており、久米三成4号墳でも旧地表面の立木や雑草を焼いた形跡が認められることから、古墳の築造に当たっては、造成前に地表面を焼くことが頻繁に行われていた可能性が強い。

前方部と後方部の築造順序については、出雲市の大念寺古墳が古曾志大谷1号墳と同様後円部を先に築いており、岡田山1号墳も後方部が先に築かれたと考えられている。また、米子市別所1号墳では後円部と第1石室が築かれたのち前方部が築かれ、さらに墳丘全体が築かれるという順序になっている。前方部と後方部（後円部）が同時に進められる場合もあるが、前方後円墳なり前方後方墳の中心が中心埋葬施設のある後円部、後方部であるならば、同部分から築造が開始されるのは至極当然なことかもしれない。

#### 古曾志大谷1号墳の墳形

前項の②の前方後方形に造り出す作業は、前方後円墳の築造と同様、何らかの設計基準に基づいて実施されたと考えられるが、その手がかりとなるような痕跡は確認されなかった。よってここでは出雲地方における前方後方墳との形態的関係について簡単に触れるにとどめたい。

表は出雲地方における前方後方墳の一覧である。36基ある前方後方墳のうち、筆頭は松江市山代町の山代二子塚古墳で全長は推定で92mで、出雲西部の最大規模の前方後円墳である大念寺古墳に匹敵する大きさである。これに次ぐ60~80mの古墳は発見されておらず、50mクラスの安来市宮山1号墳、飯石郡三刀屋町松本1号墳、松江市竹矢岩船古墳、薄井原古墳がこれに続く。古曾志大谷1号墳は全長約46mでこれらに次いで6番目の規模である。また、前方後円墳や円墳、方墳も含め

表 出雲の前方後方墳一覧

(1986年5月31日現在)

No.	規模	名 称	所在地	全長(m)	蓋石	埴輪	主体部	備 考
1	90m級	山代二子冢	松江市山代町	(92)	○	○		須恵器(伝採土), 周溝
	60~80m級							
2		宮山1号	安来市西赤江町	(52)	○	○		土師器
3	50m級	松本1号	飯石郡三刀屋町	50			粘土梯2	鏡, 刀, 玉, 土師器
4	(4基)	竹矢岩船	松江市竹矢町	50	○	○	舟形石棺	
5		薄井原	松江市坂本町	50			横穴式石室2	大刀, 鏡, 玉, 須恵器
6		古曾志大谷1号	松江市古曾志町	46	○	○	腰帶状主体部	大刀, 須恵器
7		造山2号	安来市荒島町	46	○	○		
8	40m級	平廻	松江市上大野町	44				
9	(6基)	仏山	安来市荒島町	43	○	○		馬具, 環佩, 鋸斧, 鐵鎌他
10		寺輪	安来市幡田町	41				
11		御崎山	松江市大草町	(40)		○	横穴式石室	鏡, 大刀, 馬具, 須恵器
12		名分丸山	八束郡鹿島町	39				
13	30m級	乃木二子冢	松江市上乃木町	36			須恵器	周溝
14	(5基)	藤田1号	松江市長瀬町	35				
15		金崎1号	松江市西川津町	32	○	○	横穴式石室	鏡, 玉瓶, 鐵製品他
16		菅田ヶ丘	松江市西川津町	(30)		○		玉
17		穴觀2号	仁多郡仁多町	29			横穴式石室	
18		古天神	松江市大草町	(27)		○	石棺式石室	馬具, 須恵器
19		比摩小丸山	松江市比摩町	26				
20		新宮山1号	松江市大野町	26		○		
21		宮山3号	安来市西赤江町	(24)		○		須恵器
22		田中谷	松江市法吉町	23.9				
23	20m級	迎撃寺3号	松江市八幡町	23				
24	(14基)	金崎5号	松江市西川津町	22		○		須恵器
25		岡田山1号	松江市大草町	(22)	○	○	横穴式石室	鏡, 大刀, 馬具, 須恵器
26		中竹矢1号	松江市竹矢町	20.7				
27		室藤2号	松江市西川津町	20.5				
28		潤切2号	松江市長瀬町	20.5		○		
29		上竹矢8号	松江市竹矢町	20				
30		才の岬2号	松江市竹矢町	不明		○		須恵器
31		神主冢	松江市古曾志町	19.4				
32		櫛追1号	八束郡東出雲町	19				
33	10m級	奥才3号	八束郡鹿島町	19				
34	(6基)	向山西2号	松江市大庭町	19	○	○		須恵器
35		中尾谷山2号	八束郡鹿島町	17				
36		中竹矢2号	松江市竹矢町	14			横穴墓	

(文化課 松本岩雄 作成)

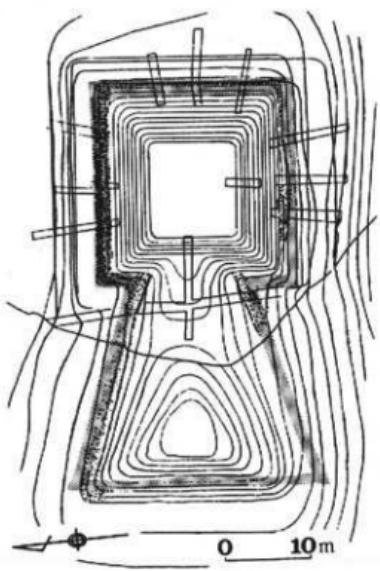
ると、25番目ということになる。

墳形については、全容の判明している古墳が少ないため、比較する資料は少ない。5世紀前半代の宮山1号墳は第1次調査のうち前方部が破壊を受け、今は山本清氏の復元図からでしか推定できないが、前方部と後方部の長さが同じか、前方部の方が長くなる可能性が強く、全長に比べて後方部幅比が狭く全体に細身の感がある。一方、金崎1号墳は全長32mの古墳で、前方部幅が後方部幅に比べてかなり狭く、長さも短い。これに近い形で、さらに小形の占墳ながら松江市向山西2号墳のように前方部の先端が開かず、矩形になるものもある。

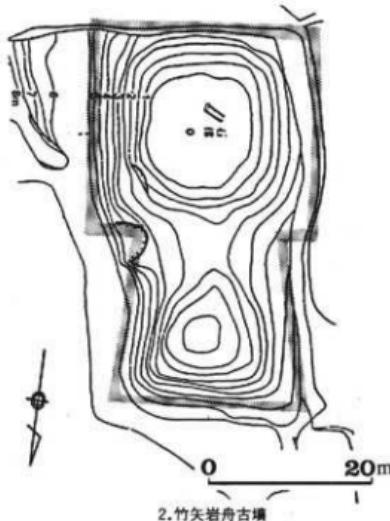
6世紀代の山代二子塚古墳は後方部が大きく削り取られているが、鳥根大学考古学研究室が実施した地形測量に基づく復元では全長約92m、後方部の一辺約55m、前方部幅約55mとなり、後方部長と前方部長の比率は5:3.4である。前方部先端幅が後方部幅とはほぼ同じ大きさの割に前方部長が短く、しかも前方部のくびれ付近が金崎1号墳や向山西2号墳に比べて幅広く築かれているのでかなり重量感のある前方部となっている。石棺式石室を主体部を持つ松江市古天神古墳や、小形ながら同市中竹矢1号墳なども比較的この形態に近いといえる。これらに対して、前方部先端幅に違いはあるけれども、前方部長が伸びて後方部長と前方部長の比が5:4前後となるものに松江市御崎山古墳や竹矢岩船古墳などがある。

古曾志大谷1号墳の大きさを後方部長25m、幅24m、前方部長20.5m、幅約30mとすると、後方部と前方部の比は長さで約5:4.1、幅で4:5となり、前方部がやや短く前方部先端が大きく開く形となっているが、これは墳形で見るかぎり、最後のグループに一番近い形態を示していると言える。また、詳細な地形測量図は公表されていないが、安来市造山2号墳もこれに非常に似た古墳である。

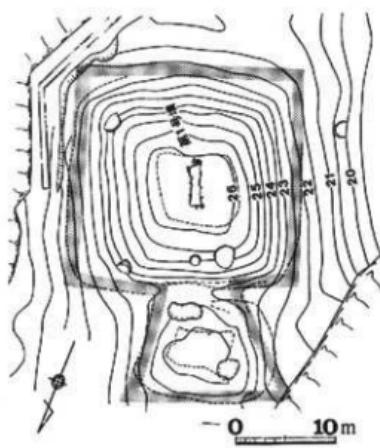
地表観察だけで墳丘の規模を決定し、検討を加えていくことには少々不明確さが伴うものの、このようにしてみてくると、古曾志大谷1号墳の墳形は、これと比較的の築造時期が近い造山2号墳や竹矢岩船古墳に近いものがあり、その墳形自体は6世紀代にはいっても継続して營まれたことが考えられる。しかし、その墳には山代二子塚古墳を代表とするような前方部の短い古墳も多く築かれており、前方後方墳の墳形の変化という面で考えれば、前期の、前方後円墳のそれと同じような細長いばら形の前方部から、徐々に長さが短くなるという傾向が窺われるわけで、古曾志大谷1号墳はちょうどその中間あたりの段階に相当していると考えられる。



1. 宮山1号墳



2. 竹矢岩舟古墳



3. 金崎1号墳



4. 古曾志大谷1号墳

図1 出雲の前方後円墳(1) 緯尺不同 (出典は註文献に同じ)

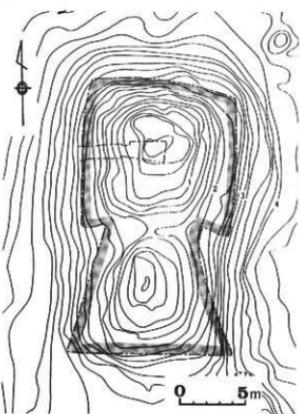
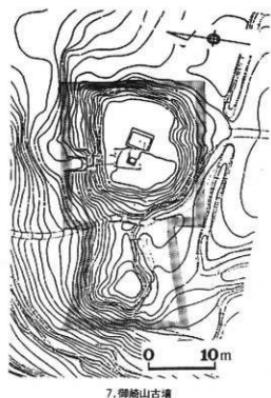
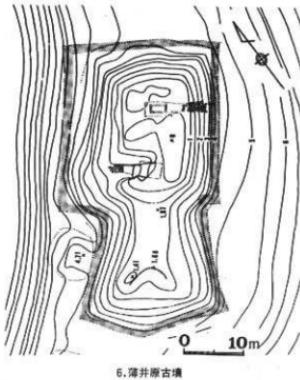
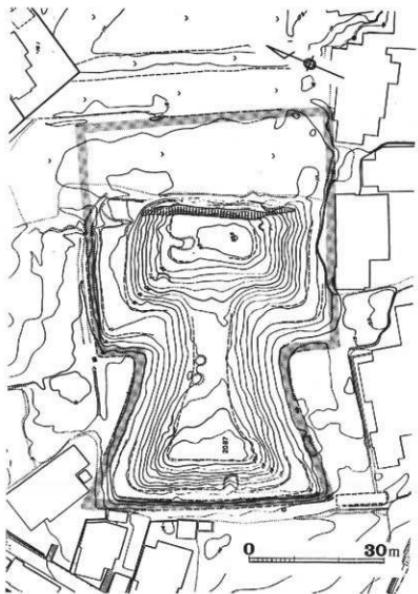


図2 出雲の前方後方墳(2) 緯尺不同 (出典は註文献に同じ)

## 註

1. 島根考古学会ブックレット編集委員会編『古曾志大谷1号墳と古代の出雲』ふるさとブックレット  
山陰の自然と文化10(たたら書房) 1987年4月
2. 関崎雄二郎「松江市井ノ奥第4号墳の調査」『考古学ジャーナル』No.120 1976年
3. 門脇俊彦「向山西古墳群調査概報」『松江考古』創刊号 1978年3月
4. 島根県教育委員会『出雲岡田山古墳』 1987年3月
5. 駒井和愛・山木清「安来市宮山古墳の発掘」『出雲・隱岐』 地方史研究所 1963年
6. 広島県双三郡吉合町教育委員会『三王冢一調査と整備一』 1983年
7. 岡山県教育委員会『久米三成4号墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(30) 1979年3月
8. 神戸市教育委員会『史跡五色塚古墳 復元・整備事業概要』 1982年
9. 松江市教育委員会『史跡金崎古墳群』昭和52年度環境整備事業報告書 1978年3月
10. 七ツ塙古墳群発掘調査団『岡山市七ツ塙古墳群』 1987年
11. 出雲市教育委員会『史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書』 1988年
12. 米子市教育委員会『米子市諫訪遺跡群発掘調査報告書』 県営五千石地区は場整備事業に伴う発掘調査 1983年3月
13. 渡辺貞幸「松江市山代二子塙古墳をめぐる諸問題 一調査調査の成果と今後の課題一」『山陰文化研究紀要』第23号 1983年3月
14. 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』 1983年3月
15. 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書(IV)』 1983年3月
16. 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』I 1982年3月
17. 島根大学考古学研究会「竹矢岩船古墳について」『菅田考古』14号 1976年

## (2) 莼 石

古曾志大谷1号墳では、各段の斜面に葺石を検出した。長さ20~50cmの河原石を中心に、概ね下段に小形の石を、上段に大形の石を使用して、下段平坦面を除く斜面全体に石を葺き、墳頂平坦面には敷石を施したものである。下段の後方部北東辺や前方部先端部では、約1.2m間隔で縦方向に区画石が観察されたことから、下段は一様に区画石に基づき葺石が施されていたと考えられる。

島根県内では、葺石の存在が確認されている古墳は多数あるが、調査によってその一部でも様子のわかっている古墳は少ない。金崎1号墳や向山西2号墳、岡田山1号墳は古墳裾部に人頭大の石を石垣状に廻らせており、向山西が割石の広い面を前面にしてかなり密に積み上げるのに対して、金崎や岡田山は丸みを帯びた自然石を貼付るように廻らせたものである。いずれも帶の幅が1~1.5mで縦方向の区画石等は確認されていない。

墳丘全体に葺石が確認されているものには松江市石巻古墳<sup>(1)</sup>(方墳)があり、河原石を用いた葺石は、やや大きめの墳裾基底石の上にそれより小さい石を横向きに積み上げるが、企画的に縦方向に貼りつけた様子は認められない。墳丘全体の様相が判明していくと、古曾志大谷1号墳と比較しやす

いのは井ノ奥4号墳である。昭和48年に発見された時点すでに墳丘の3分の2が失われていた前方後円墳で、調査では二段築成の墳丘に葺石がよく遺存していた。古曾志大谷1号墳と同様に上段に大きめの石を置き、下段にはやや小さめの石を置いているが、特に後円部下段の一部では石を横向きに貼っている。小さめの石は後円部から前方部中央付近まで、そこから先端部までは長さ50～60cmの細長の石を縦方向に並べているが、削り取られた墳丘断面の旧地表面の傾斜の具合から、これも基本的に地山部分と盛土部分の相違によるものと考えられる。なお、このことに加えて、後方部基底石も部分的に不整合なラインを描くところから、古曾志大谷1号墳と同様に、石を葺く複数の人が同時に作業を進めていたことが推測されるが、全体的に石を縦方向に配するだけで、一定の間隔で区画を行ったものではない。

結局、現在までのところでは、井ノ奥4号墳に類似点をいくつか見出すことができるが、古曾志大谷1号墳と同様の区画石を有する古墳は、島根県内では発見されていない。区画石の存在は、関東地方の古墳では以前から“通し目積み”として知られていたよう、西日本でも京都府・加悦郡・加悦町後野円山1号墳<sup>(2)</sup>や綾部市私市円山古墳<sup>(3)</sup>など、中期の円墳に石を縦方向に貼る例が確認されている。区画石の間隔は1m弱から2m程度でそれぞれの古墳で異なり、一定していないが、それぞれに設計の中で何らかの単位として機能していた可能性が強い。京都府乙訓郡大山崎町鳥居前古墳のくびれ部には、1m単位で基底石に変化がみられ、作業単位を表していると推定されており、区画石も墳丘に葺いていくうえで同様の機能を有していたと考えられるが、それとともに装饰的な役割、すなわち、墳丘に縦方向にアクセントをつけるという意味合いもあったに違いない。

なお、くびれ最深部コーナーに階段状に一列に石を置き、その石列を基点に両側に石を貼っていく手法や、概ね地元産の石材で貼えているにもかかわらず、遠方の宍道湖対岸産や大根島産の石を使用している点など、その他にも今後注意を要する問題が多く残されている。

## 註

1. 松江市教育委員会『史跡石屋古墳』昭和59年度保存修理事業報告書 1985年3月
2. 加悦町教育委員会『後野円山古墳群発掘調査報告書』(京都府・加悦町文化財調査報告 第4集) 1981年3月
3. 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「近畿自動車道敷設線関係遺跡(1) 私市円山古墳」『京都府遺跡調査報』第36冊 1989年
4. 大阪大学鳥居前古墳調査団『鳥居前古墳』1987年3月

### (3) 墳輪

#### 埴輪の樹立

古曾志大谷1号墳では墳丘頂部を除く各所から多量の埴輪が出土している。その大半は円筒埴輪であり、朝顔形埴輪は数個体確認されている。埴輪の樹立位置が判明しているのは後方部北東辺堀外、北東段築平坦部及び造り出しのみであった。埴輪片の出土状況(第114図)から推定すれば段築各平坦部上、墳頂平坦面の肩を囲繞し、さらに墳裾の一部および造り出しに配列されていた蓋然性が高い。

朝顔形埴輪の出土状況を見ると、造り出しに立てられた2個体を除き樹立位置を限定できる資料はなかった。しかし、墳丘崩落による流れ込みの資料を考慮にいれてもその数は限られたものであったと考えられる。流失した朝顔形埴輪の出土位置をみると東西両くびれ部付近にあり、墳頂のくびれ部に現位置が想定できる。ここは後方部を前方部と区切る基底の石列がくびれにそりつく位置にあり、墳丘調査の所見からすれば朝顔形埴輪はこの石列に接して置かれたと考えられる。この様な配列状況は前方部前面に取り付く造り出しのそれと同じであり、前方部と後方部、造り出しと墳丘の境を意識した配置とも考えられる。

墳丘から流失した埴輪の中で底部未調整の基底部がいくらか出土しているがこれらを朝顔形と考えるならば前方部北東側段築平坦面および同墳頂部、それに前方部前面段築平坦面にも樹立していた可能性もある。特に前方部前面の基底部は現位置を保っており、造り出しの北東埴輪列に対応する位置にもあたることか先述した墳丘のポイント以外にも朝顔形埴輪を配列していたとも考えられる。ただし、朝顔形埴輪が必ずしも未調整の底部を持つとは限らず、また特異な形態とはいえ底部未調整の普通円筒が1個体(第121図-62)確認されているのでここでは条件付で配列状況を想定するにとどめておく。

#### 二次調整

次に円筒埴輪の製作技法上の特徴について述べてみたい。大谷1号墳からは胴部外面にタガ貼り付け後ハケメを施した資料がいくつかある。保存状態の良好なものにはB種ヨコハケが観察できる。中には口縁部にも二次調整した個体も認められた(第116図-44)。基本的には土師質、須恵質を問わず認められる。他の甌性との対応関係は接合資料の制約もあり明確にし得なかつたがヘラ記号を持つ資料に二次調整が認められる傾向にある。

#### 焼成

埴輪の焼成具合をみると土師質、須恵質の両方が存在している。須恵質のものは個体全体が硬質なものから部分的に須恵質なものまである。土師質のものは全体的に風化が著しいが、黒斑はないようである。須恵質埴輪で注目されるのは、一般の円筒に比べその形態が著しく歪んだものが存在

することである。底部が円形で口縁部が歪むもの（第115図-4、第121図-62など）、全体に押し潰されたように扁平なもの（第123図-88）などがそれであり、歪みの程度は個体によりさまざまである。この類例は奥才1号墳<sup>(2)</sup>（八東郡鹿島町）、陰田35号墳<sup>(3)</sup>（鳥取県米子市）で確認されている。両者とも二次的なハケメと下端部の切除を省略した（後述）底部調整をもち、6C前葉の時期があてられている。大谷1号墳出土例を見る限り焼成時の焼き歪みの痕跡が認められないことから本報告では意図的に造りだされたと考えた。特異な形態であるためにわざにその性格を論じることができないが、後方部北東墳裾外列の状況は普通円筒と変わることがない。今後の検討課題としている。

#### 底部調整

円筒埴輪の製作技法については詳細な研究があり、底部調整についても技法変遷の観点からその成立が論じられている。それによると、「粘土紐の巻き上げ—調整—タガの貼り付け」という作業手順（「小工程」）の反復によっていた製作技法が、「基部の上から口縁部まで粘土紐を一括に巻きあげる」方法に変化した結果、成形の完了した埴輪の基部が自重によって変形するためこれを「再調整」することであると説明されている。<sup>(4)</sup> 大谷1号墳資料の底部調整もこれと同じ理由で施されていると思われるが、そこには特徴的な技法が観察できる。以下作業手順を追って技法を復元してみたい。

成形の終わった円筒埴輪は先述したように、軟弱な底部が自重に耐えかねて変形する。これを倒立させ、基底部内面に親指を入れ、挟むように変形した箇所を伸ばし整える。その際、基底部外面の押圧に板状工具を使用したと考えられる資料がある（第116図-15、-42）。この段階で基底部の一次調整の下半（正立時）は消されるが、僅かにハケメの痕跡をとどめる資料がある（第118図-33）。内面にはわずかに指頭圧痕を残すものが多いがヘラ状工具の痕跡を持つものもある（第117図-30）。次に基底部内外面にハケメを施す。倒立した状態で行うため工人から見て下から上に向かって原体が移動する（当然、正立時には基底部を上から下に向けたハケメのように見える）。これにより基底部の一次調整は全く消えるか、第一段のタガよりに部分的に残る（第116図-16など）。中にはタガの下面にハケメの始点が残っているものもある（第118図-33）。最後に基底部下端を工具で平滑に切りとる。比較的保存状態の良好なものにはヘラ削り特有の砂粒の移動とハケメ条線の巻き込みが観察できる（第115図-5、第123図-88、第124図-90、-94）。当然基底部の二次的なハケメはその終点を失う。以上のような技法によって調整された基底部の断面形態は端部に向かって薄くなり下端面が内外面に対し明確な稜線をもって平坦になるという特徴を持つ。

以上底部調整について述べたが次にこの技法の編年的位置について若干述べてみたい。大谷1号墳と同様の底部調整技法は向山西2号墳<sup>(5)</sup>（松江市大庭町）の円筒埴輪に確認されている。この古墳は全長19mを測る前方後方墳で葺石を持ち、墳裾および前方部墳頂平坦面で円筒埴輪列が検出

されている。主体部は削平を受け不明であるが副葬品と考えられている須恵器が古曾志人谷1号墳のそれに若干後出する要素をもっている。出土した円筒埴輪は3段のタガを有するもので底部調整は全個体で確認されるという。興味深いことに大谷1号墳で確認された基底部外面の円形削離がここでも認められる。やや距離があるが宮山3号墳<sup>(9)</sup>(安来市荒島町), 東宗像2号墳<sup>(10)</sup>(鳥取県米子市)でも同様の底部調整が認められる。

奥才1号墳(八束郡鹿島町)は全長約10mを測る方墳で木蓋の小堅穴式石室をもつ。この主体部上から円筒埴輪が出土しているがその底部調査は大谷1号墳例とはやや様相が異なる。先細りする基底部の断面形態は共通するがその外表面はともに押圧痕をとどめ下端部の切除がなされていない。主体部に副葬された須恵器は山陰の須恵器編年Ⅱ期にあてられており大谷1号墳より後出する。これと同じ技法が認められる古墳には山代二子塚古墳<sup>(11)</sup>(松江市山代町), 岡田山1号墳<sup>(12)</sup>(松江市大庭町)などがある。前者は全長約90mの大形の前方後方墳として知られており後者は銘文を持つ大刀を副葬することで著名である。岡田山1号墳は横穴式石室を持ち概ね6世紀後半代の実年代があてられている。山代二子塚古墳については時期を限定する資料に乏しいが、ここでは従来の年代観にしたがい6世紀中葉以降をあてる。以上6世紀代の円筒埴輪の底部調整は大谷1号墳例の工程からハケメによる再調整と下端部の切除を省略したものであることが判る。

比較的の古相の須恵器を作り古墳の埴輪についてみると、井ノ奥4号墳<sup>(13)</sup>(松江市矢田町)は全長57mの前方後円墳で、出土した埴輪に底部調整は無いという。石屋古墳<sup>(14)</sup>(松江市東津田町)は一辺40mの造り出しが二つ付く方墳であるがこれも底部調整は認められていない。

以上簡単に底部調整に限り5世紀末から6世紀代の技法の変遷を概観してみたが、古曾志人谷1号墳で典型的かつ良好に認められた技法が当地方における底部調整の初源の形態を備えていることが判ると思う。底部調整が円筒埴輪製作の基本工程であった「小工程」の省略と密接な関係をもって導入されたことは既に指摘されている通りである。この視点に立ってみるとこれまでに述べてきた底部調整の技法の変遷は、6世紀代の当地方では底部調整自体が省力化の傾向をもって変遷したと考えられる。

## 註

1. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年
2. 鹿島町教育委員会『奥才古墳群』 1985年
3. 米子市教育委員会『陰田』 1984年
4. 註1に同じ
5. 円筒埴輪の各諸名について、島根県教育委員会『出雲岡田山古墳』 1987年 に準拠する。
6. 出雲地方の円筒埴輪を網羅的集成・検討をおこなった井上寛光氏は底部調整された埴輪の断面形態をV字形, U字形, U字形の3種類に分類しており、大谷1号墳例はU字形に対応すると考えられる。

- 井上寛光 「出雲の円筒埴輪」『松江考古』 第5号 1963年
7. 門脇俊彦 「向山西古墳群調査概報」『松江考古』 創刊号 1978年
8. 註6と同じ
9. 安来市教育委員会 『宮山古墳群』 1974年
10. 財団法人 猪根県教育文化財団 『東宗象遺跡』 1985年
11. 註2と同じ
12. 山本 清 「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』 1960年
13. 山本 清 「古墳」「八雲立つ風土記の丘周辺の文化財」 1972年
14. 註5と同じ
15. 実年代についてはこのほか6世紀前半、7世紀初めなど諸説あり、その詳細な検討がなされている。  
註5文献および、シンポジウム「岡田山1号墳研究の現状と今後の課題」『島根考古学会誌』第1集 1984年
16. 渡辺貞幸 「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』23 1983年  
渡辺貞幸 「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』 1986年
17. このほかにも下端部のハケメ再調整を省略した例が伝板梨投出土資料に存在しており(註6)工程省略にもいくつかの様相が存在することを想定しなければならない。
18. 国崎雄二郎 「松江市井ノ奥4号墳の調査」『考古学ジャーナル』120 1976年
19. 註6と同じ
20. 松江市教育委員会 『史跡石屋古墳』 1985年
21. 昌子寛光氏御教示。
22. 昌子寛光氏によると金崎1号墳にも人谷1号墳例の底部調整が認められる資料があるという。底部調整の導入の上限もやや遅る可能性がある。
23. 今後の検討課題を多く含むが、特に埴輪の生産体制と需給関係という視点から技法の整理・検討が今後も必要と思われる。

#### (4) 須恵器

##### 時期の検討

出土した須恵器のうち大谷1号墳に伴うものは前方部前面の造り出し付近、前方部第2主体上、前方部墳頂平坦面、および墳丘の周辺から出土している。量的に見ると造り出し付近からの出土が殆どで主体上の須恵器は壺1個体、墳頂上は高杯形器台1個体であった。墳丘周辺出土のものは造り出し出土須恵器と接合関係にあることからこの古墳の須恵器は前方部および造り出しに限られる。これらの器種構成を見ると無蓋高杯、有蓋高杯、小形直口壺、甕、子持ち壺、器台、壺が出土している。以下その検討を加える。

造り出し出土の資料を型式学的特徴を各器種ごとに見るとおおまかにいって新しい様相と古い様相の2時期に別れるようである。高杯では杯部外面の稜線および体部との屈曲が比較的明確で、脚端部の作りもシャープなもの(第134図-12など)と、そうでないもの(同-13, 10)がある。壺

では口縁部を残す3個体について口縁端部、施文、胴部内面の叩き当て具痕のナデ消しの諸点を比較すると20-21-22の順に新しい様相が窺える。直行壺では口縁部の長短、胴部カキメの有無と言う違いがあるが削りだした平底を持つ点では共通する。

前方部上体上の壺は小形で叩き成形時に無文の当て具を使用した可能性がある。同様の形態の壺が無いため一概に比較できないが子持ち壺の観器の口縁形態と比較して、作りがシャープさに欠ける点から若干後出する資料と考えたい。

大谷1号墳資料と似た特徴を持つ須恵器を出した古墳に金崎1号墳<sup>(1)</sup>(松江市西川津町)、薬師山古墳<sup>(2)</sup>(同)がある。これらは当地方の須恵器編年のI期の指標となっている。これらとの比較から須恵器の示す時期について考えてみたい。まづ、無蓋高杯について見ると口縁端部は丸く納め脚端部の稜線が肉者に比べ丸みを帯びている。体部には把手が付かない。有蓋高杯について見ると、金崎古墳から同形態のものがありそれらに比較しても口縁端部の単純化が窺える。腹は頸部から上がりや開きぎみに長く取り付くもので金崎・薬師山例は短く直線的な形態を示す点で違いを見せていくが、口縁端部は若干シャープさを残している。小形直行壺には比較しうる好例が無いが口縁端部の特徴は高杯と同様丸く納めている。筒形器台は上部を欠損しているが金崎例とほぼ同じ大きさと思われる。筒部と脚部の境に突帯を持ちさらに内凹するやや膨らみぎみの脚を持つ点で異なる。壺については両古墳で出土例が無いため比較できないが内面のタキメが残っていることが注目される。以上高杯などの比較からすれば、金崎1号墳、薬師山古墳出土須恵器に比べ若干後出する資料と考えられる。当地方の須恵器編年の中で位置づけするなら總体としてI期の範疇でも新しい部類になろうか。

#### 子持ち壺

破碎された須恵器のうち子持ち壺を見ると親壺と同様の形態を持つ子壺が3個取り付くもので観壺胴部の接合位置に焼成前の円孔が穿たれている。これに類する資料としては増福寺20号墳<sup>(3)</sup>(八束郡八塙村)の子持ち壺がある。これは親壺と同様の形態の子壺が4個取り付くもので、子壺胴部に円孔はない。子壺が接合する親壺の器壁に凹孔が開けられている。観器の形態的特徴からすると山陰の須恵器編年I期の範疇に納まるものであろう。

これらを6世紀代の子持ち壺と比較すると脚を持たない、子壺が親壺の形態を忠実に反映しているといった点で大きく異なる。当地方の子持ち壺はこれらの点に加え親壺に底部が無いという特徴を持つ。<sup>(4)</sup>装飾付須恵器に関する研究によれば「装飾付壺と器台との統一・一体化」としてその成立過程が明らかにされている。6世紀代に盛行する子持ち壺はこの過程を経たより形骸化=仮器化した形態を示しているとできる。この型式組列に照らしてみると大谷1号墳例は未だ器台との結合を見ず、両者が密接かつ機能的独自性を保っている段階の所産であると考えられる。

## 土器祭祀

大谷1号墳造り出しでの遺物の出土状況の特徴については報告部分で触れたように破片が細かく概して散漫な点にある。造り出しを持つ古墳の調査例としては石屋古墳<sup>(9)</sup>(松江市東津田町・矢田町)があげられる。この古墳は対する二辺に造り出しを持つ方墳で一辺40mを測る。北側造り出し部の平坦面から各種形象埴輪、土師器と共に壺、大形器台が出土している。須恵器・土師器を交えた祭祀が造り出し上で行われたと考えられる。このほかに大庭鶏塚古墳<sup>(10)</sup>(松江市大庭町)は相接する二辺に造り出しを持つ40m余りの方墳である。発掘面積が限られたため具体的な様相ははっきりしないが南側造り出し付近から器台などの須恵器片が出土している。

大谷1号墳造り出しで土器を破碎した状況が観察できたが、前方部の主体上から出土した壺を見ると墳頂部で底部穿孔を行った事が確実で、造り出しの土器破碎に通じる行為とも考えられる。土器破碎を伴った祭祀についてにわかにその性格を論じることはできないが、共に祭祀の最終段階でその再使用を否定する行為には違いない、大谷1号墳の祭祀を特徴づけている。さらに先述した子持ち壺について触れると、横穴式石室導入以前の古墳出土例はほぼ首長墓クラスに限られ、かつ墳丘上もしくは造り出しで他の須恵器と伴出す。この点に関して、装飾付須恵器が首長墓固有のものであり「首長墓における葬送儀礼の場で使用される」ために作られた「儀礼用土器」であると指摘されている。<sup>(11)</sup>この視点に依拠すれば大谷1号墳造り出しにも同様の祭祀形態を採っていた可能性が高く前述の土器破碎と共に当時の首長墓葬送儀礼の一端を示す例と考えられる。

## 註

1. 山本 清「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』 1960年
2. 山本 清「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集(人文科学)』 1955年
2. 註1と同じ
4. 山陰須恵器編年Ⅰ期の良好な比較資料が乏しく、厳密な編年の位置づけにはなり得ていない。ただ、大谷1号墳資料が総体的に新しい要素をもって構成されることから型式を設定する上で良好な一括資料として扱うと考えている。
5. 八雲村教育委員会『増補寺古墳群発掘調査報告書』 1982年
6. 註5文献では古墳群出土資料から山陰須恵器編年Ⅰ期を3細分する試案を提示している。その中で20号墳出土の子持ち壺にはⅠ期中葉をあてている。
7. 子持ち壺の研究としては註1文献および、昌子寛光「出雲の子持壺」『古文化叢書』第18集 1987年がある。昌子氏はこの中で「腹窓に底が無く、壺部と脚部の区別が不明瞭で脚部が円筒状になるもの」「無脚で胴長丸底」の物が出雲地方を中心に分布する点に注目してこれらを「出雲型子持壺」と提唱している。
8. 岸本雅敏「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』 第22巻第1号 1975年
9. 松江市教育委員会『史跡石屋古墳』 1985年
10. 松江市教育委員会『史跡大庭鶏塚発掘調査報告』 1979年

11. 柴2号墳の主体部上からは須恵器の細片が集中して出土しており破砕をともなった祭祀が想定されている。報告によると破砕された壺は「定型化する以前の須恵器」であるという。須恵器に限らず土器の出土状況の把握については今後も注意を要すると思われる。

松江市教育委員会『柴古墳群』1985年

12. 註8と同じ

#### (5) 主体部

古曾志大谷1号墳の後方部中心主体部は、後世の地滑りにより流失し失われていた。よってここでは前方部で検出された主体部について簡単に触れてみたい。

まず前方部の主体部が造られた時期については、古墳の築造時期から若干下る可能性がある。この主体部に確実に伴うのは須恵器の壺（第127図）1点であるが、前方部墳頂で出土し、口縁部のみ打ち欠いて造り出しから出土した小形器台（第134図13）も壺とバランスのとれた大きさで、前方部主体にともなって使用された可能性がある。本章須恵器の項で触れたように、これらの須恵器は本古墳築造時と考えられる須恵器に比して新しい要素が多い。前方後方墳の場合、中心主体は後方部のそれであり、前方部の主体は副次的に後に造られたことは充分考えうることであり、本古墳においてもその可能性を指摘しておきたい。

ところでこの主体部は、木棺の周りに碟を配置した碟部状のものである。ただし、棺底の部分には碟を置かず、棺底は緩やかなU字形を呈すものと推定される。近辺で本例に類似するものをあげると、まず松江市東生馬町のかいつき山古墳をあげることができる。<sup>(1)</sup> この主体部は、碟の数は少ないものの、棺の周囲を碟で囲んだもので、木口辺に大形碟を直立させる点や底には碟を置かない点、直上に壺を供獻する点など本例とまったく同様である。ただこの古墳は古式十師器が出土しており、本例よりかなり時期の遡るものであることから、直接的に系譜が辿れるものは不明と言わざるを得ない。しかしながら大谷1号墳とは佐陀の平野をはさんだ近い位置に当たり注目される例である。

時期が近いものでの類例では、松江市菅田町菅田丘古墳があげられる。これは「床面には小形の割石を敷き並べ、周間に碟塊をやや無造作に置いた構造」<sup>(1)</sup> という。また時期が下るものでは鹿島町奥才1号墳が簡略な竪穴式石室をもっている。<sup>(2)</sup> これらは共に大谷1号墳例とは趣を異にしているが、木棺の周りを碟で囲繞する方式は同様である。

以上のように、本例の直接的系譜を辿るのは現状では難しい。しかし、松江市の湖北地域には上述したような木棺を碟で囲繞する施設が古墳時代前期～後期前半にかけて断片的ながら知られており、本例もその流れのなかで捉えることができるであろう。

## 註

1. 山本 清 「松江・かいつき山古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅳ集 1972年 島根県教育委員会
2. 鹿島町教育委員会 「奥才古墳群」 1985年

## (6) 副葬品

大谷1号墳の前方部主体の副葬品は大刀1, 刀子2, 鉄斧1, 鉄鎌40であった。大刀は刃部と茎部の境に矩形のくり込みを持つものである。このような特徴を持つ大刀はいわゆる玉継の大刀の可能性があり5世紀後半から6世紀前半に盛行すると指摘されている。<sup>(1)</sup>県下で出土例を見ると奥山遺跡<sup>(2)</sup>（松江市浜乃木町）B-12穴, 上塙治築山古墳<sup>(3)</sup>（山陰市塙治町）が知られている。前者の場合100年近く伝世されたと考えられており儀仗用の大刀の扱われ方に特徴がある。

鉄鎌はすべて長頸片刃のものである。同様の例は観音寺2号墳<sup>(4)</sup>（松江市馬潟町）、仲仙寺2号墳<sup>(5)</sup>（安来市西赤江町）で知られている。前者は木棺直葬の方墳で、大刀、刀子と同様棺外に副葬されていた。時期を決定できる資料に乏しいが5世紀後半にあてられている。後者も木棺直葬墳で棺外に鉄鎌が副葬されていた。周溝内から土壇墓が検出されておりここから出土した須恵器から本古墳の年代に5世紀後半があてられている。山崎古墳<sup>(6)</sup>（松江市西川津町）では両刃の長頸鎌と合わせて47本程度棺内に副葬されていた。この古墳ではそのほかに劍4, 大刀1, 鋏2が出土しており豊富な鐵器の副葬が目立つ。このほか築山古墳<sup>(7)</sup>（八束郡玉湯町）では舟形石棺の外で同様の鎌が出土している。

刀子は2点出土しているが全体を観察できる資料は1点であった。それを見ると刃部に反りはない、棟と茎部の境に闊は見られない。大谷1号墳に若干先行すると考えた金崎1号墳<sup>(8)</sup>では闊を有するものが出土している。

以上大まかに言えば、5世紀後半から6世紀前半の時期に副葬例が多いことがわかる。

## 註

1. 大和久慶平 「玉継大刀について」『八幡一郎先生顕彰記念考古論集 日本史の黎明』 1985年
2. 島根県教育委員会 『奥山遺跡発掘調査報告書』 1988年
3. 出雲市長公室 『週報 いすも』 No.1401 1984年
4. 門脇俊彦 「松江・観音寺古墳群」『島根県埋蔵文化財調査報告』第Ⅳ集 1972年
5. 島根県教育委員会 『仲仙寺古墳群発掘調査報告書 第2次緊急調査報告一』 1971年
6. 松江市教育委員会 『山崎古墳』 1984年
7. 島根県教育委員会 『島根の文化財』第3集 1963年
8. 松江市教育委員会 『史跡金崎古墳群』 1978年

## (7) 造り出し

古曾志大谷1号墳の前方部先端には造り出しが付設されている。この造り出しの両側には、埴輪がそれぞれ近接して並べられ、上面から裾にかけて多量の上部器高杯や須恵器が出土するなどは、ここが特別な場所であったことを示している。土師器の表面が赤色顔料で飾られ、須恵器は破碎された可能性が高いことなどを考慮すると、この造り出しがいわゆる祭壇的機能を果たしていたことは想像に難くないであろう。

また造り出しから出土した須恵器の接合関係から興味深い事実がわかった。筒形器台（第135図15）はくびれ部や墳丘、墓外などから出土した破片と接合しており、破碎されたうえ造り出しを含む墳丘各所にばらまかれたことがわかる。胴部のみ復元できる臺（第136図19）なども同様の使われ方をされた可能性がある。一方小形器台13（第134図）は、大部分が前方部頂上を中心出土し、口縁部のみ打ち欠かれて造り出しから出土している。この器台は同様の器種である12に比べて明らかに新しい要素を持つものであり、また主体部の頭で触れたように前方部主体部に関わる可能性もある。想像力をたくましくするならば、前者のようなあり方は、墳丘築造にかかる祭祀を想起させるし、後者のようなあり方は埋葬にかかる祭祀を想起させるものといえる。いずれにしても造り出しが行われたであろう祭祀は、単一の性格、時期のものではない可能性が高く興味深い。

ところでこうした造り出しが付設されるは出雲地方の中期～後期の人形古墳において珍しいことではない。松江市矢田町石屋古墳<sup>(1)</sup>、大庭町大庭鶴塚古墳<sup>(2)</sup>などでも造り出しの存在が知られている。このうち発掘により様相が明らかになっている、石屋古墳の例と比較してみたい。石屋古墳は、辺約40mの大形方墳で、人谷1号墳と同様に大橋川を見下ろす丘陵上に位置する古墳である。この古墳には南北に2ヶ所の造り出しが付設されており、そのうち北側のものは9.6m×5.4～5.6m、高さ1mの方形台状で、両側邊に円筒埴輪が近接して並び、中央から多量の形象埴輪、須恵器、器台、土師器などが出土している。こうした状況からこの古墳において造り出しが何らかの祭祀の場と推定されている。この石屋古墳の状況は、形象埴輪を除けば大谷1号墳の造り出しの状況ときわめて類似している。出土する土器に最も一般的な器種である蓋杯がないことも同様であり、また時期も石屋古墳のほうが若干古相を示すもののきわめて近い時期と考えられる。よって両者が同様の機能を有す造り出しある可能性が高く、5世紀後半前後の古墳にはこうした祭祀の場である造り出しが今後も発見される可能性がある。ただ、石屋古墳の南造り出しのように若干様相の異なる造り出しあり、必ずしも単一の機能のもののみとは限らないので注意が必要であろう。

## 註

1. 松江市教育委員会『石屋古墳』 1985年
2. 松江市教育委員会『史跡大庭鶴塚発掘調査報告』 1979年

## 2. 古曾志大谷1号墳と周辺の古墳

### (1) 古曾志町周辺の古墳の変遷

古曾志大谷1号墳の築かれた古曾志町は、『出雲國風土記』にいう「佐太水海」の西側にあり、古墳時代中期の大形古墳が集中する。宍道湖北東部の中心地域のひとつである。この地域では前期の古墳はまだ発見されていないが、数キロ北方の佐太川上流の講武地域は、四隅突出型墳丘墓の可能性のある南講武小廻遺跡や前方部端がバチ形に開いた古式の名分丸山1号墳など、弥生終末期以来の古い古墳が継続して築かれる地域として注目されている。特に、奥才古墳群は7支群52基の古墳群のうち、5支群26基が調査され、前期後半から後期初頭にかけてこの地域に特徴的に分布する箱式石棺や砾床を主体部に採用したものが多く検出された。<sup>(1)</sup>ほとんどが一辺10m前後から20m程度の小形の方墳であるが、副葬品には14号墳（円墳）から、素環頭大刀、紡錘車形石製品、内行花文鏡などが、また、土師器壺を主体部にした34号墳からは石鏡、勾玉などが出土するなど、比較的豊富な内容となっている。これを報告者は、渡辺貞氏の説を受けて最高位の首長には及ばないものの、その基盤となる単位地域内では卓越した階層と位置づける。しかし、その首長墓はといえば、現時点ではこれらの古墳群のはかに、前方部が鏡柄形の前方後円墳である鶴澤山6号墳などが確認されてはいるものの未解明な部分がほとんどで、現状で議論を進めるにはなお躊躇されるところである。講武地域でも前期後半から中期にかけては、名分藤山古墳や壠部古墳などが築かれるが、40mを超える規模のものはない。これ以後、大形古墳の築造は古曾志町を中心とした宍道湖沿岸地域に移ったといえよう。

宍道湖沿岸には、東から古曾志大塚1号墳（円墳、47m）、丹花庵古墳<sup>(2)</sup>（方墳、47m）、古曾志大谷1号墳（前方後方墳、45.7m）、山崎1号墳（前方後円墳、34m）、大垣大塚1号墳（円墳、51m）、同2号墳（方墳、36×33m）、平廻古墳（前方後方墳、44m）の7基の大形古墳が知られている。このうち大垣大塚古墳群と平廻古墳の位置は、律令制では秋鹿郡の西端の大野郷と伊野郷に相当し、宍道湖岸でもほかの古墳群と著しく離れた場所に築かれている。なぜ突然この地に人形古墳が築かれるようになったのか、その背景については今のところまったく判っていないが、ともかく、大垣大塚2号墳は墳頂部にかなりの平坦面を有することから古式の方墳と考えられており、隣接する1号墳もこれに近い年代が与えられる。丹花庵古墳は、主体部の長持形石棺から中期前半代に置くことができ、古曾志大塚1号墳はその墳形と出土埴輪から中期後半代の築造が考えられる。中期末頃の古曾志大谷1号墳はこれに統く最終段階の大形古墳ということになり、これ以降、この地域には大形古墳は築かれなくなる。未調査の人形古墳がどのような主体部かは判らないが、前期以来の砾床施設は古曾志善坊1号墳でも確認されたし、古曾志大谷1号墳前方部の砾層状主体部はもちろんのこと、後方部中央付近で出土した小円砾も主体部に砾床があったことを推定させた。このことは、

古曾志町周辺で最後の大形古墳にも前期以来の伝統が受け継がれていたことを窺わせる事象であるといえよう。

後期の状況については第4章で触れたとおりで、特に横穴式石室の資料に乏しく、全体的な解明は今後の調査研究に期待するところが大きい。ただ、寺津古墳のような切石の小形石室に関連して、古曾志大谷4号墳の小形石棺について若干触れておきたい。大谷4号墳の石棺は、厚さ18cmの板状切石を用いて小口側壁を挟み込むようにして側石を立てたもので、内法で長さ×幅×高さが70×35×35cmの極めて小形の石棺である。島根県ではこれまでに切石の小形石棺が墳丘内に直接埋葬された例はなく、退化あるいは小形化した家形石棺や石棺式石室からの影響も推測されるが、直ちにその系譜を辿るのは不可能である。内法がきれいに2:1:1の比率になるのは、大阪府羽曳野市ヒチゾジヨ西古墳<sup>(6)</sup>など、奈良県明日香村高松塚古墳に代表されるような横口式石棺の一部に認められ、島根県でも松江市朝霧町翫原1号墳<sup>(7)</sup>のような横口式石棺が存在していることから、これらからの影響を推定することも可能である。その系譜がいずれにせよ、この大谷4号墳が、7世紀代の終末期の古墳であることは間違いかろう。

## 註

- 鹿島町教育委員会『名分丸山古墳群測量調査報告書』1984年
- 鹿島町周辺の類例については、鹿島町立歴史民俗資料館『古代狭田王国の興亡』1989年10月に詳しい。
- 鹿島町教育委員会『奥才古墳群』1985年3月
- 鳥根大学考古学研究会『鶴瀬山古墳群』『菅田考古』第16号 1983年9月
- 丹花庵古墳については、梅原末治『出雲八束都の「装饰古墳」』『歴史と地理』26-3 1930年、野津左馬之助『第十章島根県内の著しき古墳』『島根県史』第三卷 等があるが、ここでは山本清『山陰の石棺について』『山陰文化研究紀要』8号 1967年12月を参考にした。
- 羽曳野市教育委員会『羽曳野の終末期古墳』羽曳野市の文化財第1集 1981年9月
- 鳥根大学考古学研究会『翫原古墳群について』『菅田考古』第14号 1976年

## (2) 出雲の中期古墳

出雲地方においては古墳時代前期には東部を中心とした地域に大形古墳が築造されたのが、中期になると中海、宍道湖をめぐる各地に大形古墳が築造されるようになる。古曾志大谷1号墳が築かれた古曾志町周辺もその中の一地域であり、大谷1号墳の特質を明らかにするために出雲全体の古墳のあり方について若干の考察を行ってみたい。なお、本来なら個々の古墳についても検討を加えていき、小形の古墳も視野に入れて考えるべきであるが、紙面、時間、筆者の能力を超える間

題となるのでここでは大形古墳の分布のありかたをもとに考えてみる。よってきわめて大雑把な議論になることをお断わりしたい。なお、ここでいう中期古墳とはおよそ5世紀代～6世紀前半（横穴式石室導入前）をめどとしている。

近年、出雲地方の古墳については渡辺貞幸氏により多くの論考がなされている。そのなかで渡辺氏は中期古墳のあり方から、後代の山代二子塚、大念寺古墳に代表される東西の2代霸権成立前の緩やかな「首長連合」を想定している。<sup>(1)(2)</sup>確かにこの時期に、各地で地域勢力が成長して何らかの関係を取り結び、大形古墳を築いたことは間違いないものと思われるが、その関係が果たして一様のものであったかは疑問である。<sup>(3)</sup>図3、4は出雲地方中期の前方後円墳、前方後方墳、大形方墳、円墳の分布をおとしたものである。前方後円墳の分布を見ると、一見万遍なく全地域に築造されてい

るよう見える。しかし前方後方墳の分布には明らかにかたよりが見られる。すなわち、入海の北側では旧島根郡、秋鹿郡の範囲、南側では意宇郡のうち東は飯梨川、西は忌部川に挟まれた地域のみに前方後方墳は築かれているのである。この範囲は大形方墳の分布域とも一致している。もう一度前方後円墳の分布域に目を返すと、この前方後方墳分布域は大形墳の集中地域にかかわらず、前方後円墳の密度は低く、飯梨川東岸の前方後円墳の密度の高さと対照的である。墳形のみでの比較ではあるが、西嶋定生氏がいう身分秩序の表現であるかは別にしても、墳形が目に見える第一義的



図3 出雲地方の前方後円墳、前方後方墳分布図  
(前期古墳、横穴式石室をもつものを除く)

註7文献より作成

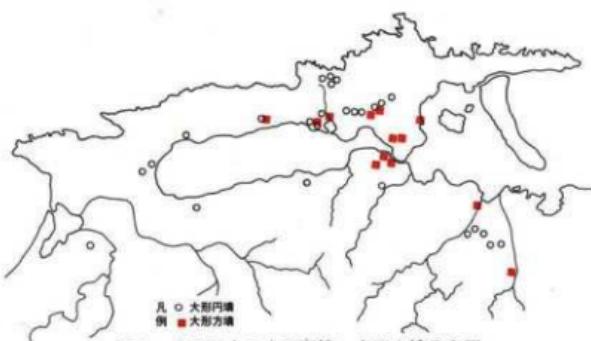


図4 出雲地方の大形円墳、大形方墳分布図  
(前期古墳、横穴式石室をもつものを除く)

註7文献より作成

な古墳の差を示す要素であることは間違いない、この墳形分布域の差は地域の何らかの政治的立場の違いを反映しているものと考えられる。これは、後の古墳時代後期に築かれる「石棺式石室」の分布範囲が、この前方後方墳分布域にはば重なることからも傍証されよう。<sup>(5)</sup>

さて、この前方後方墳域について、もう少し詳しく検討してみたい。まず特徴としてあげられるのは、大形の前方後円墳が現在の松江市南郊山代町、矢田町周辺に集中していることである。他の地域にも断片的に存在するがいずれも小形である。しかもこの地区的前方後円墳は、いずれもこの前方後方墳域のすべての古墳のなかで最大級のものであり、松江市南郊地区がこの地域のトップ首長であったことが窺える。

一方他の地区的状況はどうであろうか。前期に大形古墳が築かれた安来市荒鳥周辺では、前方後方墳が累代築かれている。また古曾志大谷1号墳が築かれた松江市古曾志町周辺や大垣町周辺、西川津町周辺では累代の首長墓がそれぞれ前方後方、方墳、円墳と墳形を異にしている。松江市法吉町周辺や、鹿島町講武周辺もそれに準じたあり方を示す。また興味深いことに、松江市南郊地区的No.2クラスの古墳は、同様に3種の墳形が混合している。

以上のような状況をどのように解釈するかは、墳形のみでなく内部主体や副葬品、あるいは小形古墳のあり方までを含めて総合的に検討しなければ明らかにはしないが、ここでは一つの仮説を提示しておきたいと思う。こうした前方後方墳や方墳が多いことから、これらの墳丘を「出雲的世界」の特質として位置づける考え<sup>(6)</sup>があったが、古墳が畿内勢力を中心とした政治的結合のモニュメントであるならば、そうした議論が成り立たないことは渡辺貞幸氏が力説している通りである。<sup>(7)</sup>とすればこの前方後方墳分布域（出雲地方中央部）は畿内中央勢力からの何らかの政治的働きかけ（規制）を反映した結果生じたものと考えられる。このことは、その隣接地の状況と比較すると一層浮き彫りにされる。飯梨川東岸の群集墳内に爆発的に築かれる前方後円墳はその地域の経済的優位性を表しているとは考えられず、政治的に付与されたものと理解すべきであろうし、後期になり横穴墓にきわめて優秀な副葬品を副葬することもこの地域への政治的優位性の付与と理解できないだろうか。また後期に出雲地方西部に突然出現する大形古墳も、外部からの「てこいれ」を想定したほうが考えやすい。以上のような前方後方墳分布域に隣接する地域の「不釣合」ともとれる優位性は、前方後方墳分布域への規制に連動した畿内勢力の政治的はたらきかけの結果と考えたい。

こうした規制によって生じた墳形分布に表出される範囲（前方後方墳分布域）が、比較的広い地域であることは、その範囲内の各小地域が強く結びついていたことを想起させる。しかも、各小地域を細かく見れば、地域内のヒエラルキーを結果的に現出しているかのように見える首長墓墳形のあり方の差は、畿内中央勢力が墳丘規制を行なうにあたって、各小地域毎でなく、この地域全体に対して墳形の総量規制のような形をとったと考えるほうが解釈しやすい。前方後円墳はきわめて少な

い数（1世代で2,3基か）しか築造できないため、トップ首長たる松江市南郊の1地域に集中し、他の小地域では小形で断片的である。それを補完するように前方後方墳が築かれるが、それも各小地域にすべて行き渡る数ではないため、小地域によっては方墳、円墳が築かれる。そうした小地域では墳形は輪番的に与えられるため、一世代ごとに首長墓の墳形が違う小地域が多く現れると理解するのである。もちろんこうした考えは、各小地域のそれぞれの古墳の時期、内容を比較してはじめて証明できることであり、あくまでも一つの見通しとして記しておきたい。

## 註

1. 渡辺貞幸「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』 山本清先生喜寿記念論集刊行会編 1986年
2. 渡辺貞幸「古墳時代の出雲」『明日香風』22号 1987年
3. 渡辺氏はこの首長連合を必ずしも一様と規定しているわけではないが、地域によるあり方の違いについての言及もされていない。
4. 出雲考古学研究会『石棺式石室の研究』 1987年
5. 池田満雄・東森市良『出雲の國』 1973年
6. 渡辺貞幸「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』第23号 1983年
7. 本庄考古学研究室「出雲の主要古墳一覧」『山陰考古学の諸問題』 山本清先生喜寿記念論集刊行会編 1986年

### 第3節 古曾志平廻田窯跡群

平廻田Ⅲ区の調査では3基の須恵器窯跡を検出することができた。その内3号窯跡については全掘をし、その構造が明らかになった。特徴としては、①長さ3.62mと小形であること、②焚口部から燃焼部にかけて床面が下がっていること、③通常須恵器の窯に見られる固く焼きしまった床面は見られず、さほど高温焼成が行われなかつたと考えられること、等があげられる。

①については、3号窯が基本的に壺、皿といった小形品のみを焼成したことに起因するもので、ほぼ同時期と推定される1号窯跡が長さ7.6mを測ることからしても、この時期の一般的な特色ではないことは明らかである。

③については、窯跡からの出土品が概して焼きがあまいことからも窺える。この窯跡出土品とよく似た松江市大草町神田遺跡SK01出土須恵器を見ると從来の須恵器のような固く締まった灰色のものは少なく、褐色系統の色調で焼きがあまいものが多い。これは、焼成温度が低く、製品の焼成状況が概して良くないことが本窯跡の特徴ではなく、この時期の須恵器小形品の一般的な特徴である可能性が高いことを示している。壺、皿といった小形日用品が須恵器から土師器に変わる直前の時期であろうか。

さて本窯跡群で焼成された器種は、壺、皿（いずれも高台が付くB類と付かないA類がある。）の小形品と、壺、甕類、提瓶等がある。これらの類例品を出土した近辺の遺跡としては、同じ窯跡では宍道町小松窯跡群<sup>(2)</sup>、消費地遺跡では前述の神田遺跡、松江市竹矢町長峯遺跡<sup>(3)</sup>、安来市黒井田町高広遺跡<sup>(4)</sup>などをあげることができる。

まず小松窯跡群の出土遺物と比較してみると、壺、甕類については口縁端部を上方につまみあげるように整形している点や、制部のタタキについても外面が深い平行タタキ、内面が同心円タタキで一

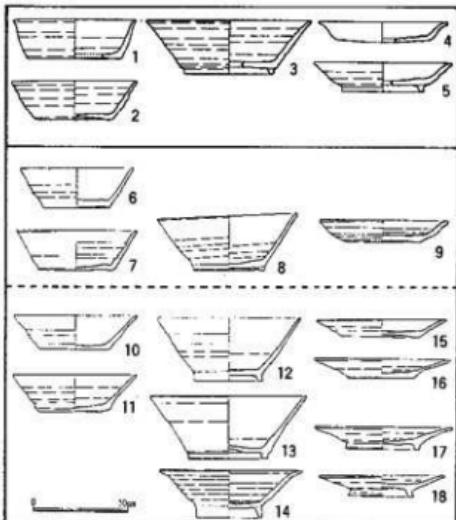


図5 9~10世紀前後の須恵器の変遷  
(1~5.小松窯跡群、6.長峯遺跡、7~9.神田遺跡、10~18.平廻田3号窯跡)

部放射状のタタキを有する個体があることなど良く類似している。しかし坏類を見ると、概して口径に比しての底径の割合が本窯跡例より大きく、また高台が底部外縁肩部よりやや内側に取りつけられるなど古い特徴を残している。また蓋が少量ながらも焼成されていることも本窯跡例より古いものであることを示している。

一方、神田遺跡、長峯遺跡出土の須恵器坏は、本窯跡群出土の坏A類にきわめてよく似ている。よって本窯跡群の時期はこの2遺跡出土土器の時期に近いものと考えられるが、底径が小さく外反気味の口縁で高台の付く皿（第87図5, 6, 7等、図5-17, 18）や、大きく口縁が外反し、外方に踏んばるような高さの高い高台が付く坏（第89図7, 8、図5-14等）等はやや新しい特徴を思わせる。神田遺跡、長峯遺跡の須恵器については、併出している長頸壺の形態と平安京周辺の同器種の比較から、9世紀末の年代が想定されている。<sup>(1)</sup> 本窯跡群出土の須恵器がこの2遺跡のものとほぼ同時期もしくは若干新相の特徴を持つものであることから、年代としては10世紀前後と考えて大過ないものと思われる。

## 註

1. 島根県教育委員会・中国電力株式会社島根支店『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予 定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年
2. 宇道町教育委員会『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』1983年
3. 松江市教育委員会『中竹欠後1号墳・長峯遺跡』1986年
4. 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年

# 図 版



図版1

古曾志善坊遺跡I区遠景  
(南東から)



同 溝状造構および竪穴住居  
状造構



同 溝状造構土層堆積状況



図版 2



古曾志善坊遺跡Ⅰ区堅穴住居  
状遺構内土層堆積状況



古曾志善坊遺跡Ⅱ区全景  
(北東から)



同。遺物出土状況(西から)

図版 3



同. 加工段全景(東から)



同. 加工段および溝状遺構  
(北から)



同. N区全景(東から)

図版 4



古曾志善坊遺跡Ⅲ区全景  
(東から)



同。(南から)

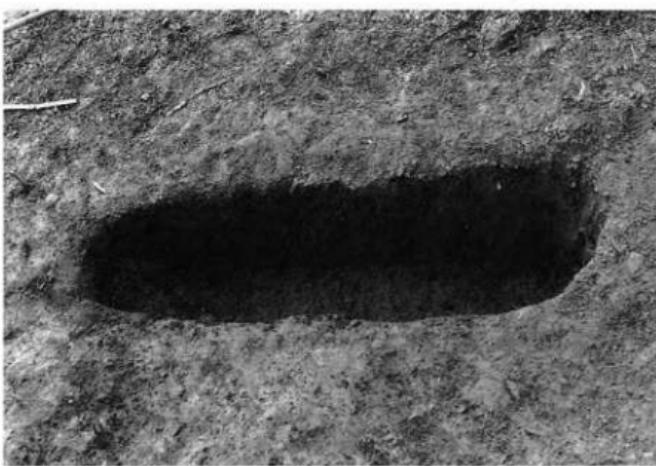


同。SK01土層堆積状況

図版 5



同. SK02・03(西から)



同. SK04(東から)



同. 土層堆積状況

図版 6



古曾志善坊遺跡Ⅲ区SK06  
(北西から)



同. SK05内土層堆積状況と  
出土遺物



同. ピット内須恵器出土状況

図版 7



同. SK09(北から)



同. 土層堆積状況

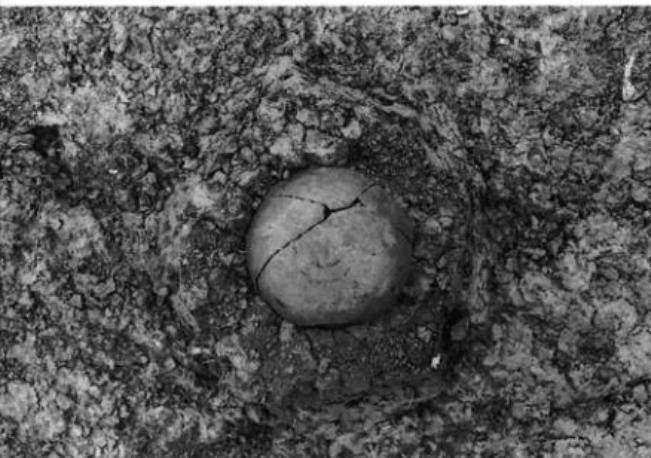


同. SD01(南西から)

図版 8



古曾志善坊遺跡Ⅲ区SD01土層堆積状況



同. 遺物包含層内須恵器出土  
状況



古曾志善坊古墳群全景  
(北西から)